

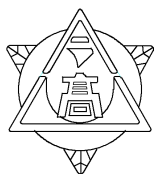
平成 2 3 年 度

研 究 紀 要

創

TSUKURU

第 1 4 号



北海道今金高等養護学校

巻 頭 言

共生社会を目指す政府の総合的な取組の中で、障害者制度改革が推進されています。教育の分野では、中央教育審議会初等中等教育分科会〈特別支援教育の在り方に関する特別委員会〉でインクルーシブ教育システムを踏まえた論議がされております。昨年改正された障害者基本法においても、教育に関しての記述は、インクルーシブ教育システムを指向した内容となっております。今後の論議に注目するとともに、望ましい方向への道筋を立てていただき、特別支援教育を発展させる制度設計になることを期待するところです。

ところで、社会の変化は障がい者にとって一層厳しい現実を突きつけています。最近、障がい者の痛ましい事故等が続きました。支えていた人の存在がいなくなると、同じ運命をたどってしまうことに、教育に身を置く者として他に何かできることはなかったのだろうかと自問しています。共生社会を目指す方向性は誰もが望むことですが、それを支える基盤が崩れていることに危機感を覚えざるを得ません。

特別支援教育では、児童生徒の社会自立・社会参加を基本的な目標としています。また、新学習指導要領でも、「生きる力」を育む教育を引き続き継承しています。私どもは、この基本的な目標が具体的に実現されるように、社会との関係も含めて日々研鑽し、実践を積み重ねていくことが必要ではないでしょうか。

さて、本校は一昨年度から第5次研究を進めてきました。研究主題を「社会参加・自立をめざした働く力の育成」として、主に教育課程の編成と授業の充実を目指した研究を推進してきました。今年度は3年次計画のまとめとして、各学年がテーマに基づいた研究を取りまとめています。

更に、プロジェクト研究としては、本校のような職業学科を置く特別支援学校高等部各校の教育支援計画と指導計画、通知表を集約し、本校としての在り方を再検討しております。もう一つはキャリア教育についてです。次年度からの第6次研究の基礎研究として進めてきました。このことにより、6次研究へスムーズに移行されることを期待します。

また、今年度から本校の研究アドバイザーとして、北海道教育大学函館校の北村博幸准教授に就任していただきました。北村先生には本校へ何度も足を運んでくださり、数多くのご助言をいただき研究が進められたことに深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、本研究は、日々の授業、部活動、生徒指導や進路指導等の多忙な日々の中で共同研究してきたことをまとめたものです。そのため内容は十分に時間をとって討議し、研究されているものとは言えません。皆様にご高覧いただき、忌憚のない意見をいただくことにより、よりよい研究にしたいと思っております。今後も、本校への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

北海道今金高等養護学校長

播 磨 正 一

目 次

< 巻頭言 >

第Ⅰ章	研究の取り組み	I - 1 ～5
-----	---------	----------

第Ⅱ章	課題研究	
-----	------	--

1 学年	Ⅱ - 1 -1 ～15
------	--------------

2 学年	Ⅱ - 2 -1 ～30
------	--------------

3 学年	Ⅱ - 3 -1 ～20
------	--------------

第Ⅲ章	プロジェクト研究	
-----	----------	--

教務部	Ⅲ - 2 -1 ～11
-----	--------------

産業科	Ⅲ - 1 -1 ～17
-----	--------------

キャリア教育	Ⅲ - 3 -1 ～10
--------	--------------

第Ⅳ章	寄宿舍の研究	Ⅳ - 1 ～5
-----	--------	----------

第Ⅴ章	研究の成果と課題	V - 1 ～4
-----	----------	----------

< あとがき >

< 共同研究者 >

第Ⅰ章

研究の取り組み

1 研究主題 「社会参加・自立をめざした働く力の育成」
～ 教育課程の編成と授業の充実を目指して ～

2 研究期間 第5次研究：平成21～23年度の3カ年

3 主題設定の理由

本校の生徒たちは、卒業後社会の一員として生活を送ることになる。それぞれの特性などにより進路先は多様ではあるが、一人一人の生徒たちは、社会の一員として自立をめざすこととなる。そのためには、在学中から「働く力」を身につけていかななくてはならない。生徒たちが社会参加や自立をめざす上で、どのように働く力を育成していくか、3カ年を通して教育課程の編成と日々の授業の充実を目指しながら検証していきたい。

働く力を幾つかの要素に分け、それらを育成するための効率的な方法を探り、実践に生かしていくことをめざし、本主題を設定した。

4 研究組織と内容

課題研究：各学年（国語、数学、生単、作業から2つ以上を関連づけて選択）

内容は、事例研究、授業研究、教材教具研究を含め、3カ年の見通しをもって各学年で計画する。

プロジェクト研究：

1年次 ①体力つくりの見直し（体力づくり部会）

～生徒個々の運動能力に応じたきめ細かな取り組みを探る～

②指導内容表の検討（研究推進委員会）

2年次 ①教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理「1年目」（ワーキンググループ）

3年次 ①教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理「2年目」（ワーキンググループ）

②産業科「作業工程などの資料改訂」（産業科）

③本校としてのキャリア教育の進め方「第6次研究に向けて」（研究推進委員会）

調査研究：1年次 進路指導部「現場実習を通じた課題の確認と考察」（進路指導部）

※全員がいずれかの組織に所属し、なるべく重ならないように配慮する。

※上記の（ ）が主体で研究を進める。

5 進め方：各研究組織（上記※を参照）が進めていく。

課題研究の研究組織は、基本的に所属する学年で3年間継続して行うことを原則とする。

6 3カ年の流れの例：

1年次 ○取り上げた形態教科から、「社会参加・自立をめざした働く力」を身につけるために必要な要素を、指導内容表を元に整理する。

○その要素を身につけるために、どのように授業の中で展開できるか仮説を立てる。

例：（数学の場合）「お金を自分で管理し、適切な使い方を覚えることにより、働く力（意欲）が高まる」

2年次 ○立てた仮説を検証するに当たり効率的に授業を展開できる方法を探る。

○教材教具や学習プリントなどの開発（作成）や授業の工夫をする。

例：計算機を使った計算問題、家計簿（小遣い帳）の使用、生活に必要な物や欲しい物の値段をインターネットなどで調べる。

3年次 ○仮説を検証する。

○研究授業を行う。

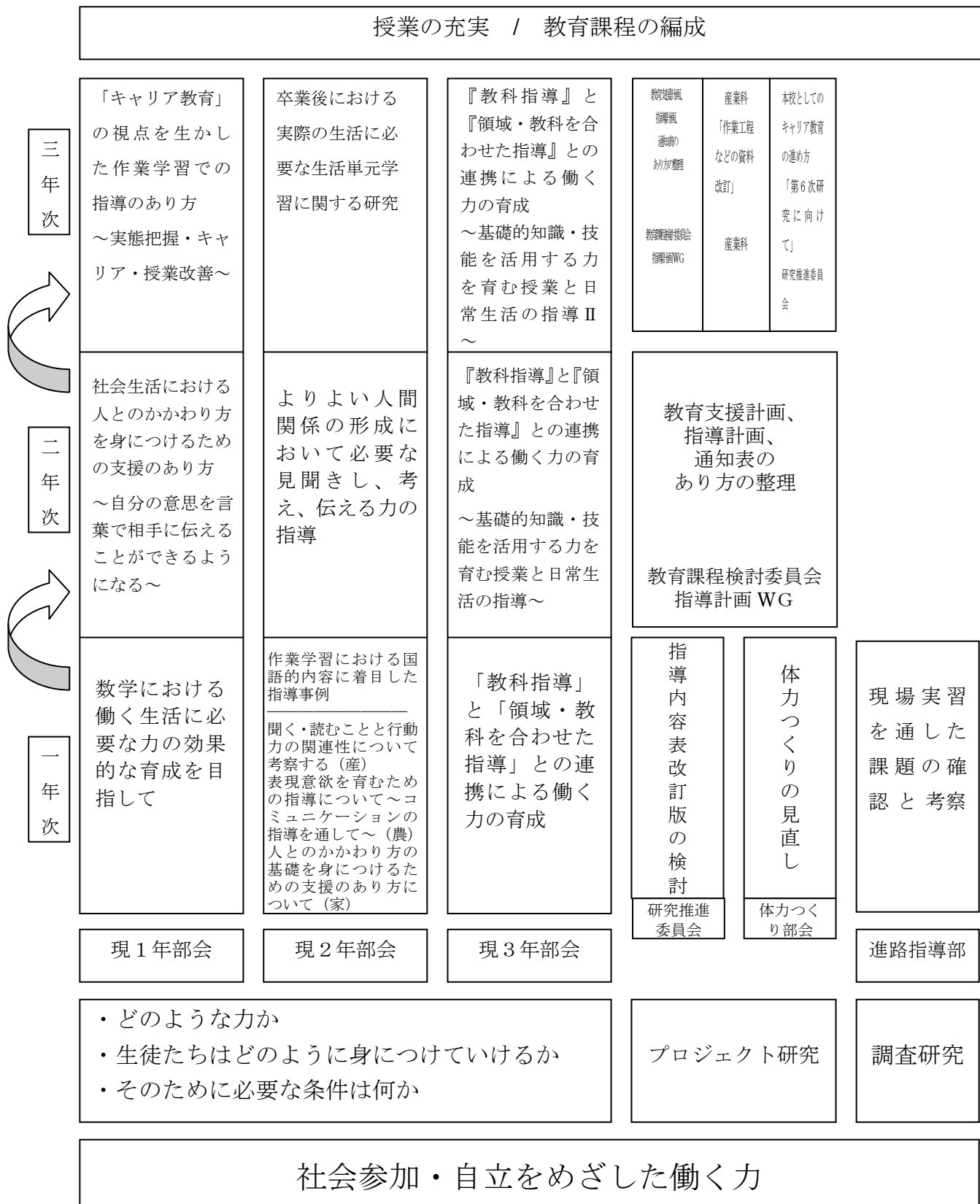
※学年全体で取り組み、対象の形態教科担当者のみで行うことのないように周囲で配慮する。

※所属する学年によっては、3カ年間同じ生徒が対象になるとは限らない。

※教師の働きかけ、生徒の様子、変化、配慮や工夫をした点等について、客観的な記録をとる。

校内研究 第5次研究の構造図

日々の授業の中から、生徒が働く力を身につけていく上で課題となる点を取り上げて整理し、どのような方法で授業に反映することができるかを 3ヵ年の研究を通して校内全体で考えていきたい。



■全体研修会

第1回（平成23年4月15日）

- （1）校内研究・研修計画
- （2）学年協議（今年度の研究の進め方について）

第2回（平成23年6月10日）

- （1）校内研究・各グループのテーマ発表
- （2）北海道教育大学函館校准教授 北村博幸氏の講義（キャリア教育について）

第3回（平成23年10月28日）

- （1）校内研究中間発表
- （2）アセスメント研修2回目（1回目は夏休みに実施）

第4回（平成23年2月17日）

- （1）校内研究報告会

■研究推進委員会

第1回（平成23年4月14日） 全体研修会について

第2回（平成23年10月12日） キャリア教育勉強会1回目（プロジェクト研究）

第3回（平成23年10月21日） キャリア教育勉強会2回目（プロジェクト研究）
全体研修について

第4回（平成23年12月12日） キャリア教育の進め方について 各先生方からの発表（プロジェクト研究）

第5回（平成24年1月16日） キャリア教育 次年度研究素案発表・検討（プロジェクト研究）

第6回（平成24年2月10日） キャリア教育 再度検討（プロジェクト研究）
全体研修会について

第7回（平成24年3月 日） 次年度への研究の進め方の確認（プロジェクト研究）

■特別支援教育研修会

日 時	平成23年7月29日（金）	13:15～15:15
場 所	本校体育館	
全体テーマ	『働く力の育成を目指した、教育、企業、地域支援の取り組みや展望』	
講 師	北海道教育大学函館校 准教授 道南しょうがい者就業・生活支援センターすてっぷ 主任就業支援ワーカー 今金ゆめ食産株式会社 代表取締役	北村 博幸 氏 小松 健児 氏 田井中 剛 氏

内容

<北海道教育大学函館校 准教授 北村博幸 氏>

「効果的な連携をめざして」～チームで支援したケース

事例をもとに

- ・いろいろな不適切行動に対して改善に向けてどのように対応するか
「走ってくる車の前に飛び出す」
「大声で騒ぐ」
「真夜中にベランダから出て行く」など
- ・母親からの相談
→養護学校に相談
→関係機関との連携が始まる
- ・支援会議開始
参加者 「母親、母親の友人、担任、児童相談所の担当者、区の担当者、施設の担当舎」
内 容 個別教育支援計画を作成し、各支援者の具体的なかかわりを策定し、共通理解をはかる。
- ・サポートブックの活用

その後

- ・対象児童生徒のみならず、家族全体に対する支援につながった。
- ・いろいろな状況で、支援者同士が協力し合える環境作りができた。

連携のポイント

- ・子どもの利益を最優先させる。
- ・お互いが専門家面せず対等な立場で話し合う。
- ・できないことを確認して互いに補い合う。
- ・子どもの強い部分を見つけて活用する。
- ・進路指導も含め、子どもへの共通理解を外部機関と密にはかることが大切。

<道南しょうがい者就業・生活支援センター すてっぷ 主任就業支援ワーカー 小松健児 氏>

「働く力の育成を目指した取り組みや展望」

- ・「ナカボツセンター」すてっぷの紹介
→障害者就業・生活支援センターの略称

→連携やネットワークの中心（間）にいる（各関係機関とのパイプ役）
→連携の中で、社会資源を活用したり開発も行う。
→啓発活動
→どのような障がいでも（手帳がなくても）相談を受けている。
→就労に関するトータル相談に乗り、本人、企業双方を支援する。
→相談・支援は一切無料。
→道南圏域全般（渡島・檜山）が支援範囲。
→すてっぷ相談登録者数は376人

・具体的なすてっぷの取り組み

→最近増えてきた就職先（ホテル清掃・洗い場などの短時間就労など）
→本人への支援（就職準備の支援、就職活動の相談・支援、就職後の定着支援、生活面の支援）
→実習先の開拓、リスト作成
→未診断者からの相談への対応
→当事者の活動支援（当事者会のサポート、余暇支援、JOB〔就労課題を話し合う場〕）
→ビジネスマナー研修などの開催
→本人の希望と特性をふまえた上での就労に向けた相談・支援

・今後の課題と展望

→障害者雇用促進法改正（2010年7月施行）
→障害者権利条約採択（2006年12月）、いずれ「批准」へ（国内法の整備）
→法定雇用率を満たすために「201人以上の会社からの相談」「短時間の業種求人が増える」「いままでなかった業種求人が増える可能性」
→企業文化・ニーズを把握し、それに提案できることが大切。
→未診断、発達障がいの方の支援が増える。

<今金ゆめ食産株式会社 代表取締役 田井中剛 氏>

「障害者雇用の経験から考えること」

・起業にともなって

→本校が今金町に開校するにあたり、卒業生の進路先が必要となると考えた。
→今金町と連携（ふるさと創生支援事業）し会社を立ち上げる。
→卒業生を数名程度雇用（現在も雇用を続けている）
→天候に左右されない栽培物を考えた（季節労働にならないために）

・本校の卒業生を雇用するなかで

→仕事上の支援だけでなく、生活面のアドバイスも必要。
→実態把握（特に家庭環境）と本人の気持ち（やる気も含め）を考えての支援が大切。
→最低賃金の保証（仕事に対する意欲につながる）
→学校との連携（時々の変化に、複数から対応する必要性）

第Ⅱ章

課題研究

「学年研究」

第 1 学年部会の実践

I 1 学年部会の実践

1 研究主題

『キャリア教育の視点を生かした作業学習での指導のあり方』

2 研究主題設定の理由

本学年の生徒は、中学校通常学級や特別支援学級からの入学、不登校、片親や施設等で育ってきた生活環境など、いろいろなケースで入学してきている。また、社会の著しい変化や障がいの多様化が進むなかで、本校は職業教育を中心とした教育活動を展開しているが、生徒の実態を把握し、生徒一人一人の障がいの状況に応じたきめ細やかな指導を行うためには、卒業後を見据え、社会的及び職業的自立の促進を踏まえた指導の継続的な検討が必要である。

また、中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」において、キャリア教育は、「特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な教育活動を通して実践されるもの」と述べられており、各教科・領域の要素が盛り込まれている作業学習をキャリア教育の視点から授業実践を通して検証し、生徒の将来へと結びつく教育活動を展開することを目指し、本主題を設定することにした。

3 研究の目的

社会的及び職業的自立に向け、キャリア教育の視点を生かしながら、作業学習の中で生徒個々の指導がどのように展開していくことが効果的であるのか、また生徒のキャリア教育の視点での変容（成長）を探ることを目的とする。

4 研究の内容と方法

（1） 生徒の実態把握と課題の整理

- ア 日々の学校生活や寄宿舎生活の記録をとり、保護者と面談や家庭訪問を行うなかで、実態把握を行いながら個別の教育支援計画にまとめる。
- イ 実態把握から個々の目標と手立てを設定する。そして、作業学習を中心に目標達成に向けて指導を行っていく。
- ウ 日々の作業学習や現場実習を通じて、生徒の成果と課題をふまえ、後期の個別の指導計画の目標を設定する。

（2） キャリア教育についての理解

- ア 学年職員全体で、学校教育計画における学校教育目標や作業学習目標を確認し、1 学年の作業学習目標の「基本的な知識、技能、態度」「働くことの意味について理解を図る」について、より具体的にどのような力を身につけるかを話し合い、共通理解を図る。
- イ キャリア教育について、国立教育研究所から出されている資料を参考にしながら、勉強会を

行う。

ウ キャリア教育の観点で生徒の実態と課題を整理し、学年学科で共通する課題を明確にする。

(3) 授業づくり・授業改善

ア 明確にした課題について、キャリアの「観点別&内容別指導ポイント」を検討し、生徒一人一人の目標・手立てを設定する。

イ 目標・手立てを生かした授業展開を行う。

ウ 授業反省を行い、次時の授業に生かしていく。

(5) 研究推進計画

4～6月 本人と保護者の進路アンケートや面談から、個別の教育支援計画・指導計画の目標を設定。

7月 個別の教育支援計画・指導計画の目標、手立てにそって、個々の作業学習の実態把握。

9月 日々の実態と、現場実習での成果と課題から、重点的に取り組む必要のあるキャリアの視点を絞る。

10月 絞ったキャリアの視点から、個々のアプローチの仕方&手立てを検討。

12月 授業（研究授業）・授業反省

1月 授業反省、授業改善。適時個別支援教育計画の見直し。

2月 研究報告会（全体研修会）

6 研究の実際

(1) 生徒の実態把握と課題の整理

産業科		意欲的に仕事に取り組んでいた	仕事のやり取りがスムーズだった	根気強く、集中して仕事していた	ていねいに仕事できた	手早く、仕事できた	仕事に対する理解がよかった	必要なのは自分から聞くことができた	注意や指示を素直に聞いていた	安全に気をつけて仕事をした	仕事の準備や後始末がきちんとしてきた	あいさつや返事ができた	はきはきと受け答えができた	気分がむらがなく安定していた	時間を守って行動できた	身なりがきちんとしていた
A	実習評価	◎	◎	○	△	△	○	◎	◎	△	○	◎	○	○	○	○
	作業	○	○	△	△	△	△	◎	○	○	○	○	○	△	○	○
B	実習評価	◎	○	○	△	△	○	△	◎	○	○	○	○	○	◎	△
	作業	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○	○	△	○	○	○
C	実習評価	◎	◎	○	○	○	◎	◎	○	○	○	△	○	○	○	△
	作業	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○
D	実習評価	○	◎	△	○	○	○	○	○	△	○	◎	◎	○	◎	◎
	作業	○	◎	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
E	実習評価	◎	◎	◎	◎	○	○	○	◎	◎	○	△	△	○	○	○
	作業	○	◎	○	△	△	△	△	◎	○	○	△	△	○	○	○
F	実習評価	○	○	○	◎	○	○	○	△	△	○	◎	◎	△	◎	○
	作業	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○
G	実習評価	◎	○	○	○	○	○	△	○	◎	△	◎	◎	○	◎	○
	作業	△	○	△	△	△	○	○	△	○	○	○	○	×	○	△
H	実習評価	◎	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○	△	○	◎	○
	作業	○	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○	△	○	○	○
○◎		94%	100%	80%	64%	50%	70%	76%	88%	80%	94%	80%	70%	76%	100%	80%
△×		6%	0%	20%	36%	50%	30%	24%	12%	20%	6%	20%	30%	24%	0%	20%

農業科		意欲的に仕事に取り組んでいた	仕事のえり好みをしなかった	根気強く、集中して仕事をしていた	ていねいに仕事ができ	手早く、仕事ができ	仕事に対する理解はよかった	必要なことは自分から聞くことができた	注意や指示を素直に聞いていた	安全に気をつけて仕事をした	仕事の準備や後始末がきちんとしてきた	あいさつや返事ができた	はきはきと受け答えができた	気分がむらがなく安定していた	時間を守って行動できた	身なりがきちんとしていた
I	実習評価	○	△	△	△	○	○	○	○	△	○	○	○	△	○	○
	作業	◎	○	○	○	○	○	○	○	△	◎	○	○	○	◎	○
J	実習評価	×	○	△	△	△	○	○	△	×	×	△	○	△	×	×
	作業	○	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	△	△	×	×
K	実習評価	◎	◎	◎	○	◎	○	○	◎	○	○	○	△	◎	○	○
	作業	△	○	△	△	△	△	×	○	○	○	○	△	○	○	○
L	実習評価	○	○	◎	◎	○	○	△	◎	◎	△	○	○	○	◎	○
	作業	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○
M	実習評価	○	○	△	△	△	○	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○
	作業	○	○	△	○	○	○	○	△	○	△	△	△	△	△	○
N	実習評価	◎	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○
	作業	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
O	実習評価	○	△	△	△	△	△	△	○	○	△	○	○	△	○	○
	作業	○	○	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	△
P	実習評価	△	△	△	○	○	◎	◎	△	○	○	△	△	△	◎	◎
	作業	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	○	○	○
◎◎		80%	76%	46%	50%	64%	76%	70%	80%	80%	76%	76%	64%	64%	80%	80%
△×		20%	24%	54%	50%	36%	24%	30%	20%	20%	24%	24%	36%	36%	20%	20%

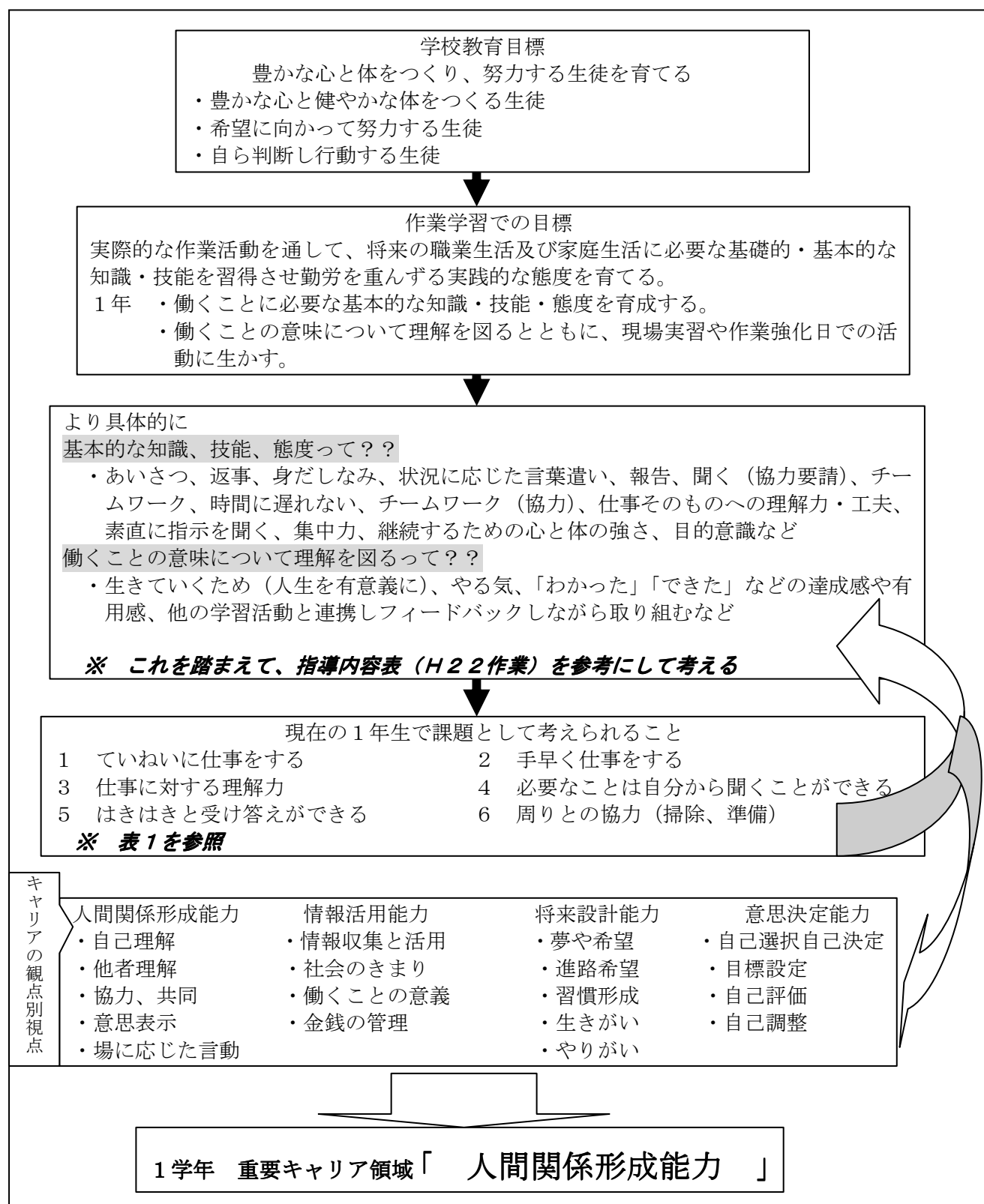
家庭科		意欲的に仕事に取り組んでいた	仕事のえり好みをしなかった	根気強く、集中して仕事をしていた	ていねいに仕事ができ	手早く、仕事ができ	仕事に対する理解はよかった	必要なことは自分から聞くことができた	注意や指示を素直に聞いていた	安全に気をつけて仕事をした	仕事の準備や後始末がきちんとしてきた	あいさつや返事ができた	はきはきと受け答えができた	気分がむらがなく安定していた	時間を守って行動できた	身なりがきちんとしていた
Q	実習評価	○	○	△	△	△	×	×	○	○	△	○	○	△	○	○
	作業	○	○	○	△	△	△	×	○	○	○	◎	○	○	◎	◎
R	実習評価	◎	○	○	○	○	○	△	○	◎	△	○	○	○	◎	◎
	作業	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	◎
S	実習評価	○	○	○	◎	○	△	△	○	○	△	◎	○	○	△	○
	作業	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	△	○	○	○
T	実習評価	○	○	△	△	○	△	△	○	○	○	△	△	△	○	○
	作業	○	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○	△	○	○	○
U	実習評価	○	○	○	△	△	○	△	○	○	○	○	○	○	△	△
	作業	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	◎	○
V	実習評価	◎	○	○	△	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	△	△
	作業	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○
W	実習評価	×	×	×	△	×	△	△	×	○	△	△	△	×	△	△
	作業	△	△	△	△	△	○	△	△	○	△	○	○	△	○	○
X	実習評価	○	○	○	△	○	△	△	×	○	○	○	△	○	◎	◎
	作業	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	◎	◎
◎○		88%	88%	76%	46%	70%	64%	34%	80%	100%	64%	88%	64%	76%	76%	80%
△×		12%	12%	24%	54%	30%	36%	66%	20%	0%	36%	12%	36%	24%	24%	20%

表1 本年度の生徒の現場実習・作業学習における実態・課題一覧

表1は本年度3学級の作業担中心にまとめた個々の実態・課題を一覧にしたものである。4月から実態把握を行い、個別の目標・手立てを設定し、日々の作業学習や9月の現場実習時点での実態・課題整理を行った。そして3学級共通して2点の課題が明確になった。一つは「ていねいさ・手早さ・仕事の理解」という仕事の理解力や対応力などが、自己認知も含めて弱いこと。もう一つは「自分から必要なことは聞く・他者との受け答え」という他者とかわりながら取り組むコミュニケーション能力が弱いということがわかった。

この明確になった2点の課題を共通理解したうえで、「学校教育目標から育てたい力」を考え、「キャリア教育の勉強」を行った。

(2) キャリア教育についての理解



人間関係形成能力の観点別視点

自己理解・他者理解

③作業態度においての良い点や改善すべき点を知る。
⑫自分の苦手な作業や得意な作業を知る。

小樽の参考

・自分の得手、不得手がわかり、友達の良いところを認めながら学習する

協力・共同

※該当なし

小樽の参考

・仲間と協力して取り組む。
・役割を理解して協力して取り組む

意思表示

⑪失敗などの過失はすぐに謝罪する。
⑫困ったことやわからないことがあったときにはすぐに相談する。
⑬大きな声で質問・報告する。
⑭必要に応じて適切に報告する。(確認、場所を離れる、失敗など)

小樽の参考

・報告、連絡、伝言、質問などの意思を伝える。
・必要な支援を適切に求めたり、相談したりできる。

場に応じた言動

⑮相手の目を見て話をする。
⑯失敗などの過失はすぐに謝罪する。
⑰質問に対して適切に返答する。
⑱作業に応じた服装を心がける

小樽の参考

・あいさつや返事の習慣
・状況に応じたあいさつや言葉遣い
・コミュニケーション能力
・適切な声量
・場に応じた適応力や会話の内容
・謝り方

※本校の「作業学習指導内容表」より、観点別でまとめてみました。

小樽高等支援学校「キャリア教育発達を支援する指導内容（作業学習）」を参考資料に

※追加修正など、考えていきたいと思います。

表2 学校教育目標とキャリア教育から見た、本学年のキャリアの視点について

学校教育目標と作業教育目標から考える「働くために必要な育てたい具体的な力」について職員内で意見を出し合い、出された意見と現段階での本学年の生徒の課題（表1）と照らし合わせた。並行して「キャリア教育とは何か」を国立特別支援教育総合研究所等から出されている資料を参考に職員間で研修を深めた。（表2参照）

そして本学年の生徒全体の課題がキャリアのどの領域にあてはまるのかを検討し、本学年の重要キャリア領域を「人間関係形成能力」とした。

その後、「人間関係形成能力」の観点項目についての学習と、本校の指導内容表がどの項目にあてはまるか、また小樽高等支援学校では一つ一つの項目に対して具体的にどのように解釈しているのかを確認し参考にした。

(3) 授業づくり・授業改善

人間関係形成能力(協力・共同)の視点を取り入れた授業と個々への手立て

産業科	個別指導計画目標(作業)	人間関係形成能力の観点別個々の課題	産業科の観点(課題)	手立て	評価
1	・決められた作業時間内に、一定数の製品を作り上げることができる。	・作業全体の中で自分が行うべき作業を仲間に聞き、仲間と協力しながら取り組む。	協力共同 仲間の良い点や苦手な点を認め合い、お互いに補い合いながら協力し、作業に取り組む。	・作業の中で何をするとよいのか迷っている場合には、仲間に聞くように言葉かけをする。	自分が行うべき作業を聞くために仲間に言葉かけをすることができた。
2	・作業中にわからないことを自分からすすんで質問することができる。	・困ったことやわからないことがあった時には、すぐに仲間に聞く。		・困ったことやわからないことがある時には、仲間に聞くことができない時には、仲間に聞くように言葉かけをする。	仲間に聞くようにする様子がみられるが、すぐに声が出ない様子がある。
3	・指示を受けた作業種を請け負う際には、素直に受け止めて取り組むよう、素直な姿勢や態度を現すことができる。	・仲間の良い点や苦手な点を認めながら作業に取り組む。		・仲間が困っている時や作業が進まない時には手伝ってあげるなど、自分からすすんで取り組むようにさせる。	仲間に言葉をかけようとするが、タイミングを取りづらい様子である。
4	・持続していいいに取り組むことができる。 ・状況に応じて正しく判断し、作業に取り組むことができる。	・作業の進捗状況に応じて正しく判断しながら、仲間と協力して作業に取り組む。		・まわりの状況を見て作業ができるように、作業中の配置を工夫する。	仲間と協力しようと言葉かけをすることができた。
5	・話しかける相手の名前を呼んで、用件を伝えることができる。 ・大きな声で返事や報告をすることができる。	・作業全体の中で自分が行うべき作業を仲間に聞き、仲間と協力しながら取り組む。		・困った時やわからないことがある時には、自分からすすんで仲間に聞くように促す。本人の困った状況が見える場面では指導者から言葉をかけずに様子を見る。そして、本人から声をかける場面があったら賞賛する。	自分がするべき作業を仲間に聞くことができた。徐々に声が出てくるようになった。
6	・作業全体の進み具合を判断しながら適切な声かけをして作業を続けることができる。	・作業の進捗状況に応じて正しく判断し、仲間の良い点や苦手な点を考慮してリーダー的存在として取り組む。		・まわりの状況を見て何をするとよいのかを正しく判断する力が育ちつつあるので、正しく状況を判断して仲間に言葉かけをしながら、自分の作業にも取り組むようにさせる。正しい判断ができた時には賞賛する。	言葉かけをタイミング良く行いながら、自分の作業に取り組むことができた。
7	・気分が左右されずに、最後まで作業に集中して取り組むことができる。	・状況に応じて正しく判断し、仲間に適切な言葉かけをして作業に取り組む。		・仲間に対して適切でない言葉づかいをする場合には、その都度、正しい言葉づかいを教える。正しい言葉づかいができた場合には賞賛する。	言葉かけをかけたが、仲間が声で応答する場面があまりみられなかった。
8	・正確に、手早く作業を続けることができる。 ・状況に応じて的確に判断して行動することができる。	・仲間と声をかけ合いながら作業を進めることができる。		・状況に応じて自分のする仕事を探し、仲間に伝えるように言葉かけをし、できたら賞賛する。	仲間を手伝う意志を示そうと声をかけることができた。

農業科	個別指導計画目標(作業)	人間関係形成能力の観点別個々の課題	農業科の観点(課題)	手立て	評価
1	・返事、報告をはっきりと行う。 ・説明を最後まで聞いて、責任をもって取り組むことができる。	場に応じた言動・協力共同 ・状況に応じた言葉遣いができない。 ・仲間と声をかけ合う前に、一人でやってしまうことが多い。	協力共同 (場に応じた言動) ・協力、確認しながら取り組まなければならない場面、勝手な判断で取り組んだり、率先して取り組まずに傍観が後追いで取り組むことが多い。	・状況にふさわしくない言動があった場合、グループ内で確認させながら改善できるように助言する。 ・グループ内のメンバーに伝えてから行動できるように助言する。	協力を呼びかける声かけを行っていたが、伝え方が乱暴な場面が多くあった。
2	・一つ一ついいいに取り組むことができる。 ・行動や移動を素早く行うことができる。	自己理解・場に応じた言動 ・自分の苦手な事への修正点をみつけられない。 ・仕事中にふざけ気味の態度を取ることがある。		・分からない場面は必ず、グループのメンバーに確認するように言葉かけを行う。 ・時間を意識して取り組めるように具体的な提示に努める。	わからない場面も他者に聞くことなく、汚れが残ったまま仕事を進める。
3	・わからないことがあった際は、すぐに確認することができる。 ・あいさつ返事をはっきり行う。	意思表示・場に応じた言動 ・困ったことなどすぐに質問ができない。 ・質問に対する返事ができないことがある。		・分からない場面は必ず、グループのメンバーに確認するように言葉かけを行う。 ・返事をしていない場面では、振りかえりさせながら正しい言い方(声の大きさなど)を考えさせる。	何度か仲間に聞く必要があった場面でも聞くことができなかった。相手からの言葉には反応する。
4	・はっきりとした返事報告ができる。 ・説明を理解確認して、取り組むことができる。	意思表示・協力共同 ・やるべきことが分からないときに特に、相談することができない。 ・自分のやるべき事を理解できず、動けないことが多い。		・自分の考えをグループに伝えられるように見守り、必要に応じて助言する。 ・先の見通しが立てられるように、具体的な提示に努める。	自分が気づいたことを一度仲間に伝えることができた。しかし、伝えるポイントがずれていた。
5	・作業内容を理解し、最後まで取り組むことができる。 ・仕事上の言葉遣いに気をつける。	他者理解・場に応じた言動 ・自分の解釈で、相手の良いところを認めずに理解しない。 ・状況に応じた言動ができず、自分のルールで行動することが多い。		・状況にふさわしくない言動があった場合、グループ内で確認させながら改善できるように助言する。 ・話合いの場に参加できるように必要に応じて助言する。	他者からの協力要請には無言で応えていた。しかし、途中でふざけた言動があった。
6	・周りの状況を見ながら、手早く適切に作業を進めることができる。	場に応じた言動 ・自分でやることで一杯になってしまったり、周りが見えなくなることがある。		・自分の考えをグループに伝えられるように見守り、必要に応じて助言する。 ・先の見通しが立てられるように、具体的な提示に努める。	全体を通じて、周りの状況を見ながら周りに対しての声をかける事ができていた。
7	・一つの仕事を最後までいいいに取り組むことができる。 ・説明を理解確認し取り組むことができる。	場に応じた言動・協力共同 ・過剰な反応を示すことが多い。 ・自分の役割を理解しないまま取り組むことがある。		・分からない時は必ず、グループのメンバーに確認するように言葉かけを行う。 ・自分の考えをグループ内に正しく伝えるように、伝え方を必要に応じて助言する。	自分の仕事だけに目が行く場面があったが、後片付けの場面で、自分

				の意見を周りに伝えることができた。
8	・作業内容を理解し、手際よく状況を確認しながら協力して取り組むことができる。	場に応じた言動・協力共同 ・状況に応じた言葉遣いができない。 ・仲間で取り組む場面で、傍観していることがある。	・状況にふさわしくない言動があった場合、グループ内で確認させながら改善できるように助言する。 ・先の見通しが立てられるように、具体的な提示に努める。	与えられた仕事は手早い、率先して協力する様子は少なく、他者からの声がかけて動くことが多かった。

生活 家庭科	個別指導計画目標(作業)	人間関係形成能力の観点別個々の課題	生活家庭 科の観点 (課題)	手立てアプローチ	評価
1	・働くことの基礎・基本を知る。 ・苦手で興味の持てない作業内容であっても、最後まで集中して取り組むことができる。	意思表示、自己理解 ・自分の思っていることをなかなか言葉に出せない。 ・自分では何でもできていると思っている部分が多い。	意思表示 ・すべきことが終わってもなかなか報告をすることができないことがある。 ・自分の思っていることを口に出さずに黙っていることが多い。	・必要に応じて言葉がけを行い、自分から行動しやすいように促す。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。 :数や取り組む内容などをわかりやすく説明し、見通しをもって取り組ませる。	促しにより、終了の報告や困ったときに聞くことができた。しかし、自分勝手にすすめようとする場面もあり、まだまだ促しが必要。
2	・働くことの基礎・基本を知る。 ・丁寧さを保ちつつ、手早さを意識して作業することができる。	協力・共同、意思表示 ・誰かに協力依頼することがなく、自分でやってしまう。 ・必要なことをすぐに聞くことができないことがある。		・必要に応じて言葉がけを行い、自分の行動について理解や促しを与える。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。誰かと一緒に取り組める事があれば協力して行うよう伝える。 :経験したことがある作業内容の場合、以前より多く作業できるよう、数や時間を意識させる。	準備や清掃時に周りに声をかけながら取り組めた。自分のすべきことを理解し、活動できていた。結束の片付けでは、〇〇さんに声をかけられ「はい」と返事するだけでどうしていいか悩んでしまう場面があった。
3	・働くことの基礎・基本を知る。 ・苦手で興味の持てない作業内容であっても、最後まで集中して取り組むことができる。	意思表示、場に応じた言動 ・必要なことをすぐに聞くことができないことがある。 ・強い口調で話したり、乱暴な言葉遣いをすることがある。		・必要に応じて言葉がけを行い、自分から行動しやすいように促す。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。 :数や取り組む内容などをわかりやすく説明し、見通しをもって取り組ませる。	注意されたり、周りで注意されたりする人がいると口調が荒くなり、指導者と一緒に注意する場面が見られた。終了の報告はできた。
4	・働くことの基礎・基本を知る。 ・苦手で興味の持てない作業内容であっても、最後まで集中して取り組むことができる。	意思表示 ・自分の思っていることをなかなか言葉に出せない。		・必要に応じて言葉がけを行い、自分の行動について理解や促しを与える。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。 :数や取り組む内容などをわかりやすく説明し、見通しをもって取り組ませる。	促されることで、終了の報告をすることができた。声の大きさも指摘されると大きくなった。声が出るも、集中することはできた。
5	・働くことの基礎・基本を知る。 ・丁寧さを保ちつつ、手早さを意識して作業することができる。	協力・共同、意思表示 ・誰かに頼ることが多く、任せっきりになることがある。 ・必要なことをすぐに聞くことができないことがある。		・必要に応じて言葉がけを行い、自分の行動について理解や促しを与える。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。なるべく一人で取り組ませよう働きかける。 :経験したことがある作業内容の場合、以前より多く作業できるよう、数や時間を意識させる。	一人で取り組ませたことで、自分がすべきことを理解し、しっかり取り組めた。また、何をすべきかわからなくなっても指導者に聞くことができた。
6	・働くことの基礎・基本を知る。 ・苦手で興味の持てない作業内容であっても、最後まで集中して取り組むことができる。	協力・共同、意思表示 ・誰かに頼ることが多く、任せっきりになることがある。 ・必要なことをすぐに聞くことができないことがある。		・必要に応じて言葉がけを行い、自分から行動しやすいように促す。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。なるべく一人で取り組ませよう働きかける。 :数や取り組む内容などをわかりやすく説明し、見通しをもって取り組ませる。	確認すべき部分でなかなか聞くことができなかったが、促すことで聞くことができた。
7	・働くことの基礎・基本を知る。 ・苦手で興味の持てない作業内容であっても、最後まで集中して取り組むことができる。	協力・共同、意思表示、場に応じた言動 ・誰かに頼ることが多く、任せっきりになることがある。 ・必要なことをすぐに聞くことができないことがある。 ・気分によって口調が変わり、態度も変わることがよくある。		・必要に応じて言葉がけを行い、自分から行動しやすいように促す。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。なるべく一人で取り組ませよう働きかける。 :数や取り組む内容などをわかりやすく説明し、見通しをもって取り組ませる。	自分から終了の報告や質問をすることができた。気持ちの波が良い時期なのでできることが多い。
8	・働くことの基礎・基本を知る。 ・丁寧さを保ちつつ、手早さを意識して作業することができる。	意思表示、自己理解 ・自分の思っていることをなかなか言葉に出せないことがある。 ・自分では何でもできていると思っている部分が多い。		・必要に応じて言葉がけを行い、自分の行動について理解や促しを与える。報告や返事がしやすいように言葉がけをする。 :経験したことがある作業内容の場合、以前より多く作業できるよう、数や時間を意識させる。	わからないことがあったときにすぐに確認することができた。声が小さい。

表3 キャリア視点（人間関係形成能力（協力・共同・意思表示））を取り入れた授業と個々への手立て・評価）

- ・12月(産業科・農業科)、2月(生活家庭科)に公開授業を行った。
- ・各学科で本学年の重要キャリア領域である「人間関係形成能力」の中で、どの項目を重視して授業を構成していくかを話し合う。
- ・話し合って決まった重要項目をもとに生徒一人一人の目標・手立て(表3参照)をたて授業を構成し、展開する。(8)資料参照
- ・授業反省を行い、次時への改善につなげていく。(表4参照)

学科	公開授業・授業者の評価と反省	次時への改善ポイント	次時の評価
産業科	・産業科の作業特性も含め、「協力共同」という人間関係形成能力の育成という視点で、難しい授業内容になってしまった。「協力共同」と「場に応じた言動」についての観点をしっかりと確認する必要がある。 ・時間内に作業が終わらなかった生徒への支援、言葉のかけ方、仲間同士での確認など、生徒同士の関係も含め、いろいろな場面での支援が必要。	・協力して作業を進めるために積極的に声かけをするように指導し続けた結果、仲間に声をかけることができるようになってきた。しかし、声をかけられた生徒の反応が見られなかったため、聞こえているなら応答するように指導をした。	・作業をしながら仲間の声かけを聞いて応答できるようになってきて、その意図を理解し協力して作業を進めることが徐々に可能になってきた。
農業科	・授業のポイントを「協力共同」と考えていたにもかかわらず、「場に応じた言動」という視点が入ってしまい、授業展開がどっちつかずの状態になってしまった。 ・後片付けなど協力が必要な場面ではお互いの声のかけ合いは増えたが、言葉の使い方に問題があり、指導者の提示の仕方も含め、改善が必要である。	・生徒が見通しを持ちやすくするために、授業のポイント(キャリア項目)を一つの授業に対して一つに絞り授業展開を行う。 ・グループでの活動場面を増やし、1グループに指導者1名を必ず入れ、言葉掛けのタイミングや言い方など、具体例を示しながら支援していく。	・除雪活動では「協力」、洗い物活動では「自己評価」という形で授業ポイントを絞ることで、授業に対する姿勢が前向きになった。 ・グループ内での声のかけ合いやお互いへの改善してほしい内容を伝えることができるようになった。
生活家庭科	・意思表示ということで連絡、報告ができるか、友だちと相談してできるかということに焦点を絞って授業を行った。いつもとは若干環境が違ったが落ち着いて取り組んでいた。 ・掃除の場面でみんなが何もせず立っていた。周りへの言葉がけがなかった。	・今までは促し中心で、意思表示させていたが、周りの状況やどんなときにどんな報告をしなければいけないのかをその都度説明する。 ・掃除は自分の担当が終えたら周りを確認する。最終的に何もなかったら指導者に終了の報告をする。	・縫い終わりの報告では指導者の表情を見たりすること(指導者側のアクション)でできるようになった。 ・掃除も声をかけながらやっている姿が何度か見られた。

表4 授業反省と次時への改善ポイントについて

7 成果と課題

(1) 成果

「生徒の実態把握と課題の整理」について、生徒一人一人の実態を把握し課題等を整理する中で、本学年の共通課題を認識し、教職員間で共通理解を図ることができた。

「キャリア教育についての理解」について、教職員それぞれの「育てたい力」を出し合い意見交換することができた。その中で「キャリア教育」という共通の視点・物さしで生徒や授業について

考えることで、ポイントを絞って話し合いをすることができた。また、生徒の長所短所・課題等についてもまとめやすくなり、目標立て等も考えやすくなった。

「授業づくり・授業改善」については、産業科と農業科は「協力共同」、生活家庭科は「意思表示」を意識して授業を展開した。授業のねらいを絞ることで、授業立案や生徒の目標・手立てを考える一つの物さしができた。また、次時への改善やねらいが明確になった。

(2) 課題

「生徒の実態把握と課題の整理」について、中学校からの引き継ぎ資料（個別教育支援計画等）が少ない生徒もいて実態をつかむまでに時間を要したところがあった。また、今回は作業学習を中心に実態把握を行ってきたが、生活面や他の教科領域の実態や課題が作業学習（働く力）の実態や課題に大きく影響を与えているため、家庭や寄宿舎、出身中学校なども含め各関係機関、学校内の教科領域担当者との連絡を密にして実態把握に努めなければいけない。

「キャリア教育についての理解」について、「キャリア教育」とは何かを教職員間で共通理解する難しさがあった。学校教育目標や作業目標から「育てたい力」を考え、キャリアの領域に当てはめていく際等、共通理解が進んでいないと統一した方向性の出しづらさがあった。また、本校の指導内容表とキャリア観点項目を照らし合わせたときに、キャリア観点項目に当てはまる指導内容表の項目が見つからず、今後指導内容表の改訂も考える必要がある。

「授業づくり・授業改善」については、「協力共同（産業科・農業科）」「意思表示（生活家庭科）」を意識して授業を展開した。その中で、キャリア観点項目を狙った授業内容が実は別の観点項目（今回は場に応じた言動）になっていたり、授業者が授業を行っていくなかで狙う項目が複数に変化していたりしていた。授業の視点を明確に絞ると同時に授業展開するにあたっての手立てや授業ポイントを生徒にも授業者にも分かりやすく、明確にすることが今後も求められる。

(3) まとめ

生徒の実態把握（アセスメント）を適時行っていくことで、指導者の共通理解が図られ、生徒へのポイントをつかんだ指導ができることがあらためて明確になった。そして、これをよりよく進めていくためには、中学校や家庭も含め各関係機関との連携は外すことはできず、より一層の協力連携が必要である。

また、実態把握や指導者間の共通理解を進める上で「キャリア」という視点は、より効果的な指導者間の話し合いが図られることが実感できた。しかし、「キャリア」そのものの共通理解があつてこそその効果であると考ええる。そのため、「キャリア」の研修や勉強会が不可欠である。

最後に、今回の研究を進めていくなかで一番の成果は、PDCA(Pの前にSも重要)のサイクルを意識して授業の反省を次時へ生かすことで、次時の授業がより効果的に生徒の課題解決につながっていったことである（表4、次時の評価を参照）。表4で各学科の授業研究の評価・反省から次時への改善ポイントでも明らかだが、PDCAを行うことであらためて生徒の実態把握をおこなうとともに、指導者が次時に向けての授業や指導のポイントをより明確に絞ることができている。そしてポイントが明確になることで、指導者も生徒も授業そのものがより明解になると考えられる。

授業改善の重要性、そのためには実態把握（アセスメント）と振り返りが大切である（PDCA）。その方法として「キャリア」の視点を活用することは有効である。

(8) 資料 公開授業の資料

平成23年度 1学年公開授業 資料 [産業科]

日 時：平成23年12月15日（木） 2～4校時

ところ：窯業実習室

作業学習（産業）指導者：田中龍右エ門

鐘ヶ江真知

小松 裕樹

1 生徒の実態

男子6名、女子2名の合計8名で構成されている学級である。出身学級は特別支援学級としての知的障害学級5名、自閉症・情緒障害学級1名、病弱・虚弱学級1名、そして普通学級1名。主な障害の状況は知的障害と情緒障害である。健康面では、アレルギー性鼻炎2名、脂肪肝1名、心室性期外収縮1名、てんかん1名、ファロー四徴症1名、喘息1名。他に広汎性発達障害と診断されている生徒が1名。身辺処理面では、概ね自立しているが言葉かけや確認が必要。対人関係面では、日常会話は成立するが、場に応じた言葉遣いや人の気持ちを考えた言動や行動ができない場面がある。あいさつや返事は慣れた場面ではすることができるが、場面が変わったり状況判断が求められる場面では難しいこともある。

2 公開授業のテーマ・・・「人間関係形成能力」

入学後から週に3回の作業を通して、板づくりの基礎からテストピース作り、四角皿（小・中）・グラタン皿の成形（石膏型による型押し）を経験してきた。作った製品は学校祭にて販売した。次の段階として「形のそろった製品作り」を目指し、精度の高い製品作りを重視することにした。また、製品を作るだけでなく、決められた時間内で後片づけ、反省まで終了できるように効率的に取り組む姿勢を育てることに力注いでいる。

8名の生徒たちは、作業には最後まであきらめずに取り組むが、お互いに声をかけ合って作業を進めたり、手伝ったり依頼したりすることなどは、指導者からの言葉かけがなければ対応する姿がほとんど見られず、作業をしている空間をただ共有しているかのように見える。

そのため、「人間関係形成能力」の育成を課題（目標）に掲げて取り組んできた。作業全体を通して、仲間と協力しながら無駄なく作業に取り組もうとする姿勢を持続させるためにも、おもに掃除の時間に重点を置いて取り組んでいる。また、それを他の場面にも応用することを目標とした。

3 題材について

学校祭後から冬休み直前までの作業では、四角皿（小・中）の成形の応用として『長角皿の成形』に取り組んでいる。使う粘土の量も900gと四角皿（中）の約1.5倍と増え、それに加えて、形のそろった製品を作ることを目指している。学校祭での販売をひとつの契機として、生徒・指導者共に厳しい目を持って製品作りに取り組んでいる。

平成 23 年度 産業科 1 学年 作業学習 (66 回目) 指導略案

日 時	平成23年12月15日(木) 9:50～12:10		場 所	窯業室	指導者	・田中 鐘ヶ江 小松
単 元 名	・ひだまりへの納品の前に		題 材 名	・長角皿の型押し テストピースの撥水剤塗り		
時刻	学習活動				教材・教具	
9:50	・作業服(エプロン持参)で窯業実習室に集合、手洗い ・作業の用意 ・始業あいさつ(日直号令) 「気をつけ」「これから作業を始めます。」「礼」「田中先生、お願いします。」 田中 → 本日は長角皿1枚製作、テストピースへ撥水剤塗り、 (目標)「名前を呼んで、声をかけ合って協力しよう」 [自分が何をするのか、みんなに声をかけて知らせてから行う] 《掃除は11時30分から開始、11時55分に整列して反省》 《達成のために必要な力》(例) 伝える力 受ける力 合わせる力 判断する力 など 「わからないことがある時は、近くの友だちに聞きましょう。」 「いっしょに作業をしている仲間の声を、しっかりと聞きましょう」				<生徒服装・持ち物> 作業服・作業ファイル・ エプロン・筆記用具 長角皿の型押しに必要な 道具一式 清流印 生徒の銘印 撥水剤塗り道具一式	
10:00	【前回までの作業工程、課題を確認・思い出しながら長角皿の製作に取り組む】 ☆《長角皿》製作数・・各人1枚 1)型に酷似する長角皿を製作する。粘土は900グラム 2)粘土を型押しする方向と力量(四角皿の型押しと、ほぼ同様) 3)粘土量が四角皿の1.5倍なので、板作りをしっかりと行う。 ☆《テストピースの撥水剤塗り》 長角皿を1枚完成させたら、各自の道具を片付ける。 撥水剤塗りの準備をして取り組む。					
11:30	【作業終了・掃除開始】 声をかけ合うために・・・ ・エコ石けんの空ボトル《小松先生》 ・シンク洗いを依頼する (宮城君が手の空いている人を探して声をかける)《鐘ヶ江先生が指示する》 ・板書を消すように依頼する (宮城君が手の空いている人を探して声をかける)《鐘ヶ江先生が指示する》				日直が時刻の声かけを行う (11:15)・・・「掃除まで15分です」 (11:25)・・・「5分前です」 (11:50)・・・「整列まで5分です」	
11:55	【手洗いを済ませて、作業台の前に整列】 《反省》 一人一人、本日の目標に沿って、具体的に反省点を述べる					
12:05	<作業日誌への記入> 作業日誌への記入 ※反省が続いていると、記入は放課後になる。					
12:10	・終業あいさつ 「気をつけ」「これで作業を終わります。」「礼」「お疲れ様でした」 ・退室あいさつ、タイムレコーダー					
授業記録						
・目標「名前を呼んで、声をかけ合って協力しよう」 ・「掃除は11時30分から、11時55分に整列して反省開始」						
指導記録						
1			5			
2			6			
3			7			
4			8			

平成 23 年度 1 学年研究授業 資料 農業科

作業指導者 T1 近藤和也 T2 太田智恵子 T3 早坂麗子

1 生徒の実態と題材設定理由

本クラスの生徒たちは、日常場面での仲間同士の会話は成立する生徒が多いが、人の気持ちや状況を考えて発言・行動することが難しく適切なかわり（コミュニケーション）がとれない生徒が多い。また、自分の考えを伝えられない、自分の勝手な判断で行動する、周りの言動や周囲の状況に流されてしまう、自分自身への評価が低いなどの傾向もある。例をあげれば、かわり方が過度でしつこかったり、言い訳をしたり、唐突に話し始めたり、言いたいことを正しく伝えられなかったり、周りの仲間の不適切な言動に便乗したり、「出来ない・無理」などのマイナス発言を会話の冒頭にするなどの様子が見られる。

そのような実態のある中で、社会という共同体の中でよりよく生きていくため、「キャリア教育」の視点を取り入れ、社会で生きていける力を養うための作業学習展開を考えた。「キャリア」という言葉を「自分自身の人生をよりよく生きていく」と捉え、本学年の生徒の実態とキャリア教育の視点を照らし合わせた結果、『人間関係形成能力』を伸ばすことが大切であると考えた。また、人間関係形成能力の中でも『協力・共同（場に応じた言動）』に対して本クラスの生徒は経験値の低さや未熟さが見られる。（※2 ページ目参照）

そこで、学校祭後の作業学習では『協力・共同（場に応じた言動）』を意識した授業展開をしている。少人数のグループに分け、グループ内での話合いの時間を意図的に設定し、作業時間内に取り組む仕事内容（目標）を明確にし、時間を意識させながら取り組ませているところである。また、誰かにまかせておけばいいという気持ちがある生徒が多いため、グループリーダーを決めずに取り組ませている。今回の取り組みのなかで、12 月 9 日（金）の作業学習（内容は大掃除）では、温室（ガラス室）掃除から後片付けまで作業時間中に終わらせるためのグループ内の声の掛け合いや話合い、後片付け時の協力姿勢などが多くみられた。

本時は、11 月下旬に取り組んだコンテナ洗いを題材として設定した。前回のコンテナ洗いから数週間の時間が経過しているため、忘れているかもしれない必要な道具の準備や工程などを、グループ内（3 グループ）で話合い確認し合える場面を想定できることから、本題材を設定した。

2 生徒の目標と手立て（個別指導計画とキャリア教育の視点より）

3 指導計画

回数	日時	内容
1	11 月 25 日（金）	コンテナ洗い（檜山北高校借用物）、カブ収穫（1 号ハウス）
2	30 日（水）	コンテナ洗い、1 号ハウス片付け、カブ収穫（1 号ハウス）
3	12 月 1 日（木）	コンテナ洗い、コンテナ移動
4	12 月 7 日（水）	大掃除（2 グループに分け話し合いながら取り組む）
5	12 月 8 日（木）	大掃除（2 グループに分け話し合いながら取り組む）
6	12 月 9 日（金）	大掃除（2 グループに分け話し合いながら取り組む）
7	12 月 14 日（水）	白布アイロンがけ、カブ調理
8	12 月 15 日（木）	白布アイロンがけ、カブ調理
9	12 月 16 日（金）（本時）	コンテナ洗い（本学校使用物）

作業学習 公開授業 学習指導略案

単元・題材名	学校祭後片付け・3学期に向けて	生徒	農業科1年生徒8名
		場所	農業科温室
日時	平成23年12月16日(金) 2～4校時	指導者	T1近藤 T2太田 T3早坂
単元の全体目標	・自分たちの使用した物をきれいにし、来年度に向けて意欲を高めることができる。 ・3学期に向けての準備を進め、見通しをもって3学期につなげることができる。		
本時の目標	・自分の仕事に責任をもって、ていねいに取り組むことができる。 ・グループ内で話し合いながら仕事を分担し、作業を進めることができる。 ・困ったときがあったら、グループ内で相談することができる。		

学習内容	学習活動	教材教具	留意点
諸準備 始めのあいさつ 本日の作業について	・前時の洗い物等の片付けを行う。 - 日直が号令をかける。 ・本時の作業内容を知り、担当する作業を思い出し、準備する物を考える。	・エプロン ・帽子 ・提示用プリント	・目標とする仕事量を伝え、見通し意欲につなげる。 (コンテナ目標個数26個)
本時の作業内容：学校祭タマネギ販売で使用したコンテナ洗い			
①話し合い ②作業開始	コンテナ洗い工程 ①角洗い→②平面洗い→③すすぎ(青タンク)→④自己点検(最後は報告&チェック) ・グループごとに話し合い、準備をする。	・コンテナ ・洗い用の道具 ・エプロン ・作業帽子	・まずは、グループで話し確認しながら取り組めるように見守る。
	Aグループ 6, 7, 8 (全行程)		・通路を通るときの声掛けを意識させる。 ・点検は同じ指導者に受けるように伝える。 ・生徒、グループの実態に応じて適宜働きかけを行っていく。
	Bグループ 2, 4, 5 (全行程)		
	・Aグループ&Bグループは全行程を行う。		
	Cグループ 1, 3 (分担工程&コンテナ移動)		
	・Cグループは①角洗いと②平面洗いの分担をして取り組む。又、洗い終わったコンテナの数がそろってきたら、コンテナを移動する。 ・グループ内のメンバー共通して、わからないことがあったら、グループ内で相談する(それでもわからない場合は指導者に聞く)。		
後片付け	後片付けの工程・内容 ①バケツ②小物③青タンク④エプロン⑤ワイパーがけ(必要に応じて)⑥青タンク片付け(2号ハウス)⑦エプロン		
作業の振り返り	・他のグループの手伝いがあるか自ら確認し、必要に応じて取り組む。 ・本時の作業様子の振り返りや、2学期のまとめについて指導者の話を聞き、反省する。		・良かった点や改善点などを例示しながらわかりやすく伝える。
あいさつ	日直が号令をかける。		

日時：平成24年2月20日（月）5～6校時

場所：縫工室、縫工室資材庫

作業学習指導者：金子 亘喜（T1）

木村 幸子（T2）

出村 朱美（T3）

1 生徒の実態、題材設定理由

男子3名、女子5名の合計8名で構成されている学級である。本クラスの生徒たちは日常場面での会話はほぼ成立する生徒が多いが、人の気持ちや状況を考えて発言・行動することが難しく適切な関わりがとれない生徒が多い。また、自分の考えを伝えられない、自分の勝手な判断で行動する、周りの言動や周囲の状況に流されてしまう、自分自身の評価が高い（自分はできる）などの傾向がある。

そのような実態のある中で、「キャリア教育」（「キャリア教育」とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育。」定義）の視点を取り入れて、授業展開をすることとした。本学年の生徒の実態とキャリア教育の視点を照らし合わせた結果『人間関係形成能力』を伸ばすことが大切であると学年で話し合った。また、本クラスは人間関係形成能力の中でも『意思表示』に対しての未熟さが見られる。そのため、「連絡、報告、伝言、質問などの意志を伝える。」「必要な支援を適切に求めたり、相談したりできる。」という部分を伸ばしたい力として意識しながら授業を展開しようと考え、本題材を設定した。

2 生徒の目標と手立て

＊ 別紙（2ページ目）

3 指導計画（縫工作業とリサイクル・清掃活動を分けて取り組んでいる）

日 時	内 容	
1 / 18～20	刺し子（1，4，3，7）	リサイクル、清掃（5，2，6，8）
1 / 23～27	刺し子（5，2，6，8）	リサイクル、清掃（1，4，3，7）
2 / 1～3	刺し子（1，4，3，7，6）	リサイクル、清掃（5，2，8）
2 / 6～10	刺し子（5，2，8）	リサイクル、清掃（1，4，3，7，6）
2 / 13～17	刺し子（1，4，3，7，6）	リサイクル、清掃（5，2，8）
2 / 20（本時）	刺し子（1，4，3，7，6）	リサイクル、清掃（5，2，8）
2 / 22～29	ステンシル布巾（5，2，8）	リサイクル、清掃（1，4，3，7，6）

平成23年度 1学年 生活家庭科作業学習授業略案(3学期)

日 時	平成24年2月20日（月） 13:00～14：30		場 所	縫工室	指導者	○金子、木村、出村
単 元 名	縫工、リサイクル活動		題材名	さしこ、リサイクルなど		
時刻	学習活動				教材・教具	
13：00	・始業あいさつ ⇒ 「気をつけ」「これから作業を始めます」（日直の号令により、全員あいさつ） ・「金子先生、お願いします。」（日直）出席確認、作業内容、終了時間を伝える。 ・「気をつけ」「おねがいします」（日直の号令により、全員あいさつ） ※「作業開始!」（MT）「ハイ!」（生徒全員）				<生徒服装・持ち物> 作業服着用 さしこの道具 木村Tに準備していただく *各自で準備 空き缶つぶし機、段ボール、空き缶 結束ストッカー、スズランテープ	
展開 13：05	説明・確認 ・さしこ、リサイクルを行うことを伝える。 :別れて行う ・さしこ 1, 4, 3, 7, 6 木村T、出村T (あいさつ前に裁縫道具を準備しておく) 前回までの途中から始める。 ・リサイクル 5, 2, 8 金子 空き缶つぶし 5 縫工室資材庫 結束 2 移動式机 新聞仕分け 8 後方机 終了後は、紙仕分けを行う。 (用具準備はあいさつ後に行う) 必要な物を自分で後方、資材庫から運ぶ。わからない時は指導者に聞く。					
14：05 終了し、後片付け						
14：10	『掃除』 ・掃く ・モップ ・机拭き、(床拭き)、黒板拭き ・ゴミ捨て *必ず報告させる。そして指導者による点検 「作業ファイル記入」:担当者へ提出				【報告の仕方】○○先生、△△ができました。点検をお願いします。	
14：25	・全体反省 ・「気をつけ」「これから作業の反省を始めます」「礼」（日直） ⇒ 「金子先生、お願いします。」（日直） ・「木村先生、お願いします」（日直） ・「出村先生、お願いします」（日直） ・終業あいさつ ⇒ 「気をつけ」「これで作業の反省を終わります」「ありがとうございました」（日直の号令により、全員あいさつ） ※「お疲れ様でした、解散」（MT） ・プレートを变えて、教室に戻る。					
授業記録（3学期のポイント）						
・ あいさつ、 返事 、報告をスムーズに行う。わからないときや質問は、すぐに聞く。 ・ 縫工作業の基本的な流れを知る。 ・ 言われなくても、準備や後片付けなど自分から行動する。 ・ 忘れ物をしない。話をしっかり聞く。						
指導記録						
1 日直			5			
2			6			
3			7			
4			8			

第 2 学年部会の実践

Ⅱ 第2学年部会の実践

1 研究主題

「卒業後における実際の生活に必要な生活単元学習に関する研究」

2 設定の理由

2年生になり、卒業後の生活を見通した中で、働く力の育成とともに、職業生活を支える日常生活も重要になってくる。卒業後の居住形態も自宅だけでなく、グループホームやケアホーム（GH／CH）の利用など多岐にわたることが予想される。それを踏まえ、今年度2学年では、職業生活を支える「生活する力」、特に教科「家庭科」の分野（本校生活単元学習における「家庭生活」「社会生活」）の力の育成に焦点をあて研究を行う。10月現在、生単の「生活する力を身につけよう」の単位では、銀行の利用（ATMの利用の仕方）、役場の利用（住民票の取り方）、衣服の手入れ（Yシャツのアイロンがけ、ボタン付け、染み抜き、靴洗い）等の学習を行ってきた。実際に生活するうえでは、「家庭生活」「社会生活」のみで生活しているわけではなく、他の要素も混在して生活を営んでいる。生活単元学習の指導内容の項目をすべて検討できれば最良だと思うが、今年度は2年生の生活単元学習の単位「生活する力を身につけよう」で中心に行っている「家庭生活」「社会生活」に的を絞り研究することにした。

また、卒業後の生活の場に関しても、GH／CHだけでなく、自宅、施設等多岐にわたる。これも同様にすべてできれば最良だが、今年度は今後利用が増えると予想されるグループホームやケアホーム（自立支援法施行後実際に増えてきている）での生活と生活単元学習における関係について研究をしようとする（自宅での生活や施設内での生活は今までも指導内容を考えるうえで十分検討されてきたと考える。GH／CHの生活も新しいものではないが、実際の生活について、指導内容を考えるうえでも重要だと考える）。実際の卒業生の生活の様子を知ること、学校での実際の指導に還元できるのではと考える。今現在、生活単元学習で行っている指導内容、卒業生が実際に行っている生活を比較し、卒業後の実際の生活に対し、今までの指導で妥当であったところ、もう少し取り組める要素があるもの等の洗い出しを行い、学校での指導に生かしていきたいと考え、本研究主題を設定した。

3 研究の目的

- （1）生活単元学習における家庭的な分野（「家庭生活」「社会生活」）に関する卒業生における実態をふまえ、内容について検討する。今までの指導内容のあら探しではなく、卒業後の生活をよりよくするための前向きな視点で卒業生の生活に関する実態を把握する。
- （2）家庭的な内容（本校生活単元学習「生活する力を身につけよう」）に絞り、研究授業を行い、卒業後の生活を見通した取り組みについて研究を行う。

4 研究の方法と内容、推進日程について

(1) 研究の方法と内容→研究授業（生活単元学習）＋調査研究

(2) 研究授業について

ア 生活単元学習「生活する力を身につけよう」の単元で実施する。

イ 研究の流れ

○4～10月→研究授業の内容、方法について検討

○11～12月→指導案の作成・検討

○1～2月→研究授業

生活単元学習：学年全体（1コマ）

○2～3月→反省、まとめ

(3) 調査研究について

ア 卒業生の動向調査

現在利用している「指導内容表」の中から「生活する力を身につけよう」の部分に関する項目を設定してアンケート調査を行う。対象卒業生は、10～12期生で卒業後すぐにGH／CHの利用を開始した卒業生とする。生活単元学習の「生活する力を身につけよう」単元の中でどんな内容が行われてきたかを検証し、アンケート調査との比較を行う。

イ 研究の流れ

○4～10月→調査研究の内容、方法について検討

○12月→アンケート調査の依頼

○1～2月→アンケートの回収、集計

○2～3月→アンケートの考察、まとめ

5 研究の実際

(1)「卒業後の生活」に関するアンケート

■配布数：24

■配布先：10～12期生で、卒業後グループホームやケアホームで生活している卒業生

①あすなろ学園（江差町） ②共同生活援助事業所「きらり」（芦別市）

③光ホーム（今金町）

■回収数：23

■アンケートの方法

- ・質問形式で答えは基本的には「はい」「いいえ」で答えることができるものにする
- ・必要な部分のみ記述欄を設ける

■アンケートの内容

①本校の指導内容表の「生活単元学習・総合的な学習の時間」→「生活する力を身につけよう」→「家庭生活」「社会生活」の項目をピックアップ。すべての項目ではなく、卒業後グループホームやケアホームの生活で必要だと思われる項目を選択。

②今年度2学年で取り組んできた内容を項目に入れる

（染み抜き、ボタン付け、調理、靴洗、公的機関の利用、ATMの利用など）

※資料－1 アンケート依頼文、資料－2 実際のアンケート用紙

■備考

- ・アンケートの集約に関しては数字がまちまちになっている。回収されたアンケートの中にはすべての回答を書いていないものもあり、数字がばらばらになってしまっている。
- ・各施設のグループホーム、ケアホームについて、いろいろな対応に関してはそれぞれの方針があるため一概に比較はできない。

①アンケートの集約

番号	質 問	はい	いいえ
1	か もの 買い物には1人で行く	18	5
2	も 持っていく金額は自分で決めている	20	3
3	かね お金がたりなくなったことがある	11	11
4	やす しよくじ じぶん つく 休みの食事は自分で作っている、または買っている	3 (作る)	20 (買う)
5	じぶん ちょうり 自分で調理をすることがある 例えばどんな料理??	はい 5	いいえ 15
		(例)・ラーメン ・チャーハン ・スパゲティ、パスタ	
6	でんし 電子レンジを使うことがある	23	0
7	しよくひん インスタント食 品 を (カップラーメンなど) 食べる	18	5
8	かけいぼ こづか ちょう つ 家計簿・小遣い 帳 を付けている	1	21
9	かね じぶん かんり お金は自分で管理している	16	7
10	つうちょう じぶん かんり 通 帳 ・カードなど自分で管理している	5	18
11	じぶん せんたく 自分で洗濯をしている	23	0
12	し め 染み抜きなどしている	9	14
13	じぶん くつ あら 自分で靴を洗っている	15	6
14	ひつよう おう りよう 必要に応じてクリーニングを利用している	9	12
15	ふく やぶ とき じぶん なお 服が破れた時など自分で直している	4	15

16	ボタン ^つ 付けは自分 ^{じぶん} でしている	9	13
17	部屋 ^{へや} の整理 ^{せいり} 整頓 ^{せいとん} をしている	19	3
18	ゴミ ^{ごみ} の分別 ^{ぶんべつ} の方法 ^{ほうほう} がわかる	21	1
19	買い物 ^{かものとき} の時はエコバック ^も を持 ^も っていく	11	11
20	貯金 ^{ちよきん} をしている	16	6
21	自分 ^{じぶん} の貯金 ^{ちよきん} している金額 ^{きんがく} がわかる	9	10
22	自分 ^{じぶん} の収入 ^{しゅうにゅう} （給料 ^{きゅうりょう} ）がわかる いくらですか？（だいたい）	はい	いいえ
		9	12
		・50000円	・2～3千円
		・3000円	・6万円
		・9万円	・13万円
		・1万円	・14万円
23	選挙 ^{せんきょ} に行 ^い ったことがある	6	15
24	新聞 ^{しんぶん} を読 ^よ んでいる	6	15
25	公共 ^{こうきょう} 交通 ^{こうつう} 機関 ^{きかん} を使 ^{つか} って自分 ^{じぶん} の行 ^い きたいところ ^い に行く ^い ことができる	12	9
26	卒業 ^{そつぎょう} してから路線 ^{ろせん} バス ^{りょう} を利用 ^{りよう} したことがある	13	9
27	卒業 ^{そつぎょう} してから鉄道 ^{てつどう} を利用 ^{りよう} したことがある	4	17
28	自分 ^{じぶん} の住 ^す んでいるところ ^と の図書 ^{としょ} 館 ^{かん} や体育 ^{たいいく} 館 ^{かん} など ^{りよう} を利用 ^{りよう} したことがある	12	10
29	荷物 ^{にもつ} を送 ^{おく} ったことがある（ゆうパック、クロネコなど）	4	19
30	1人でATM ^{つか} を使 ^{つか} うことができる	5	18
31	役場 ^{やくば} に書類 ^{しよるい} を取 ^と りに行 ^い ったり、手続 ^{てつづ} きをしたことがある	3	20

3 2	けいたいでんわ も 携帯電話を持っている	6	1 7
3 3	けいたいでんわ りょうきん じぶん しはら 携帯電話の料 金は自分で支払っている	2	2 1
3 4	じぶん けいたいでんわ 自分の携帯電話の 1 ヶ月の金額を知っている 知っている人はだいたいの金額を書いてください	はい	いいえ
		4	1 8
		・ 4000 円 ・ 10000 円 (× 2) ・ 25000 円	
3 5	きけん 危険なサイトなどにアクセスしたことがある	0	2 3
3 6	やちん きんがく 家賃の金額をわかる いくらですか？ 円	はい	いいえ
		6	1 7
		・ 7500 円 ・ 10000 円 ・ 40000 円 ・ 30000 円 ・ 40600 円	

せいかつ こま こと せんせい そうだん
生活していて困った事や先生に相談したいことはありますか？

じゆう か くだ
自由に書いて下さい。

- ・ 友達と意見が合わなかったりします。
- ・ 1 回だけですけれども、利用者で「ご飯まずくて食べれない」という話を聞いて夜ご飯を食べずに次の日仕事に行ったら倒れました。
- ・ 物がなくなった時に先生に言えなかった。

②アンケートに関する考察

分野・観点	要素・項目	考 察																																
家庭生活	買物	◆アンケート番号 <table><tr><th></th><th>質 問</th><th>はい</th><th>いいえ</th></tr><tr><td>1</td><td>買い物には1人で行く</td><td>78%</td><td>22%</td></tr><tr><td>2</td><td>持っていく金額は自分で決める</td><td>87%</td><td>13%</td></tr><tr><td>3</td><td>お金がたりなくなったことがある</td><td>50%</td><td>50%</td></tr></table> ・卒業生の実態にもよるが、買い物には1人で行ったり、持っていく金額も自分で決めて買い物に行っている。 ・しかし、一方でお金がたりなくなった卒業生が50%いる。		質 問	はい	いいえ	1	買い物には1人で行く	78%	22%	2	持っていく金額は自分で決める	87%	13%	3	お金がたりなくなったことがある	50%	50%																
		質 問	はい	いいえ																														
1	買い物には1人で行く	78%	22%																															
2	持っていく金額は自分で決める	87%	13%																															
3	お金がたりなくなったことがある	50%	50%																															
	調理	◆アンケート番号 <table><tr><th></th><th>質 問</th><th>はい</th><th>いいえ</th></tr><tr><td>4</td><td>休みの日の食事は自分で作っている、買っている</td><td>13% (作る)</td><td>87% (買う)</td></tr><tr><td>5</td><td>自分で調理することがある</td><td>25%</td><td>75%</td></tr><tr><td>6</td><td>電子レンジを使うことがある</td><td>100%</td><td>0%</td></tr><tr><td>7</td><td>インスタント食品を食べる</td><td>78%</td><td>22%</td></tr></table> ・休みの日の食事に関しては、約87%が購入している。意図としては昼食に関して聞きたかったが、質問が曖昧になってしまった。調理する環境は整っていると思うが、GH／CHの生活で、世話人さんがいつもいて管理できる状況ではないことを考えると毎回調理というわけにはいかないのではないかな。 ・電子レンジに関しては、使えるということで、今後電子レンジの有効活用という視点も必要かもしれない。 ・インスタント食品に関しては、約78%の卒業生が食べている。手軽さを考えると致し方ないのかもしれないが、今後指導の観点にはなると思われる。 (今までも指導しているが)		質 問	はい	いいえ	4	休みの日の食事は自分で作っている、買っている	13% (作る)	87% (買う)	5	自分で調理することがある	25%	75%	6	電子レンジを使うことがある	100%	0%	7	インスタント食品を食べる	78%	22%												
	質 問	はい	いいえ																															
4	休みの日の食事は自分で作っている、買っている	13% (作る)	87% (買う)																															
5	自分で調理することがある	25%	75%																															
6	電子レンジを使うことがある	100%	0%																															
7	インスタント食品を食べる	78%	22%																															
金銭・家計管理	金銭	◆アンケート番号 <table><tr><th></th><th>質 問</th><th>はい</th><th>いいえ</th></tr><tr><td>8</td><td>家計簿・小遣い帳を付けている</td><td>5%</td><td>95%</td></tr><tr><td>9</td><td>お金は自分で管理している</td><td>70%</td><td>30%</td></tr><tr><td>10</td><td>通帳・カードは自分で管理している</td><td>22%</td><td>78%</td></tr><tr><td>20</td><td>貯金をしている</td><td>73%</td><td>27%</td></tr><tr><td>21</td><td>自分の貯金している金額がわかる</td><td>47%</td><td>53%</td></tr><tr><td>22</td><td>自分の収入がわかる</td><td>43%</td><td>57%</td></tr><tr><td>36</td><td>家賃の金額がわかる</td><td>26%</td><td>74%</td></tr></table>		質 問	はい	いいえ	8	家計簿・小遣い帳を付けている	5%	95%	9	お金は自分で管理している	70%	30%	10	通帳・カードは自分で管理している	22%	78%	20	貯金をしている	73%	27%	21	自分の貯金している金額がわかる	47%	53%	22	自分の収入がわかる	43%	57%	36	家賃の金額がわかる	26%	74%
	質 問	はい	いいえ																															
8	家計簿・小遣い帳を付けている	5%	95%																															
9	お金は自分で管理している	70%	30%																															
10	通帳・カードは自分で管理している	22%	78%																															
20	貯金をしている	73%	27%																															
21	自分の貯金している金額がわかる	47%	53%																															
22	自分の収入がわかる	43%	57%																															
36	家賃の金額がわかる	26%	74%																															

	・質問 8 に関して、在学中は寄宿舍や現場実習の小遣い管理を通して小遣い帳の指導はしているが、卒業後の生活につながっていない部分があるのではないか。 ・金銭管理に関しては、卒業生の実態や保護者の要望等をふまえ施設側での対応していると思われる。 ・通帳管理に関しても同様と思われる。 ・貯金に関してもしている卒業生が多いが、金額を把握していない生徒が多い。 →通帳管理を自分でしていないことと関連している ・「家賃に関して」は理解していない卒業生が多い。 ・全般的に金銭管理に関しては、自分でやっていないことが多い。 ・平成 21 年度より「数学」が取り入れられ、金銭については「数学」で取り扱うことになった。																																								
衣食住	◆アンケート番号 <table><thead><tr><th></th><th>質 問</th><th>はい</th><th>いいえ</th></tr></thead><tbody><tr><td>11</td><td>自分で洗濯している</td><td>100%</td><td>0%</td></tr><tr><td>12</td><td>染み抜きなどをやっている</td><td>39%</td><td>61%</td></tr><tr><td>13</td><td>自分で靴を洗っている</td><td>71%</td><td>29%</td></tr><tr><td>14</td><td>必要に応じてクリーニングを利用している</td><td>43%</td><td>57%</td></tr><tr><td>15</td><td>服が破れた時など自分で直している</td><td>21%</td><td>79%</td></tr><tr><td>16</td><td>ボタン付けは自分でしている</td><td>41%</td><td>59%</td></tr><tr><td>17</td><td>部屋の整理整頓をしている</td><td>86%</td><td>14%</td></tr><tr><td>18</td><td>ゴミの分別方法がわかる</td><td>95%</td><td>5%</td></tr><tr><td>19</td><td>買い物の時はエコバッグを守っていく</td><td>50%</td><td>50%</td></tr></tbody></table> ・比較的できている項目としては、「洗濯」「整理整頓」「ゴミの分別」があげられる。 ・「ボタン付け」「衣服の手直し」「染み抜き」「靴洗い」等を自分でしている卒業生は半分以下である。できない、やったことがない、必要がない等の理由はあると思われるが、今後生活するうえでは必要な場面があるので継続して学習した方がよい項目と考えられる。 ・「エコバッグ」に関しては、たいていのスーパーのレジ袋は有料だが、コンビニは未だに無料。生活環境を考えると必要のない卒業生もいるのかもしれない。しかし「環境教育」という視点から見るとエコバッグに関しても指導が必要な内容かもしれない。		質 問	はい	いいえ	11	自分で洗濯している	100%	0%	12	染み抜きなどをやっている	39%	61%	13	自分で靴を洗っている	71%	29%	14	必要に応じてクリーニングを利用している	43%	57%	15	服が破れた時など自分で直している	21%	79%	16	ボタン付けは自分でしている	41%	59%	17	部屋の整理整頓をしている	86%	14%	18	ゴミの分別方法がわかる	95%	5%	19	買い物の時はエコバッグを守っていく	50%	50%
	質 問	はい	いいえ																																						
11	自分で洗濯している	100%	0%																																						
12	染み抜きなどをやっている	39%	61%																																						
13	自分で靴を洗っている	71%	29%																																						
14	必要に応じてクリーニングを利用している	43%	57%																																						
15	服が破れた時など自分で直している	21%	79%																																						
16	ボタン付けは自分でしている	41%	59%																																						
17	部屋の整理整頓をしている	86%	14%																																						
18	ゴミの分別方法がわかる	95%	5%																																						
19	買い物の時はエコバッグを守っていく	50%	50%																																						

分野・観点	要素・項目	考 察																																
社会生活	社会の仕組みと暮らし	◆アンケート番号 <table><thead><tr><th></th><th>質 問</th><th>はい</th><th>いいえ</th></tr></thead><tbody><tr><td>23</td><td>選挙に行ったことがある</td><td>29%</td><td>71%</td></tr><tr><td>24</td><td>新聞を読んでいる</td><td>29%</td><td>71%</td></tr></tbody></table> ・選挙については、年齢もあるのでこの数字を見ただけでは何とも言えない。 ・新聞を読んでいる卒業生が約29%とあまり高くない。しかし、情報ソースとしては他のメディア（テレビ、携帯電話、パソコンなど）もある。また、住んでいるGH／CHで新聞を個別に取っているか、在校時から新聞を読むことが習慣化しているかななどにも影響される面がある。		質 問	はい	いいえ	23	選挙に行ったことがある	29%	71%	24	新聞を読んでいる	29%	71%																				
		質 問	はい	いいえ																														
23	選挙に行ったことがある	29%	71%																															
24	新聞を読んでいる	29%	71%																															
	公共物の利用とマナー	◆アンケート番号 <table><thead><tr><th></th><th>質 問</th><th>はい</th><th>いいえ</th></tr></thead><tbody><tr><td>25</td><td>公共交通機関を使って自分の行きたいところに行くことができる</td><td>57%</td><td>43%</td></tr><tr><td>26</td><td>卒業してから路線バスを利用したことがある</td><td>59%</td><td>41%</td></tr><tr><td>27</td><td>卒業してから鉄道を利用したことがある</td><td>19%</td><td>81%</td></tr><tr><td>28</td><td>自分の住んでいるところの図書館や体育館などを利用したことがある</td><td>55%</td><td>45%</td></tr><tr><td>29</td><td>荷物を送ったことがある</td><td>17%</td><td>83%</td></tr><tr><td>30</td><td>1人でATMを使うことができる</td><td>21%</td><td>79%</td></tr><tr><td>31</td><td>役場に書類を取りに行ったり、手続きをしたことがある</td><td>13%</td><td>87%</td></tr></tbody></table> ・公共交通機関の利用に関しては住んでいる環境もあるので単純に比較できないが、「自分の行きたいところに行くことができる」という項目に関しても比較的數字が高く、公共交通機関を有効に利用していると考えられる。 ・荷物を送ることに関しては、必要な場面がなかなか無いこともあるだろうが、送ったことがある卒業生は少ない。 ・「ATMの利用をひとりでできる」に関しては、約21%と低い。通帳管理との関連もあると思われる。 ・役所への手続きの関しても同様、約13%と低い。		質 問	はい	いいえ	25	公共交通機関を使って自分の行きたいところに行くことができる	57%	43%	26	卒業してから路線バスを利用したことがある	59%	41%	27	卒業してから鉄道を利用したことがある	19%	81%	28	自分の住んでいるところの図書館や体育館などを利用したことがある	55%	45%	29	荷物を送ったことがある	17%	83%	30	1人でATMを使うことができる	21%	79%	31	役場に書類を取りに行ったり、手続きをしたことがある	13%	87%
		質 問	はい	いいえ																														
25	公共交通機関を使って自分の行きたいところに行くことができる	57%	43%																															
26	卒業してから路線バスを利用したことがある	59%	41%																															
27	卒業してから鉄道を利用したことがある	19%	81%																															
28	自分の住んでいるところの図書館や体育館などを利用したことがある	55%	45%																															
29	荷物を送ったことがある	17%	83%																															
30	1人でATMを使うことができる	21%	79%																															
31	役場に書類を取りに行ったり、手続きをしたことがある	13%	87%																															

分野 ・ 観点	要素 ・ 項目	考 察			
社 会 生 活	そ の 他	◆アンケート番号			
			質 問	はい	いいえ
		32	携帯電話を持っている	2 6 %	7 4 %
		33	携帯電話の料金は自分で払っている	9 %	9 1 %
			※持っている方で払っている	3 3 %	6 7 %
		34	自分の携帯電話の 1 ヶ月の金額を知っている	1 8 %	8 2 %
			※持っている方で知っている	6 6 %	3 4 %
		35	危険なサイトなどにアクセスしたことがある	0 %	1 0 0 %
		・携帯電話の所持に関しては各施設の方針もあるため、単純に数値で所持率を高い、低いをいうことはできない。			
		・携帯電話を所持している卒業生で、「自分で料金を支払っている」のが約 9 %、「携帯電話の料金を知っている」のが約 1 8 %。自分が携帯電話を所持するのにいくらお金がかかっているか、理解していない卒業生が多い。保護者が支払っている状況ならば致し方ない面もある。総数で計算すると異常のような結論になるが、アンケートの集計上持っていないので「いいえ」に丸をつけている卒業生もいる。質問 3 3 ・ 3 4 に関しては、携帯電話を持っている中でのパーセントも参考としてあげておいた。質問 3 3 に関しては、自分で料金払っている卒業生は 3 3 パーセントで、あまり高い数字とは言えない。携帯電話の料金については知っているのが 6 6 パーセントにあがるという結果は、ある意味安心できる数字ではある。			
・質問 35「危険なサイト」と言う表現がわかりづらかったかもしれない。具体的な設問にすべきだった。					

③アンケートに関するまとめ

今回は10～12期生、GH／CHで生活している卒業生に的を絞ってアンケート調査を行った。その数字からわかることもあるが、背景としてそれぞれのGH／CHによって運営方針があり、GH／CHというようにひとくくりにはできない面がある。しかし背景は違うものの、卒業生がどのようにGH／CHで生活しているかを考えるうえで材料になるのではないかと考える。

本校では3年間、「生活する力を身につけよう」の単元で、卒業後の生活に関する学習を行っている。別紙では10～13期生にかけての「生活する力を身につけよう」の学習内容の変遷についてまとめている（資料－4）。今までやってきたことが良かった、悪かったということではなく、現在の卒業生の現状として捉えていただき、今回のアンケートが今後生活単元学習を考えるうえでの一助になればと考える（例えば、もう少しこの点について学習したいなど）。

また、今回の研究では、現在GH／CHで生活する卒業生に的を絞って行ったが、できることなら自宅で生活する卒業生等も含めて調査するとよりよいデータが得られると考える。また、詳細な学校での実践と比較できれば尚良い結果で出たのではないかと考える。今回は大まかな実践（学校教育計画の年間指導予定との比較）との比較になってしまった。

※学校での実践と卒業後の生活の実態の比較のまとめ

学校での実践			卒業後の実態		備考
			実践されている	実践されていない	
家庭生活	買物	・買物学習	○		
	調理	・調理実習 ・栄養 ・食事バランス ・自己管理 ・栄養と健康を考える		○	各GH／CHの対応もあるので一概には言えないが、学校で取り組んでいるが、卒業後の生活ではあまり実践されていない。
	金銭	・金銭学習 ・金銭、数量について ・卒業後の生活について		○	「調理」と同様、対応の差があり、学校での実践と卒業後の実態が直結していない。「数量」の部分については「数学」に移行。
	衣食住	・洗濯、掃除 ・身のまわりのこと ・縫工 ・簡単な裁縫 ・おしゃれを考える	○		学校での取り組みと卒業後の実践が比較的高い数字でつながっている項目。この項目に関しては寄宿舎での指導も直結している。
社会生活	仕組	・メディアリテラシー		○	今回のアンケートでは「選挙」「新聞」という項目で聞いたが、この2つに絞ると実際には学校での取り組みも少ない部分かもしれない（学級ごとの取り組みはあるかもしれないが）。
	公共物	・公共交通機関の利用 ・余暇活動 ・公共マナー ・いろいろなマナー ・地域で暮らすための基礎的知識	○		帰省帰舎の利用や現場実習を通して取り組み、卒業後でも比較的卒業後も実践されている数値が高い項目。
	トラブル	・卒業後の生活 ・メディアリテラシー		○	携帯電話については継続して取り組んでいるが、利用の実態と結びついていない項目。
不明	不明	・スケジュールを考える	？		今回はアンケートの中には入れていない。また、生活単元学習の指導内容表の中には無い項目。今後の指導内容として検討が必要と思われる項目。

（２）研究授業

ア 研究の内容

２学年では今年度生活単元学習の中で「生活する力を身につけよう」の単元を年間３回取り組むことが計画されている。１回目「生活する力を身につけよう②」で、余暇活動、公共のマナー、地域で暮らすための基礎的知識、栄養・食事・健康、買い物学習を計画、２回目「生活する力を身につけよう③」で、縫工学習、自立した生活を送るための基礎的知識、３回目「生活する力を身につけよう④」では余暇活動、公共のマナー、地域で暮らすための基礎的知識、栄養・食事・健康、買い物学習を計画していた（「生活する力を身につけよう」の単元の番号については、１～３学年にかけて連番で使われている）。

この研究テーマが決定し、研究授業に取り組むことになった時点では、「生活する力を身につけよう②～③」が終了していた。実際に取り組んだ内容が以下の表である。

表１「生活する力を身につけよう」単元取り組んだ内容

	取り組み内容
生活する力を身につけよう②	・ＡＴＭの利用、消費者金融 ・公的機関の利用（住民票を取る） ・インターネット、携帯電話の利用 ・宅配便の利用
生活する力を身につけよう③	・アイロンがけ、ボタン付け ・染み抜き、靴洗い ・たまご保育園 ・バランスの良い食事

「生活する力を身につけよう②」は学級を中心に行い、「生活する力を身につけよう③」では学年を中心に授業を行った。

（１）の調査研究では、ＧＨ／ＣＨの卒業生を中心にアンケート調査を計画していた。ＧＨ／ＣＨでも集団生活であり、今後も集団の中で生活していかなければならないことを考えると、集団でのコミュニケーションの取り方も重要になってくる。２学年では、生徒の課題として「精神的な幼さ」「人間関係の形成」があげられている。それらをふまえてこの単元では『ホワイトボードミーティング』を取り入れてきた。今回の研究授業では、題材として、献立作成を含む調理学習で『ホワイトボードミーティング』に的を絞って行った。

イ 研究授業→資料５参照

※参考文献に関しても資料５参照

ウ 研究授業のまとめ（反省会より）

ホワイトボードミーティングを取り入れた授業

→全員が参加し、活動を取り入れることで学習内容の定着を図るねらい

→習熟度別グループにしないことによる学び合いがねらい

→ホワイトボード＝可視化

○活発に意見が出ていた

グループ内での助け合いが見られた

→この学年集団の中では「ホワイトボードミーティング」は有効なのでは

今までの調理＝与えられる題材

→今回はグループで話し合い、自分たちで考える活動を行った

→教科的な要素だけでなく、自立活動の要素も取り入れられていた

○いつもは見られない生徒間の関わりが見られた

生単で学んだことがつながらないことが課題

→生徒自身が責任を持って行うということが打ち出された授業だった

ホワイトボードミーティング

→今回3～4回目。その都度うまくいったグループを解体し行った

→自由な感じに見えるが、生徒それぞれ役割がある

○全員がどのグループになっても成り立つような自治能力を目指している

今の学年だからできる授業？

→グループの維持 or 解体など、生徒の実態や学習内容をふまえ工夫していくことが大切



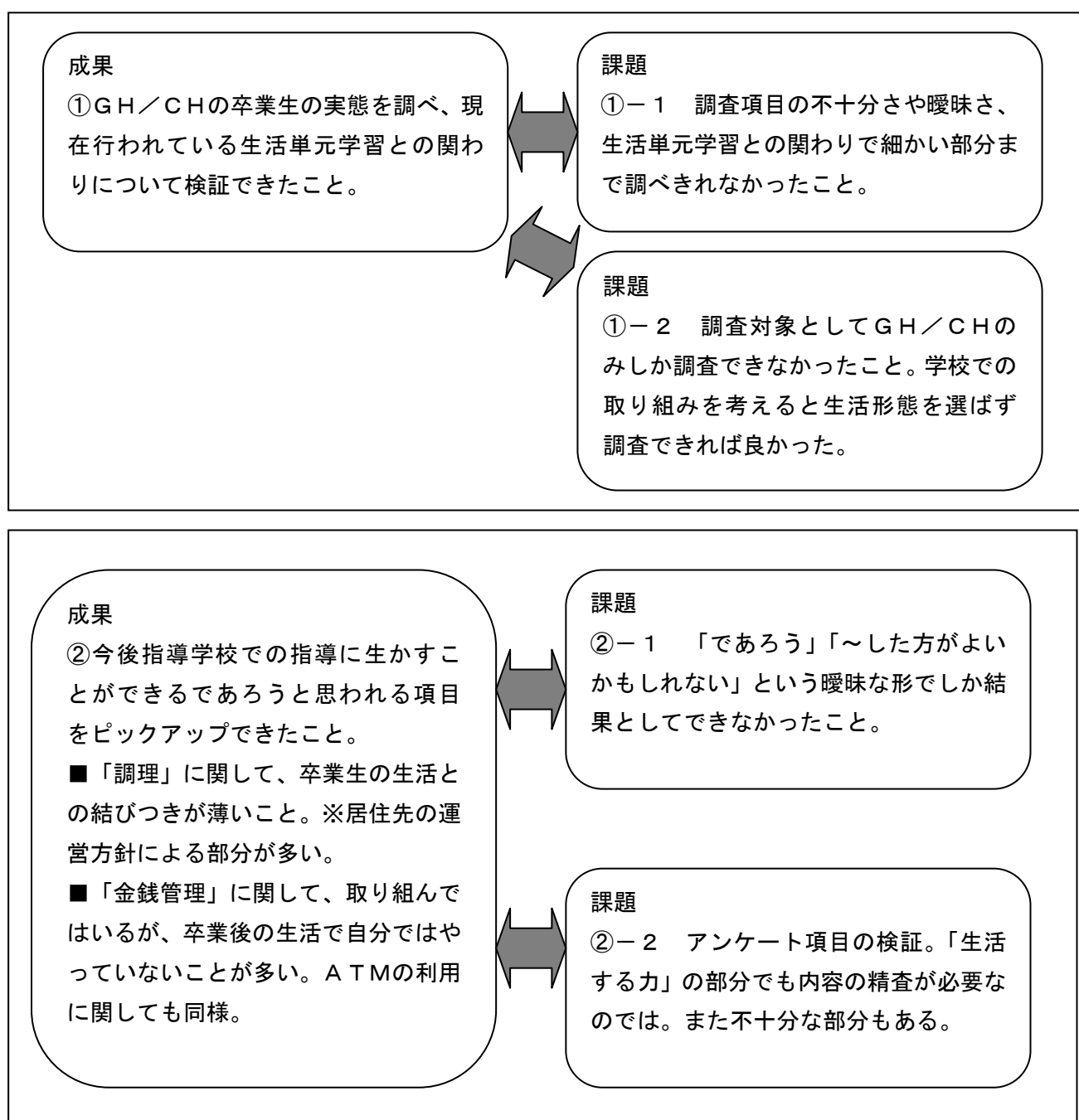
本校でもあまり行われたことがない「ホワイトボードミーティング」という授業形式で「生活する力を身につけよう」の学習を行った。今回は調理学習（献立作成）の中で行った。

「ホワイトボードミーティング」は生徒の課題もふまえた上で、現在の学年集団には有効な手法で、今後も継続していったらよいのではという方向で進んでいる。（この学年の中では実際に生活単元学習の中だけでなく、他の指導場面でも使われるようになってきた。）

「ホワイトボードミーティング」という手法に関しては、現在の学年集団に対しての有効性に関して検証できた。一方で、卒業後の実際の生活に対してどう生かされ、手法として有効であるのかどうか今後検証が必要であると考ええる。

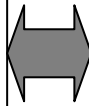
6 成果と課題

今回の学年研究のテーマは「卒業後における実際の生活に必要な生活単元学習に関する研究」として取り組んできた。研究のスタートが遅くなってしまい、十分な研究ができなかったことに対して、大変申し訳なく思います。しかし、今まで実際に見に行くことでしかわからなかった「GH／CH」に住む卒業生の実態が調査できたこと、「ホワイトボードミーティング」という今までとは違う手法を取り入れた授業研究ができたことは有意義であったと考える。以下に研究の成果と課題をまとめてみた。



成果

③ホワイトボードミーティングを利用した話し合いを通して物事をまとめたり、グループ内でお互いに協調しながら活動することができたこと。



課題

③今後も学年としては継続して取り組んでも行く方向である。今後も継続して行い、今の学年が卒業し、生活していく中でホワイトボードミーティングの有効性について今後検証する必要がある。

(案)

今高養第 号
平成 2 3 年 1 2 月 日

(対象卒業生進路先) 様

北海道今金高等養護学校長
播 磨 正 一

卒業生へのアンケートについて (お願い)

初冬の候、貴職におかれましては益々御清祥のこととお喜び申し上げます。日頃より、本校の教育推進に御協力、御支援を賜り心から感謝申し上げます。

さて、今年度の 2 学年の研究におきまして、グループホーム・ケアホームに居住している本校卒業生の生活についての実態調査を行い、学校での教育に生かしていきたいと考えています。

つきましては、御多忙のところ誠に恐縮に存じますが、対象卒業生にアンケート記入・回収していただき、下記期日まで郵送して下さいますよう御協力お願い申し上げます。

記

1 アンケート締切 平成 2 4 年 1 月 2 0 日 (金)

2 対象卒業生 1 0 期生～1 2 期生 対象卒業生名
合計〇〇名

3 担当者 教諭 入田貴広

「卒業後の生活」に関するアンケート

みなさん仕事で忙しいとは思いますが、アンケートをお願いしたいと思います。

みなさんが卒業後どんな生活をしているのかに関するアンケートです。

質問を読んで「はい」か「いいえ」に○をつけてください。よろしくお願いします。

番号	質 問	回 答
1	か 買 ^{もの} い物には1人で行く	はい・いいえ
2	も 持 ^{きんがく} っていく金額は自分で決めている	はい・いいえ
3	かね お金 ^{かね} がたりなくなったことがある	はい・いいえ
4	やす 休 ^{しよくじ} みの食事は自分で作っている、または買 ^か っている	作る・買っている
5	じぶん 自分で調理 ^{ちようり} をすることがある 例えばどんな料理??	はい・いいえ
6	でんし 電子レンジを使うことがある	はい・いいえ
7	インスタント食 ^{しよくひん} 品を（カップラーメンなど）食べる	はい・いいえ
8	か け い ぼ 家計簿・小遣 ^{こづか} い帳 ^{ちよう} を付けている	はい・いいえ
9	かね 金 ^{かね} は自分で管理 ^{かんり} している	はい・いいえ
10	つうちよう 通帳・カードなど自分で管理 ^{かんり} している	はい・いいえ
11	じぶん 自分で洗濯 ^{せんたく} をしている	はい・いいえ

1 2	しみぬきなどしている	はい・いいえ
1 3	じぶん くつ あら 自分で靴を洗っている	はい・いいえ
1 4	ひつよう おう 必要に応じてクリーニングをリようしている	はい・いいえ
1 5	ふく やぶ とき 服が破れた時など自分で直している	はい・いいえ
1 6	ボタンつけはじぶん 自分でしている	はい・いいえ
1 7	へ や せいりせいとん 部屋の整理整頓をしている	はい・いいえ
1 8	ごみのぶんべつ ほうほう ゴミの分別の方法がわかる	はい・いいえ
1 9	か もの とき 買い物の時はエコバックを持っていく	はい・いいえ
2 0	ちょきん 貯金をしている	はい・いいえ
2 1	じぶん ちょきん 自分の貯金している金額がわかる	はい・いいえ
2 2	じぶん しゅうにゅう きゅうりょう 自分の収入（給料）がわかる いくらですか？（だいたい）	はい・いいえ
2 3	せんきょ い 選挙に行ったことがある	はい・いいえ
2 4	しんぶん よ 新聞を読んでいる	はい・いいえ
2 5	こうきょうこうつうき かん つか 公共交通機関を使って自分の行きたいところに行くことができる	はい・いいえ
2 6	そつぎょう 卒業してから路線バスをリようしたことがある	はい・いいえ
2 7	そつぎょう てつどう 卒業してから鉄道を利用したことがある	はい・いいえ
2 8	じぶん す 自分の住んでいるところのとしょかん たいいくかん 図書館や体育館などを利用した	はい・いいえ

	ことがある	
29	荷物 ^{にもつ おく} を送ったことがある（ゆうパック、クロネコなど）	はい・いいえ
30	1人でATM ^{つか} を使うことができる	はい・いいえ
31	役場 ^{やくば} に書類 ^{しよるい} を取りに行ったり、手続き ^{てつづ} をしたことがある	はい・いいえ
32	携帯電話 ^{けいたいでんわ} を持っている	はい・いいえ
33	携帯電話 ^{けいたいでんわ} の料金 ^{りょうきん} は自分 ^{じぶん} で支払 ^{しはら} っている	はい・いいえ
34	自分 ^{じぶん} の携帯電話 ^{けいたいでんわ} の1ヶ月 ^し の使用量 ^{しやうりやう} を知っている 知っている人はだいたいの金額を書いてください	はい・いいえ
35	危険 ^{きけん} なサイトなどにアクセスしたことがある	はい・いいえ
36	家賃 ^{やちん} の金額 ^{きんがく} をわかる いくらですか？ 円	はい・いいえ

せいかつ
 生活^{せいかつ}していて困^{こま}った事^{こと}や先生^{せんせい}に相談^{そうだん}したいことはありますか？

じゆう か くだ
 自由^{じゆう}に書^かいて下^{くだ}さい。

生活単元学習・総合的な学習の時間

2学年研究 資料－3

(2) 生活する力に関する学習

分野・観点	要素・項目	小項目	No.	指導内容	備考
家庭生活	買物	購入時の対応	1	買物の大まかな流れやマナーがわかり、実践できる。	選ぶ、代金を払う、釣銭をもらう、店舗でのマナーなど
			2	予算や所持金にあわせて買物をすることができる。	即応的・短期的な見通しの買物
			3	目的や用途にあわせて買物をすることができる。	即応的・短期的な見通しの買物
			4	予算や貯蓄にあわせて、買物を計画することができる。	将来的・長期的な見通しの買物
			5	目的や用途にあわせて、買物を計画することができる。	将来的・長期的な見通しの買物
			6	品物の価格を確認して買うことができる。	種類、品質保持期限、原材料、数量など
			7	品物の質や量を確認して買うことができる。	税込など価格表示の理解、合計額の計算、予算とのかねあいなど
			8	品物を比較して、どちらが得であるかわかる。	損得の理解、意識、計算の実践
			9	レジでの表示価格や釣銭などに間違いながいか確かめることができる。	確かめようとする意識、計算の実践
			10	困ったときは店員などに尋ねることができる。	近くの人でも可
		購入後の対応	11	購入した品物を壊さないように持ち帰る工夫をすることができる。	高温多湿を避けるなどの注意書きの理解、保存場所の確保など
			12	購入した品物の保存方法に従って保存することができる。	期間内の消費、まぜるな危険などの注意書き、説明書の理解など
			13	購入した品物を使用する方法に従って使用することができる。	残しておく、まぜる、使い分けなど
			14	購入した品物を用途にあわせて活用することができる。	
			15	購入した品物の領収書や保証書などの大切さがわかり、保管することができる。	
	調理	基礎準備	1	必要な調理器具や食材がわかり、準備することができる。	名称や用途の理解、見通しを持った準備
			2	衛生に気を配り、清潔を保ちながら調理することができる。	身だしなみ、手洗い、落ちた物は捨てる、随時台を拭くなど
			3	調理環境を整え、安全に気を配りながら調理することができる。	台所の整理整頓、周囲への気配りなど
			4	食卓の環境を整えることができる。	テーブルを拭く、食器を用意するなど
		調理の技術	5	食材をきれいに洗うことができる。	皮をむく、芽やヘタなどを取る、卵を割るなど
			6	食材の食べられない部分がわかり、取り除くことができる。	
			7	食材を適切な大きさに切ったり、ちぎったりして分けることができる。	
			8	火や熱を用いた調理機器を使うことができる。	安全に取り扱うことができる、元栓がわかる、点火・消化の操作ができるなど
			9	電子レンジや炊飯器などの調理機器を使うことができる。	用途がわかる、操作できるなど
			10	包丁を適切に使って調理することができる。	安全に取り扱うことができる、様々な切り方がわかるなど
			11	インスタントやレトルト、冷凍食品を適切に調理することができる。	指示によってできる、注意書きを読んで一人でできる、など実態に応じる
			12	固形のルーや乾物、調味料等を適切に使用することができる。	指示によってできる、注意書きを読んで一人でできる、など実態に応じる
	調理	調理の技術	13	レシピを見ながら手順に従って調理することができる。	レシピの難易度は生徒の実態によって指導者が工夫する
			14	分量を計って調理をすることができる。	人数分に換算して計量することを含む
			15	味見をしながら調味料等で味付けすることができる。	どんなときどの調味料を足すべきか、その分量は、など
			16	食材の状態を随時確かめながら調理することができる。	火の通り具合、味のしみ具合など
			17	食材の特徴や用途にあわせて調理することができる。	固いものから炒める、火が通りやすいように切るなど
			18	状況にあわせて、加減や工夫をしながら調理することができる。	火加減の調整、混ぜ方を変える、調理器具を替えるなど
			19	料理をきれいに盛りつけることができる。	
			20	料理を人数等にあわせて適切に分けることができる。	
		後片付け	21	使った食器や調理器具をきれいに洗うことができる。	特に水回りや火元の衛生・安全
			22	使った食器や調理器具を整理整頓することができる。	特に生ゴミの処分方法
			23	台所をきれいに掃除することができる。	
			24	余った食材や料理、ゴミなどを適切な方法で処分することができる。	ラップや冷凍などの保存方法、いつまで保存できるかなど
			25	余った食材や料理を適切な方法で保存することができる。	

分野・観点	要素・項目	小項目	No.	指 導 内 容	備 考
家庭生活	衣・食・住	衣	1	季節や気象の変化に応じた服装をすることの大切さがわかる。	収納、陰干し、手洗い、塩素さらしなど 注意の必要な洗濯の知識や技術 将来生活に必要と思われる程度の技術
			2	衣類を清潔に保つことの大切さがわかる。	
			3	繊維や洗剤の特徴を知り、適切に取り扱うことができる。	
			4	ボタン付けなどの針作業、アイロンがけといった、簡単な縫工ができる。	
		食	5	健康によい食生活とはどんなものかわかる。	回数、一汁三菜など食事の構成、 熱量、塩分など メタボ、糖尿、栄養失調など
			6	間違ったダイエットや偏食、過食等が引き起こす健康への被害がわかる。	
			7	賞味期限、消費期限、品質保持期限の意味がわかる。	
			8	インスタントやレトルト、冷凍食品、菓子などの長所と短所がわかる。	
			9	食品に含まれる栄養素や、その働きがわかる。	
			10	栄養のバランスのとれた献立を考えることができる。	
		住	11	生活に必要なものがどんなものかわかる。	各種家電、道具など 健康・清潔・安全、来客の想定など。 自室、風呂、トイレ、玄関、庭など。 快適なくらしとは何か、来客時の想定、 火気の取り扱い等具体的内容など 住環境の衛生、環境問題、マナー等の 観点から。方法は自治体により異なる。 生活費用、環境問題、社会のマナー等の 観点から。節水、節電、買物袋など。 照明、採光、換気、戸や窓はきちんと 閉める、壁を傷つけない、湿度を保つなど 家電の取扱上の注意、外出時の戸締まり、 貴重品管理、長期不在の連絡など
			12	住環境を清潔にすることの大切さと方法がわかる。	
			13	住環境を整理整頓することの大切さがわかる。	
			14	ゴミの分別の大切さと方法がわかる。	
			15	省エネやエコなどの意味と方法がわかる。	
			16	住環境を快適に保つための方法がわかる。	
			17	防犯・防災の大切さと方法がわかる。	
	金銭・家計管理		1	生活と結びつけて、お金の大切さがわかる。	お金の価値、お金がないとどうなるかなど 給与、年金など。必ずお金がもらえると誤解し 安心して気を抜かせないよう注意。 光熱費、通信費など 各費目の相場、一ヶ月分など一定期間 の生活費 収入に見合った消費行動を考えることなど 帳簿や貯蓄の種類・意味、金銭管理の必要 性の理解 確かめようとする意識、知識 管理しようとする意識、知識 隠しておく、むやみに見せない、 暗証番号は教えないなど 即応的な対応 長期的な見通しを持った対応 先生、銀行、施設の職員、相談センターな ど、相談の仕方も含む
			2	将来の生活で想定されるおおよその収入がわかる。	
			3	生活に必要なおおよその費目がわかる。	
			4	生活に必要なおおよその費用がわかる。	
			5	収入と支出のバランスを考えてお金を使うことが大切であるとわかる。	
			6	帳簿をつけることや貯蓄をすることの意味や大切さがわかる。	
			7	帳簿や銀行で、収入、支出、残高などを確認することができる。	
			8	銀行に預けたり、貯金箱に貯金するなど、お金を管理することができる。	
			9	通帳や印鑑、現金の保管に気を配ることができる。	
			10	所持金を踏まえて、むだ遣いをなくすよう工夫することができる。	
			11	収支や預貯金の見通しを持ち、費用を抑えるための工夫をすることができる。	
			12	困ったときは頼れる人に相談することができる。	
社会生活	社会的トラブルの対応	生活上のトラブル	7	様々な悪徳商法について知る。	キャッチセールス、訪問販売、DM等被害の 実態など 被害の原因理解と対処法の考察 違法サイトや架空請求等被害の実態など 被害の原因理解と対処法の考察 カードの種類とそれぞれの仕組み、被害の 実態など 被害の原因理解と対処法の考察 その仕組みや危険性、被害の実態など 被害の原因理解と対処法の考察 近所づきあい、些細なけんかなど トラブルの原因と対処法の考察 所属先や家族、先生、警察に連絡するなど クーリングオフ制度、消費者センター、ハロ ーワークなど
			8	様々な悪徳商法にあわないために気をつけるべきことがわかる。	
			9	携帯電話やインターネットでのトラブルについて知る。	
			10	携帯電話やインターネットでのトラブルをおこさないために気をつけるべきことがわかる。	
			11	様々なカードによるトラブルについて知る。	
			12	様々なカードによるトラブルをおこさないために気をつけるべきことがわかる。	
			13	ヤミ金融やサラ金でのトラブルについて知る。	
			14	ヤミ金融やサラ金でのトラブルをおこさないために気をつけるべきことがわかる。	
			15	地域での生活におけるトラブルについて知る。	
			16	地域での生活におけるトラブルをおこさないために気をつけるべきことがわかる。	
			17	トラブルをおこしたり巻き込まれたりしたときの対処法がわかる。	
			18	トラブルに関する相談・救済機関や制度について知る。	

■今回アンケートを考えるうえで参考にした資料です。

網掛けの部分を中心に項目を考えました。

生活単元学習「生活する力を身につけよう」～学校教育計画より

	1 3 期生 (現 3 年生)	1 2 期生	1 1 期生	1 0 期生
1 年 生	「生活する力を身につけよう」 ・ 栄養調理、買物学習 ・ 掃除、洗濯、縫工 ・ 生活に必要な知識・技能 ※平成 2 1 年度	「生活する力を身につけよう①」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ 身のまわりのこと ・ いろいろなマナー 「生活する力を身につけよう②」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ 身のまわりのこと ・ いろいろなマナー ※平成 2 0 年度	「生活する力を身につけよう①」 ・ 調理、洗濯、掃除、金銭、数量についての学習 「生活する力を身につけよう②」 ・ 調理、洗濯、掃除、金銭、数量についての学習 ※平成 1 9 年度	「生活する力を身につけよう①」 ・ 調理、洗濯、掃除、金銭等についての学習 「生活する力を身につけよう②」 ・ 調理、洗濯、掃除、金銭等についての学習 ※平成 1 8 年度
2 年 生	「生活する力を身につけよう②」 <u>既存科～社会生活・余暇</u> ・ 余暇活動・公共マナー ・ 地域で暮らすための基礎的知識 <u>生活科～調理・買物</u> ・ 栄養・食事・健康 ・ 買物学習 「生活する力を身につけよう③」 <u>既存科～調理・買物</u> (生活する力②に同じ) <u>生活科～社会生活・余暇</u> (生活する力②に同じ)	「生活する力を身につけよう③」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ いろいろなマナー ・ 交通機関の利用 「生活する力を身につけよう④」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ いろいろなマナー ・ 交通機関の利用 ※平成 2 1 年度	「生活する力を身につけよう③」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ いろいろなマナー ・ 交通機関の利用 「生活する力を身につけよう④」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ いろいろなマナー ・ 交通機関の利用 ※平成 2 0 年度	「生活する力を身につけよう③」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ いろいろなマナー ・ 交通機関の利用 「生活する力を身につけよう④」 ・ 栄養調理学習 ・ 金銭学習 ・ いろいろなマナー ・ 交通機関の利用 ※平成 1 9 年度

	「生活する力を身につけよう④」 <u>～家庭生活・縫工・調理～</u> ・調理実習 ・縫工学習 ・自立した生活を送るための基礎的知識 ※平成22年度			
3年生	「生活する力を身につけよう⑤」 <u>調理学習</u> <u>(前半生活科、後半既存科)</u> ・基本的な調理知識・技術 ・簡単な調理 ・栄養と健康を考える 等 <u>くらしの学習</u> <u>(前半既存科、後半生活科)</u> ・簡単な裁縫 ・おしゃれを考える ・メディアリテラシー(携帯、ネット、雑誌) 等 ※平成23年度	「生活する力を身につけよう5」 ・買物学習、出納帳 ・食事バランス ・調理学習 ・衛生面について 「生活する力を身につけよう6」 ・社会人としてのマナー ・スケジュール作り ・自己管理 ・交通機関の利用 ※平成22年度	「生活する力を身につけよう5」 ・買物学習、出納帳 ・食事バランス ・調理学習 ・衛生面について 「生活する力を身につけよう6」 ・社会人としてのマナー ・スケジュール作り ・自己管理 ・交通機関の利用 ※平成21年度	「生活する力を身につけよう5」 ・栄養調理学習 ・金銭 ・いろいろなマナー ・交通機関の利用 「生活する力を身につけよう6」 ・栄養調理学習 ・金銭 ・いろいろなマナー ・交通機関の利用 「生活する力を身につけよう7」 ・卒業後の生活 ・社会人としての心構えマナー ・金銭管理 ※平成20年度

■平成21年度より、教科として「国語」「数学」が取り入れられる。「生活する力を身につけよう」の単元の中で扱う内容が精選される。

2 学年生活単元学習 学習指導案

月 日	平成 24 年 1 月 19 日 (木)
場 所	視聴覚室
時 間	4 校時 (11:25～12:10)
対 象	2 年 産業科 9 名、農業科 9 名 生活家庭科 9 名 計 27 名
指導者	青野 由香利 (T1) 野口 麻衣子 (T2) 東海林 栄徳 (T3) 三条 真知子 (T4) 入田 貴広 (T5) 佐々木 光子 (T6)

1 題材名 「生活する力を身につけよう Part 4」

2 題材設定の理由

(1) 生徒の実態

2 学年の生徒は、産業科 9 名、農業科 9 名、生活家庭科 9 名が在籍している。発達の程度は、田中ビネー式知能検査で IQ 49～IQ 88 である。全員が日常生活においては言語でのコミュニケーションをとることができる。本学年の生徒は非常に能力的に高い学年ではあるが、日常生活における経験が少ない生徒が多く、精神的な幼さも目立つ。また、児童養護施設の生徒、中学時代に不登校傾向だった生徒もあり、人間関係の形成に課題のある生徒も多く、他者に対して気遣いに欠ける発言が多く見られる。そこでこれまで授業形態を座学だけではなく、ワークショップ形式にした。ホワイトボードミーティングを取り入れグループ分けして話合うなど工夫してきた。その中で役割分担をすることができるようになったり、少しずつではあるが、仲間同士の話を聞き合うということができるようになってきた。今後も、この授業形態を取りつつ授業を進めていくことで、生徒の問題解決能力の向上やコミュニケーション能力を養いたいと考える。

(2) 題材について

本単元「生活する力を身につけよう Part 4」では、1 年次に取り組んだ調理実習からさらに学びを進めてライフステージや生活する背景などに考慮した「食」の部分と実際の献立作成実習をさせたいと考えている。単元計画では、指導時数 20 時間のうち 15 時間を調理献立のプランニングや反省などに当てている。授業形態としては、ホワイトボードミーティングを採用し、グループでの献立作成、調理工程表作成、調理実習、調理実習反省を行う。この授業形態～協同学習～の原則としては 4 つ条件をあげている。

- 1 互恵的な協力関係がある。
- 2 個人の責任が明確である。
- 3 参加の平等性が確保されている。
- 4 活動の同時性が配慮されている。

この4つの条件を満たしつつ、グループでの活動を成立させるために教師がファシリテーターとなって授業が進んでいく形になる。

3 指導計画

	日 時	学習内容	場所	教材・教具
1	1／18（水） 6校時	1、オリエンテーション （事前学習） ・本単元の学習予定を知る。	視聴覚室	本単元表（拡大） ワークシート
2	1／19（木） 2、3、4校時	2、30代男性に食べさせたいランチメニュー ・インタビュー ・献立を考える	視聴覚室	ホワイトボード
3	1／20（金） 3、4校時	3、プランニング ・調理実習工程表の作成 （レシピ作成、係分担）	視聴覚室	ホワイトボード 調理実習工程表
4	1／26（木） 2、3、4校時	4、30代男性のためのランチ ・調理実習	調理室 作業室2	ホワイトボード 調理実習工程表 エプロン・三角巾
5	1／27（金） 2、3校時	5、ライフステージに合った食事 《1》 調理実習の反省 ・各グループの反省→解決するためには？ 《2》 ライフステージに合った食事を考えよう。 ・インタビューの内容を考えよう ・インタビュー内容の発表	視聴覚室	ホワイトボード ワークシート
6	2／2（木） 2、3、4校時	6、インタビューをしよう ・インタビュー ・ビストロ SNAK への招待状作成	視聴覚室	ホワイトボード
7	2／3（金） 3、4校時	7、プランニング ・調理実習工程表の作成（レシピ作成・係分担）	視聴覚室	ホワイトボード 調理実習工程表

8	2/9 (木) 2・3・4校時	8、ビストロ SNAK ・調理実習 ・ビストロ	調理室 作業室 2	ホワイトボード 調理実習工程表 エプロン・三角巾
9	2/10 (金) 3・4校時	9、調理実習の反省	視聴覚室	ホワイトボード

4 本時の学習活動

(1) 本時の全体目標

- ・調理などの経験を通して食に対する意識を高め、ライフステージの課題に応じた食について知る。
- ・グループ活動を通して人間関係を築く力を身につける。

(2) 本時の展開

学習内容	学習活動	留意点 (T 1～T 6の支援)	教材・教具
集 合		・グルーピングと座る位置を前のホワイトボードに指示しておく～ 混乱している生徒には支援する。	ホワイトボード
1、あいさつ	○産業科の日直があいさつをする。	・正しい姿勢と視線を意識するように言葉かけをする。	
2、本時の授業の説明	「説明を聞く」 ○30代の男性のインタビューを通して昼食の献立を作ることを説明する。 ○ インストラクション(説明) ・役割分担する。 1→ホワイトボードを持ってくる。 2→ペンを用意する。 3→ホワイトボードに書く。 4→片づける(発表する) スタート! ・各グループは、ホワイトボードなどを用意	・インストラクションの内容を前面のホワイトボードに書く(T 2) ※注意 スタートの声がかかるまで活動させないこと ・インストラクションの時に	

3、インタビューをする。	「見本を見る」 ○何をホワイトボードに書くか説明する。 →献立を書いていく。 ・インタビュー	は、必ず、注意を向けさせる。 ・T1は、T3にインタビューをし、T2は、内容をホワイトボードに書き込んでいく（可視化→ファシリテーショングラフィック）	
4、食についての説明をする。	「説明を聞く」 ○食生活を考えるとき、どんなポイントで情報収集するかを説明する。 1、栄養バランス 2、食事としてのバランス 3、見た目のバランス 4、個人の好み	・T4～T6は、各グループを回って活動の4条件を満たしているかを判断し、満たしていない場合、言葉かけによる支援をする。	
5、話し合いをする。	「話し合いをする」 ○ボードに書いたものをもとに問題点などを話し合い、質問を考え、問題点に下線を引くように指示する。 →<u>これから、この男性に食べさせたい献立を考えることを質問項目の一つとして助言する。</u> ○このときメンバー全員が質問を考えるように指示する。 生徒はそれをすべて書き出していく。(拡散) ○グループ内で話し合い、出し合った質問の中で一番ふさわしいものに赤か青で丸をつける。(収束)	・参加の平等性が確保されているかどうかを指導する。 ・一人ひとりの意見が尊重されつつ、互恵的な協力関係ができているかを見る。 ・30代男性T3は、質問に対し答える。 ※ルールを守れていない時もそのことを教えるのではなく、気づかせるような言葉かけをして支援をする。	
6、発表する	「グループごとに考えられた質問を発表する」 ・順番に発表	・各グループに一人ずつ教師がついて、指導する。 ※個人の責任が明確である	

(5) 参考文献

よくわかる学級ファシリテーション かかわりスキル編

よくわかる学級ファシリテーション ホワイトボードミーティング編

ちよんせいこ

岩瀬 直樹

解放出版社

授業づくりネットワーク～協同学習で授業を変える

学事出版

“荒れ” への「予防」と「治療」のコツ 学級づくりの基礎・基本

赤坂 真二

日本標準

教師が変わる!授業が変わる!「ファシリテーション・グラフィック」入門

藤原友和

明治図書

第 3 学年部会の実践

3 第3学年部会の実践

(1) 研究主題

『教科指導』と『領域・教科を合わせた指導』との連携による働く力の育成
～ 基礎的知識・技能を活用する力を育む授業と日常の指導 ～

(2) 研究主題設定の理由

本研究は、一昨年度本校の教育課程と指導内容表が改められたことを契機に、教科指導と領域・教科を合わせた指導（以下「合わせた指導」と略す）の在り方について実践をとおして検証し、生徒の社会参加・自立に向けた働く力を育成する教育活動の実現を目指すものである。

一昨年度は生徒の課題（実態把握）と指導の課題（授業間の連携や授業内容・方法等）を明らかにした。生徒の課題としては、基礎的な内容はおおむね理解していても、それを応用する力が不足していることがわかった。指導の課題としては、知識や技術の基礎は主に教科指導で行われ、応用と実践は主に合わせた指導で行われているという点、しかし授業間の連携による系統的・効果的な指導が必ずしも十分ではなかったという点を明らかにすることができた。このような調査結果から本学年の重点課題は何なのかと検討を重ねたところ、日常生活において必要な国語・数学的な基礎的知識を身につけ使いこなす力＝『活用する力』を育むことではないかという結論に至った。

これを踏まえ、昨年度と今年度は『活用する力』を育てるための様々な取り組みをとおして、働く力（広義には生活する力も含む）を身につけさせていくことを目指し、本主題を設定した。特に今年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ、工夫・改善を加えながら進めていく。

(3) 研究の目的

- ・日常生活において必要な国語的な基礎的知識を身につけさせた上で、それを活用する力を育む教育を実践し、働く力（生活する力を含む）の定着と向上を図る。

(4) 研究の内容と方法

本研究は3カ年計画で行う計画であり、今年度で3年目にあたる。1年目の研究の結果導き出した重点課題の解決に向けて、2・3年目においては教材・教具の開発や効果的な授業を展開できる方法の探求、研究授業等を行った。

今年度は“国語的な力”に焦点を当てる。国語の授業（基礎的知識・技能を身につける場面）と作業学習の授業（基礎的知識・技能を活用する場面）を中心として指導方法の研究を行った。具体的には、次のような方向性に沿い、4つの取り組みを進めた。

～ 基本的な方向性 ～

- ・ 一昨年度の研究結果、本校の指導内容表を踏まえて研究を進める。
- ・ 国語担当が中心となり、全員で研究を進める。
- ・ まずは、活用する力のもととなる基礎的知識・技能を身につけさせる。
- ・ 授業間の連携や、授業以外の指導場面にも着目する。

～ 4つの取り組み ～

授業参観の実施（研究授業ではなく、学年内で気兼ねなく見合う）

話し合いの実施（参観者が集まって授業を振り返り、アイデアを出しあう）

教材・教具の工夫（主に授業担当者間が行う）

研究授業の実施（～ のまとめとして7月に実施）

(5) 研究推進計画

4月 研究の概要決定

5月から **授業参観+話し合い、教材・教具の工夫**（上記（４）の ～ の部分）

- 国語の授業において
学習内容「コミュニケーション」
 - ・ 学級で国語の授業を見て、生徒の実態を把握する。
 - ・ 日常生活や作業学習の場面で足りない力について話し合い、国語の授業の中で取り上げていく。
- 作業学習の授業において
 - ・ 国語の学習内容を踏まえた指導を展開する。

6月 研究計画発表

7月 **公開授業**（上記（４）の の部分）

- 国語の公開授業
 - ・ 7月4日（月）3校時 3学科同時に実施
 - ・ 授業内容は、作業や実習先など実際の場面におけるコミュニケーション。
- 作業学習の公開授業
 - ・ 7月6日（水）1～4校時 3学科同時に実施
 - ・ 授業内容は、これまでの国語で学んだことを活用できる場面を含んだ内容。

8月以降 研究の推進（上記（２）の ～ の部分を継続）

10月 研究中間発表会

11月から 1年間の研究の整理 3年間の研究のまとめ 研究紀要原稿作成

2月 研究報告会

3学年は夏に前提実習、その後は学校祭や修学旅行などの行事が控えており、授業日数が十分確保できないことを考慮し、1学期中に公開授業まで行うことにした。

昨年度は研究対象を生徒全員としていたが、今年度はよりきめ細やかな研究の推進を目指し、対象生徒を各学級数人に絞り込む。ただし、対象とする生徒だけではなく、生徒全員にとっても『活用する力』が身につくような授業を目指していく。

(6) 研究の実際

ア 授業参観+話し合い、教材教具の工夫

<実施要領>

- ・ 国語の授業は国語担当以外の先生が、作業の授業は作業担当以外の先生が参観する。
- ・ 担当学級の授業を重点的に参観する（昨年度は他学級の授業参観を重点とした）。
- ・ 参観をしたその日のうちに、軽く話し合いを持つ。意見交換をとおして、互いに担当する授業の指導内容・方法を高め合えるようにする。そして教材教具の工夫にもつなげる。

<実施状況>

昨年度は、研究担当が音頭を取って日程や参観者を調整し計画を立てたのに対し、今年度は授業担当者間（学級内）で調整するようにした。これは、昨年度「特に MT が参観に行く場合には授業展開の工夫が大変である」「誰かが見に来るといって落ち着かない状態が続く」といった意見があったことを受けて変更した点である。また、国語の授業担当者が作業も担当している（MT もしくは ST として指導にあたっている）という点からも、効率的な方法と考えた結果である。

成果

参観日程や人数の調整、略案を作成・配布についても学級に一任したため、より小回りのきく動きが可能となった。学級内で対象生徒について深く議論し、授業内容や指導内容・方法をきめ細かく検討していくことができた。特に国語と作業を掛け持ちしている場合は、両授業の連携（授業の組み立て方や指導の一貫性など）を意識し、次の工夫へとつなげることができた。

課題

他学級の状況について情報を交換し、それぞれの授業改善に役立てるという流れは、昨年度と比べると少なくなってしまった。また、この取り組みは1学期中に公開授業を終えて以降も継続するとしたが、長期間の実習や学校行事が続いたこともあり、実施できなかった。

学年全体の動きとして計画的に実施した昨年度と、小回りがきくよう学級内に一任した今年度では、異なる成果と課題が出た。取り組み自体は意味あるものであったが、今後も同様の取り組みをする際には、これを参考によりよい実施方法を検討していくことが必要と考える。

イ 公開研究授業の実施

<実施要領>

- ・「授業参観」「話し合い」の延長線上の取り組みと捉え、他学年の先生方にも授業参観していただき、ご意見・アドバイスを伺う機会として設ける。国語で学んだ基礎的知識・技能が、作業という実践場面で活用できているか、という観点で両授業を見ていただく。
- ・授業内容は年間指導計画に基づき、各学級の実態に合わせて設定する。
- ・昨年度と同様、授業担当者は学習指導案ではなく、簡略化した代替資料を作成し、全職員に配布する。書式は昨年のもを使用する。
- ・国語、作業それぞれの授業後、3学級合同の反省会を開く。

<実施状況>

授業日時	授業内容と教室（抽出生徒数）		
	産業科（2名）	農業科（2名）	生活家庭科（2名）
7月4日 （月） 3校時	コミュニケーション1 仲間(同僚)とのコミュニケーション 【産業科3年教室】	仕事に活かす ～基本的な言葉遣い～ 【農業科3年教室】	コミュニケーション 作業学習に必要な言い方を覚えよう 【家庭科3年教室】
7月6日 （水） 1～4校時	学校祭生産品販売の製品を作ろう 【窯業実習室】	シクラメン・トルコキキョウ・カボチャ栽培 【温室・農場】	石けん作り（学校祭の生産品） 【理科室】

昨年度は数学の授業のみ公開授業を行ったのに対し、今年度は教科指導と合わせた指導の連携をより意識し、国語と作業の両方で公開授業を行った。これは「教科の授業以外の場面において意図的に実践場面を多く設けてもらう、教科の授業内容を作業担当者にも伝えておくなど、授業前に実態と指導方法の共通理解をさらに充実させておく」という昨年度の反省を受けて設定したものである。また、昨年度は各学級3回とも同じ時間に公開授業を行ったが、「空き時間の先生が限られている」「授業を抜けて見に来ることの困難さは変わらない」という反省を踏まえ、各学級国語1回、作業1回の公開とした。

国語においては、これまでの続き、あるいはまとめとして、実践場面におけるコミュニケーションの方法を学習する内容で授業を行った。これを受けて作業においては、国語で学んだ言葉を使うべき場面（つまり実践場面）を意図的に設定して授業を行った。

公開授業の詳しい内容は（８）資料の資料1を参照。

成果

国語と作業の両方で実施したことで、生徒の課題や指導方法を共通理解し、連携を意識した授業づくりをすることができた。参観者からも、両方の授業を見ることで生徒の意欲的な様子から授業間連携の効果を見ることができ、参考になったという意見や、さらによいものにするための助言を多くいただいた。一方、参観のしやすさ・しにくさについて特に意見はなく、多くの先生方に参観していただくことができた。

課題

授業をする側として、指導方法の詰めが不足していた、もっと早期から授業間の連携を意識した授業づくりができたのではないかと反省点が多く挙げられた。今後は、個々の実態や課題、それに対する手立て、授業内で起こると想定されることなどをより熟慮した上で授業を組み立てていく必要がある。

公開授業反省会の記録は（８）資料の資料2を参照。

ウ 今年度の成果と課題 ～今年度の研究のまとめ～

国語では日常的な会話や作業中の会話場面を題材として、基本的な言葉遣いをじっくり確認し、作業でそれを実践するという流れ、一貫性のある指導ができあがった。これを繰り返してきたことにより、作業場面や日常生活におけるコミュニケーションスキルが向上・定着してきている生徒は多い。

しかし、教材教具をはじめとする指導方法に改善の余地が残されていたり、言葉遣い以前の根本的な内容から指導する必要性が明らかになったなどの理由から、基礎的知識、活用する力のいずれも定着するには時間がかかる生徒もいる。今後も引き続き、指導者の授業改善、連携、指導の一貫性を意識した授業づくりが重要であるといえる。

成果と反省の細かい内容については（８）資料の資料3を参照。

（７）成果と課題 ～３年間の研究のまとめ～

ア アンケート結果から、指導の効果を考察する

３年間の一貫した主題による研究の成果と課題をまとめるべく、３年生の２学期現在で見えている成果と課題を検証した。具体的には、生徒と指導者にアンケートを実施し、生徒が学習した

ことをどれだけ覚えているのか、活用できていると自ら実感しているのか、指導者から見て知識や活用する力は伸びているのかを調べた。

生徒のアンケートの質問項目については(8)資料の資料4を参照。

<実施方法>

- 生徒 ・ 10月に学級教室にて実施。抜き打ちで、学習ファイルなどを見ないで実施。
・ 質問項目の意味がわからないと訴えがあった場合、指導者が具体例を出して助言。
・ 一人ずつ・数人ずつ・学級全員一斉に実施したかどうかは、各学級の生徒の出席状況によりばらばらである。
- 指導者 ・ 10月～12月以内に、通知表や学級日誌等の記録を参照しながら、学級スタッフ内で協議して記入。このとき、生徒アンケートの結果は参照していない。

(8)資料の資料5は、生徒アンケートの質問項目の回答数から算出した「知識を活用できるかどうかは未知数だが、学習した事実は少なからず覚えている度合い(記憶率)」を示す数値と、3年間をかけて指導者の目から見た変化(成長)を併記した一覧表である。

ところが、生徒アンケートの質問が、必ずしも生徒の学習到達度を正確に測れるものではなかった。なぜなら、アンケート項目の文章の意味を質問者の意図通りに理解して記入できた生徒もいれば、そうではない生徒もいたからである(文章理解の困難さ、記憶を想起することの困難さがある生徒がいた)。また、何となくやっただろうという曖昧な記憶をもとに記入している生徒、本当は欠席したがプリントを持っている記憶があるので学習したと記入した生徒、中学時代や他の授業場面の記憶と混同して記入した生徒もいる。よって、この質問方法自体に問題があったとも言えるが、「記憶率」は高校3年目の今時点の参考となり得る数値として捉えることにした。さらに、本当に学習した知識を持っていたとしても、活用できているかどうかまでを測れる数値ではないことも念頭に置いた上で、指導者アンケートの結果と比較することにした。

資料5を見ると、生徒アンケートから算出した数値と指導者の捉えている変化は、必ずしも釣り合っていない。特に、“数値は低いが、指導者評価の内容は高評価”というケースが多く見られる。よって、数値だけではなく、どの項目に○をつけたのかも見ながら細かく検証していくと、大まかにまとめて次の2パターンが多く見られた。

a 生徒「覚えている」 - 指導者「確かに指導したが、実際はまだできていない」

- 例：生徒「相手に伝わる話し方(いつ・どこで・だれが…)」を学習したと回答
指導者「かみ砕いて質問すると伝わるように話すことができるが、まだ難しい」
→ 教科指導と合わせた指導の連携による効果がまだ不十分なものと考えられる。もしくは、生徒の記憶違い、生徒が適当に回答した、指導者が見落としている…とも考えられる。

b 生徒「覚えている」 - 指導者「確かに指導し、実際できるようになった」

- 例：生徒「ていねいな言葉遣い」について学習したと回答
指導者「友達に対する言い方がきつかったが、言い方が少し柔らかくなった」
→ 教科指導と合わせた指導の連携による指導の効果が現れているものと考えられる。

こうして検証を進めていく過程で、指導者アンケートには載せていないが、生徒の回答を見て改めて評価していくと、次のようなケースも浮かび上がってきた。

c 生徒「覚えていない」 - 指導者「指導したが、実際まだできていない」

- 例：生徒「わりざん」について学習したはずだが、学習していないと回答
指導者「この生徒の課題であり、引き続き指導していかなければならない」

- 教科指導と合わせた指導の連携による指導が不十分と考えられる。もしくは、生徒の記憶の問題、質問項目の意味がわからなかった、生徒が自己の課題から逃避している…とも考えられる。

d 生徒「覚えていない」-指導者「実際は指導しており、できるようになった」

例：生 徒「重さの単位」について学習したはずだが、学習していないと回答

指導者「数学で取り上げて、作業でもできていた」

- 学習した場面を覚えていなくても様々な指導をとおして身についたと考えられる。もしくは、生徒の記憶の問題、質問項目の意味がわからなかった、指導者の評価が甘い…とも考えられる。

このように、3年間の指導の効果は様々であるが、生徒アンケートのうち自由記述で回答する質問項目「国語/数学で勉強したことは、役に立っていますか」の結果を[資料4]から見てみると、「わからなかったことがわかるようになった」「実習など実践場面で役に立った」という回答が多く見られる。さらに、質問項目「これからどんな勉強をしたいか」の回答を見てみると、より難易度の高い内容、将来の役に立つ内容を学習したいといった意欲的な回答が多く見られる。これは、授業で学んだことが実践場面で役立ったという経験を経て、生徒が自信や達成感を得ることができたからこそではないかと考えられる。

一方、まだわからないことがあるという困り感を訴える回答や、学びたいことは特にないという回答、無回答といった消極的と捉えられる結果も見られる。こうした生徒の本音に向き合い、指導を改善していくことが指導者側の課題といえる。

イ 3年間の成果と課題

以上をまとめると、国語や数学の授業をきっかけにして、達成感を感じている生徒がいることがわかる。3年間をとおして教科指導と合わせた指導の連携の在り方を探りながら指導してきた成果として、本学年の生徒は基礎的な知識を身につけ、活用する力を伸ばす学習を積み重ねることで、働く力を向上させていくことができた。また途上である生徒も、努力を続けることができた。また、研究をとおして指導者は、授業間・指導者間の連携を意識した上で指導を工夫し、生徒の基礎的知識や活用する力の定着に向けて工夫・改善を重ねるサイクルを形成していくことができたといえる。

しかしながら、課題も残っている。例えば昨年度の数学では、実践場面ではできるが机上学習ではできないケース（実践で覚えるタイプの生徒）に対するアプローチの検討が課題として残された。また、[資料5]をよく見ると、以前よりできなくなったという生徒もまれにいる。こうした課題が残されていることを忘れず、より個に応じた指導方法を工夫し、それを含めた授業づくりを目指していくことが必要である。

また、教育効果を高めるためには、特定の指導場面以外においても一貫した指導にあたる必要がある。そのためにはまず指導者全員が生徒実態と指導方法を共通理解し、よりきめ細かな指導者間の連携を図ることも必要である。

さらに、研究そのものについては、この3年間、関係する指導者全員が関わることで深まり、より生徒の指導に還元できる実践が成されていくということを実感できた。しかし、議論不足や計画不十分のため、一時的に行き詰まったり、イメージ通りに事が進まないこともあった。研究を進める際には、生徒の成長を第一に考え、時間をかけてより深く研究方法を検討し、綿密な計画を立ててから進める必要がある。

最後に、3年間に渡った本研究の結果が、今後の指導者間・指導形態間の連携に着目した研究や実践に役立てられることを期待したい。

資料 1 公開授業の内容

一例として、農業科が作成した公開授業用資料を掲載します(簡略資料、 国語略案、 作業略案、 反省会記録)

1

平成 2 3 年度 3 学年公開授業 資料

農業科

国語指導者：吉村、矢倉 作業指導者：高田、矢倉、加藤

1 生徒の実態と題材設定理由

本クラスの生徒達は、日常会話は成立するが、人の気持ちや状況を考えて発言・行動することが難しい。相手の言動や周囲の状況に影響を受けやすく、良いことにも悪いことにも流されてしまう傾向がある。どの学習にも真面目に取り組んでいるが、緊張や自信のなさから消極적인になる場合もある。知識はあっても生活の中で活かすことができていない生徒が多い。

より良い社会人としての言葉のマナーを身につけることを目指し、国語では場面に応じたていねいな言葉遣いを学習している。また、それを仕事の場面で活用できるよう、作業学習で実践させながら、コミュニケーション能力の向上を図っている。

国語学習の構成として、相手と場面に合わせた言葉遣い、「いつ・どこで・誰が・何を・どうした」を意識した正確な報告と聞き取り、仕事の報告や相談をするときのマナーについての指導を展開していく。具体的に教師の説明や実演を見聞きしたり、場面を想定して生徒自身が実演をすることで、今後実際の場面で活用できることを期待し、本単元の学習を行う。またそれに伴い、作業学習では、指導者に対する報告や相談が適切かどうか、国語の学習が活かされているかに注目し、学習を行う。

今回は、言葉遣いに自分で課題意識を持っている生徒 B と、大半の言葉遣いに問題は見られないが一般就労を目指す生徒 A を抽出した。

生徒 A は、相手や場面に応じたていねいな言葉遣いができ、あいさつ・返事はいつでもどこでもはっきりと言うことができる。しかし、会話場面になると緊張や自信のなさから声が小さくなることもある。生徒 B は、基本的には場面に合った言葉遣いができるが、声が大きすぎたり、たまに指導者に対してていねいな言葉遣いができなかったりする。また友達同士の会話になると、つい乱暴な言葉を使ってしまうこともある。さらに、会話を始めるタイミングや会話をするときの相手との距離が時と場合に応じて望ましくないこともある。このように「相手や状況に合わせたコミュニケーション」ができるようになることが課題である。

国語における本時の展開として、今回は「仕事に活かす言葉遣い」の総復習を行う。今後の作業学習や実習先で活かすことができるように場面を設定し、実演と判断の両方を生徒が行う。作業学習における本時の展開は、草花の栽培にかかわる活動を通して、特に報告・相談の場面で国語の学習との関連性を大事にしながら、学習を進める。

2 抽出生徒の目標と手立て（前期 個別の指導計画・国語と作業学習より）

生徒		目 標	手 立 て
生徒 A	国 語	・相手や場に応じていけない言葉を使うことができる。 ・自信がないときや普段と異なる場面でも、適切な声量を意識して発言することができる。	・友人との会話などで不適切な言葉づかいがあれば、その都度指導をする。人前で発言することに慣れるような機会を多く設ける。
	作業学習	・ていねいさを意識して、手早く作業することができる。 ・自ら気付いて積極的に活動する。	・具体的な注目点を示すなど、ていねいな仕上がりを自ら確認できるように指導や提示を工夫する。また、一定時間内の目標作業量を提示し、その達成を促す。より積極的に準備や片付けなどができるよう、役割や仕事内容を初期に示した上で本人の自主性を見守る。
生徒 B	国 語	・相手や場に応じていけない言葉を使うことができる。	・どんな言葉づかいをすることが適切かがわかりやすくなるように言葉がけを工夫し、具体例を示す。
	作業学習	・まわりをよく見て安全に行動できる。 ・同じ作業を集中して最後まで行うことができる。	・危険性に対する具体的な注目点を示し、本人が安全を意識できるように指導を工夫する。また、一定時間内の目標作業量を提示し、意欲を喚起させる。

3 指導計画

国 語 7月4日（月）3校時：前時までの総復習、場面を設定して実演を中心とした学習

作業学習 7月6日（水）1～4校時：シクラメン栽培、トルコキキョウ栽培、カボチャ栽培

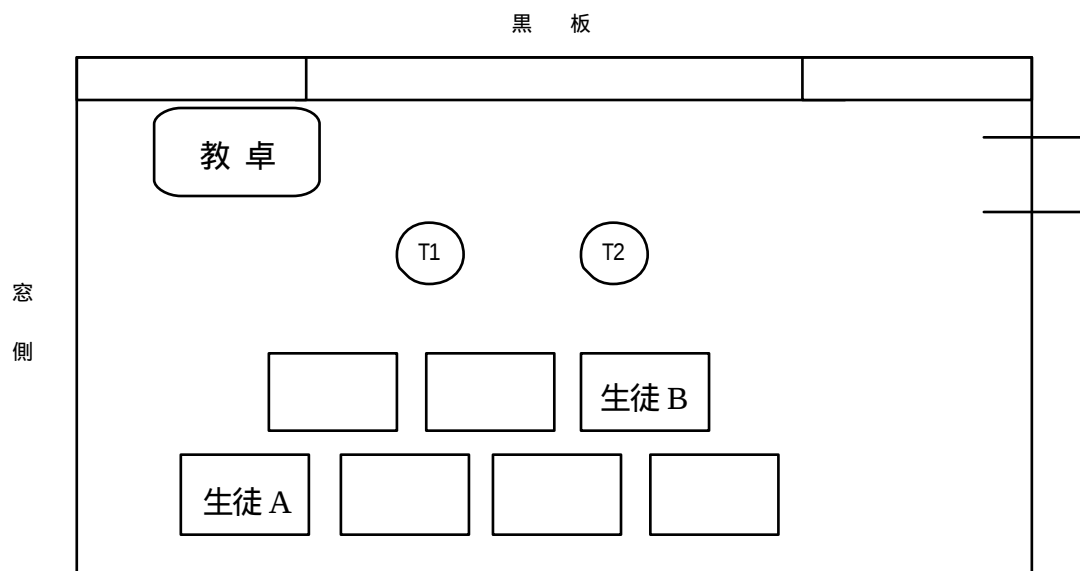
国語の指導計画は、すでに研究計画発表時に一覧にしてお渡ししてあります。また、略案にも簡単ではありますが概要を載せておりますので、そちらを参照してください。

作業学習の指導計画(経緯)についても、略案に概要を載せておりますので、そちらを参照してください。

単元・題材名	仕事に活かす	生徒	農業科3年生徒7名(抽出生徒2名)
		場 所	農業科 3年教室
日 時	平成23年7月4日(月)3校時	指 導 者	T1:吉村 T2:矢倉
単元の全体目標	○ 基本的な言葉遣いを学び、その上で仕事に活かす		
本時の目標	○ 前時までに学習したことを活かして、実際の仕事に活かす言葉遣いを学ぶ。 ○ 正確に伝え、聞き取り、工作上必要な言葉遣いを身につける。		

学 習 内 容	学 習 活 動	教材・教具	留 意 点
あいさつ (1分)	・日直の合図に合わせてあいさつをする。		
本時の説明 (5分)	・実演と判定をしあって、前時までの総復習をする授業であることを知る。 敬語・あいさつ・声量・正確に伝える/聞き取る・仲間内での依頼/提案・マナー語・報告+指示をもらう		・前時までに学習したことを思い出させる(言葉づかい、態度、イントネーション、声量など)。
判定 (6分)	・T2の実演を見て、判定をする。 (○:0問 ×:3問)	・○×カード ・場面の書かれたカード	・全員が○×カードを持つ ・T1は判定した理由を生徒に問う。その際、判定基準となるポイントを短冊を用いて視覚的に明確にする。
実演+判定 (25分)	・前時までに学習した言葉を使う場面の書かれたカードを全員が引き、順に実演する。実演者以外は実演を見て○か×で判定する。 ・×であれば、良い実演を行うよう促す。 実演+判定すること ○「お先に失礼します」 ○「お疲れさまでした」 ○「～してくれない？」 ○「～してもいい？」 ○「お話中失礼します」 ○報告「～しました」+聞く「～ですか？」	・短冊×5枚	*短冊に書くポイント* ・「～してもいい？」 ・「～してくれない？」 ・報告(～しました)+聞く(～ですか) ・「お話中失礼します」 ・話しかけるときには名前をつける
総まとめ (7分)	・なぜ授業で言葉遣いについて学習したのかを考えて意見を言う。	・短冊 「思いやる」 「助け合う」 「協力」	・T1は授業で「言葉遣い」を取り上げた理由を問う。
あいさつ (1分)	・日直の合図に合わせてあいさつをする。		

【配置図】



【指導計画（これまでの指導）の概要】

前時までに、ていねいな言葉遣い、適切な声量、「いつ・どこで・誰が・何を・どうした」の5Wを意識した聞きとりと報告、友達同士での依頼や提案をするときの言葉遣い（「～してくれない?」「～しない?」を基本型とした）仕事中には報告（「～しました」）をしてから指示を受けることなどについての指導を行ってきた。

抽出生徒のAについては、すでに身につけている基本的な知識と学習したことを元にして、場面に合わせた言葉遣いを行うことができる。自信のあることには積極的に発言をするが、自信のないことには黙ってしまう様子が見られた。

Bについては、毎回意欲的に取り組む様子が見られた。「いつ・どこで・誰が・何を・どうした」を意識した聞きとりと報告については、積極性に正確さも加わっていきいきと学習に取り組むことができた。少しの復習をするだけで新しい学習を習得することが大まかにできた。卒業後も必要となる自分の言いたいことを適切に伝える、より伝わりやすい表現の工夫、時と場合に応じた言葉遣いを意識して使うよう指導している。

今回、作業学習において、国語で学習してきた適切な報告と言葉遣いができるように指導を行う。

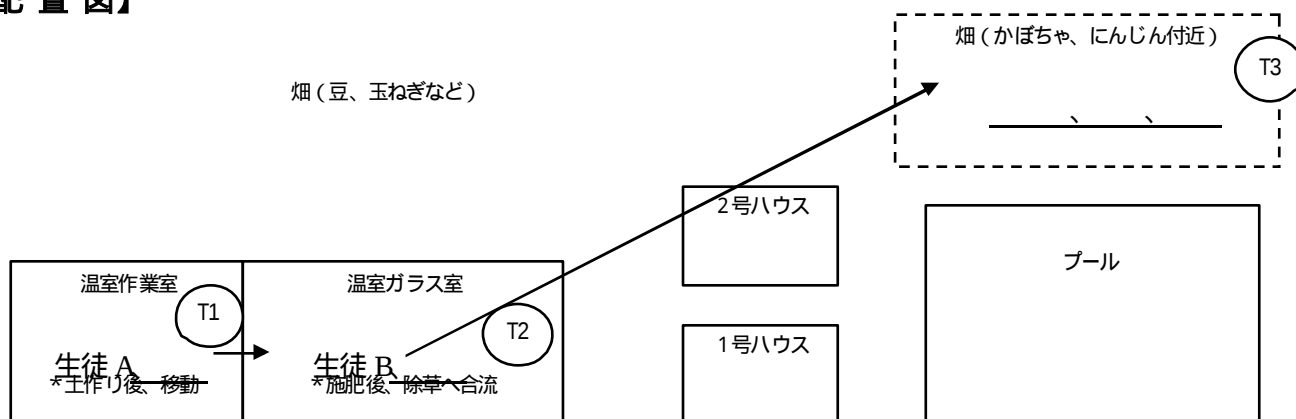
【抽出生徒の目標と手立て（本単元・本時）】

生徒	本単元の目標	本時の目標（上段）と手立て（下段）	評価
生徒 A	正しい言葉遣いを意識したうえで、必要なときに報告をして指示を受けることができるようになる。	・報告をしてさらに指示を受けるときの基本的な言葉づかいを習得する。	
		・基本的な言葉づかいの型を提示する。 ・本人がクラスメイトの言葉を聞いて、適切な言葉遣いがわかるように、助言したり、実際に練習する場面を設定する。	
生徒 B	場面に合わせた言葉遣い・声量を意識することができるようになる。	・前時までの、場面に合わせた言葉づかいを確認・応用練習する。	
		・正しい言葉遣いのポイントを視覚的にわかるように提示する。	

単元・題材名	シクラメン栽培、トルコキキョウ栽培 カボチャ栽培	生 徒	農業科 3 年生徒 7 名（抽出生徒 2 名） 1 名欠席 計 6 名
		場 所	農業科温室、農場
日 時	平成 2 3 年 7 月 6 日（水）1～4 校時	指 導 者	T1：高田 T2：矢倉 T3：加藤
単元の全体目標	○ 施肥や誘引、用土作りを、適切に行うことができる。 ○ 長時間集中して、ていねいに除草を行うことができる。		
本時の目標	○ シクラメンの用土を作ることができる。（生徒 A） ○ トルコキキョウの誘引ができる。（生徒 A） ○ 落ち着いて温室内の草花に液肥をかん注することができる。（生徒 B） ○ 時間いっぱい集中して除草ができる。（生徒 B...他） ○ 困ったときや担当作業の終了時など、場面に合わせて適切に報告・相談できる。（国語からの応用）		

学 習 内 容	学 習 活 動	教材・教具	留 意 点
始めのあいさつ 本日の作業について （9:05～9:10）	日直が号令をかける。 ・本日の作業時間について知り、集中力や作業効率を考える。 ・本日の作業内容を知り、担当する作業をイメージしたり、必要なものを考える。	提示用のホワイトボード	・長時間の作業であるため、集中力を持続させるような工夫を伝えたり、目標とする仕事量を伝え、意欲につなげる。
生徒 A 班（T1） 土作り （9:10～10:50） ・片付け 誘引 （11:00～11:55）	・シクラメンの用土を配合し、必要な量を準備する。 ・困って対処できなければ、担当者（T1）に報告・相談する。 ・トルコキキョウの鉢に 50cm 程度の支柱を立てて、ひもで固定する。	用土の配合表など 見本の鉢、ひもなど	・温室内の用土の袋数は少なめにしておく。 ・国語で学習した内容に関連させて働きかける。 ・支柱やひもはあらかじめ少ない本数で用意し、本人の動向を見守る。
生徒 B 班（T2） 液肥 （9:10～10:30） ・片付け 除草 （10:35～11:55）	・液体肥料を水で希釈し、温室内の様々な草花に与える。 ・途中分からなくなったり、液肥が終了したら、担当者（T2）に報告・相談する。 ・必要な用具を準備し、カボチャ畑の除草を行う。 ・途中集中できなくなってきたら、対処法を自分で判断し、担当者（T2 or T3）に報告・相談する。	各草花のプレート表示、提示用のホワイトボード、など	・肥料の希釈は 1000 倍で提示。 ・何度も行っている作業内容のため、本人の自主性を目指す。 ・国語で学習した内容に関連させて働きかける。 ・集中が途切れる様子があれば、間接的に対処を促す。（まだ集中できるか？どうしたらいいか？など）
、 、 班（T3） 除草 （9:10～11:55）	・必要な用具を準備し、カボチャ畑の除草を行う。 ・途中集中できなくなってきたら、対処法を自分で判断し、担当者（T3）に報告・相談する。		・長時間作業のため、水分休憩を設ける。また、生徒の実態に応じて適宜働きかけを工夫する。 ・国語で学習した内容に関連させて働きかける。
片付け （11:55～12:05） 作業を振り返って （12:05～12:10） あいさつ	・自分の役割を見つけたり仲間と協力しながら片付けに素早く取り組む。 ・本時の作業の様子を担当者から聞き、振り返る。 日直が号令をかける。	片付けチェック表など	・良かった点や改善点など、分かりやすく伝える。（報告の仕方を重点的に）

【配置図】



【指導計画（これまでの指導）の概要】

普段の作業学習では、いくつかの班に分けて作業を進めている。3学年は基本的に温室の管理が主となるため、生徒たちは4月からかん水や草花の管理を多く行ってきた。適切な方法で作業を行うことはもちろんだが、卒業後の進路にリンクするように、担当者への報告や仲間への声かけ、仕事への姿勢などを特に重点に置いて指導を進めている。

生徒Aは、慣れてくると仕事はある程度適切に行えるが、あまり覚えていない作業内容などは、困ったときに誰かに伝えることができず、動きが止まってしまうたり、自分で判断して間違った方法で行い、やり直しになることが多い。生徒Bは、単純な仕事であれば意欲的に取り組めるが、工程が多かったり長時間の仕事になると集中を欠き人や物にぶつかってしまったり、慌てふためくことが見受けられる。こうした状況は卒業後もあり得るので、まずは、身近な担当者にすぐに報告・相談し、次への指示や対処の方法を聞くよう指導している。

今回、国語の学習において、仕事に関連した敬語などの言葉遣いを学習しているため、作業学習でもその内容を踏まえながら、特に生徒が自主的に適切な言葉で報告できるような場面を大切に、指導を行う。

【抽出生徒の目標と手立て（本単元・本時）】

生徒	本単元の目標	本時の目標（上段）と手立て（下段→）	評価
生徒A	- 仲間や担当者に、適切に報告や返事ができる。 - 用土作りが適切にできる。 - 適切に花の手入れができる。	- 困ったときや担当作業の終了時に、きちんと相手に伝わる話し方で報告や相談をする。 →必然的に本人が困るような場面をいくつか設定しておく。国語での練習と絡めて、本人の動きを見守ったり、必要に応じて助言する。	
		- シクラメンの用土を作ることができる。 →用土の配合表を用意し、生徒自身の力でできるよう環境を整える。	
		- トルコキキョウの誘引ができる。 →見本を用意し、注意点を説明するなど、分かりやすい提示に努める。	
生徒B	- 仲間や担当者に、適切に報告や返事ができる。 - 施肥の方法が分かり、適切に行うことができる。 - 時間いっぱい集中して除草ができる。	- 困ったときや担当作業の終了時に、いまいちな言葉で報告する。 →国語での練習と絡めて、本人の動きを見守ったり、必要に応じてどう言えばいいかなどを助言する。	
		- やり残した花はないか、二重にやっていないかなどに気をつけながら落ち着いて液肥をかん注することができる。 →草花のプレート表示などを用意し、自己チェックを働きかける。	
		- 時間いっぱい集中して除草ができる。 →草を捨てに行くよう促すなど、途中で姿勢に変化をつけながら、長時間の集中力持続に努める。	

資料2 公開授業反省会の記録

国語、作業ともに農業科の公開授業の授業者反省と参観者意見です。

～ 国語 ～

授業者から

- ・T2の実演に時間がかかった。説明と言葉が多かった。
- ・生徒の実演に対する答えの判断基準を提示すればよかった。正解が1つではないので判断基準の設定が難しい。
- ・これまで6回の授業を行った。言葉遣いの勉強など、積み重ねが出来てきた。
- ・抽出生徒Aは自分の持っている知識で取り組んでいた。Bは前回の授業が確実に身につけていた様子であった。
- ・評価はAは、Bは○とした。

参観者から

- ・生徒が意欲的に取り組んでいた。教師がいろいろと場面設定したが、応用力がまだまだ足りないだろうから定着に向け作業学習で様子を見ていきたい。総まとめが尻切れトンボだった。
- ・生徒が迷う様子が多かった。決められたことを練習することができなかったことが反省。基礎基本が意外にしどろもどろの生徒が多かったので説明ができない生徒が多い。授業者もそこを押さえて、改めて授業を展開していく必要があると感じた。
- ・動きがあってよかった。その場面に応じて、ソーシャルスキルトレーニング的でよかった。
- ・Aの評価について。目標に対して、今まで彼女がもっている基礎的な知識で授業を受けていた。時間的な余裕が無かったこともあり、今回の授業での新たな知識等の吸収には至っていない。Aへの設定ができなかった。

校長から

- ・実演での判定や紙を引かせて判定があったが、基準を明確にして、どう言葉で表現して良いか考えさせる。
- ・場面設定で考えさせる、メリハリを（思考的な発問、クイズ的発問）

～ 作業 ～

授業者から

- ・国語のやったことを意識して活かそうと努力していたが、実際に使えるまでにはなっていない。
- ・慣れた場面以外では、言えなかったり、固まってしまうことがあった。
- ・Aの困ったときの伝え方は三段階評価の1に近い2。もう少し時間をかけて取り組む必要がある。
- ・遠くから呼んでいる場面があった。後片付けも含め、コミュニケーションが不足。
- ・本人たちに仕向ける場面設定が必要。

参観者から

- ・コミュニケーション時、相手の方を見ない、お互いの顔を見ない、機械的に言っていることが多い。何のために言うのか&伝えるのか。コミュニケーションの意味を再度確認し、継続した指導が必要である。
- ・Bは、授業では言葉遣いがよかった。だが、指導者の言葉に答えず、自分の気づいたことを先にやってしまった。
- ・Aはさこちない。授業に国語的要素を設定して取り組んでいく。また、場面によって声量が違う。
- ・国語で使った掲示物を作業場に掲示することについて賛否両論あり（年齢や学年を意識した言葉掛けでよいとする意見、指導の効果を考慮して必要性ありとする意見）
- ・会社や施設からは、器用さや体力についてはさほど問題として挙げられていない。質問ができない、大きな声で呼び止めができないなどしてケガをするのが一番よくない状況で、相手に伝えられないことが問題視されている。
- ・コミュニケーションの大切さを継続して指導していく必要がある。職場によっては名前を呼んでと指導されているところもある。今後いろいろ工夫が必要。

校長から

- ・六種類の土。あまり違いを理解していなかった。
- ・興味関心を持たせて取り組ませる必要がある。意味もしっかりと教える。国語と結びつけるのは意外と難しいが、意図的に状況を設定することが国語と連動するには必要。

資料3 各学級の成果と課題

公開授業を中心とした今年度の取り組みの成果と課題を各学級内でまとめてもらい、それを集約したものです。

○は生徒、●は指導者に見られる成果・課題

	成 果	課 題
国語	○普段、学級内であいまいだった言葉遣い・言い方を統一することができた。 ○友達同士/目上の人に応じた言葉遣いができた。 ○繰り返し同じ内容を同じ方法で指導した結果、クッション言葉や「～してください」などの言い方が定着してきた。前時の学習を思い出して考えることができてきた。 ●場面（焦点）を絞り、写真なども使うことで、具体的なイメージを持たせることができた。 ●場面に応じた言い方を考えてからロールプレイをするという学習の流れが定着した。	○ロールプレイや書く活動が足りず、飽きてしまう生徒もいた。 ○言葉遣い以前に「質問する」という行動ができるよう指導する必要がある。 ○事実を伝えるという点だけではなく、言い方(ニュアンス)も考えさせる必要がある。しかし、その理解が難しい生徒もいた。 ●授業内の時間配分が不適切だった。 ●個別目標をより具体的にした方がよかった。 ●目標の異なる生徒に同じプリント学習を行うのは少々難しい面もあった。 ●ロールプレイの正誤判断基準がわかりにくかった。
作業	○国語で習った言葉遣いを実践することを意識しながら作業に望むことができた。 ●国語で使用した掲示物を作業室にも掲示することで、作業前の再確認や作業中の指導で活用することができた。 ●国語の学習内容をより考慮した授業展開ができた。単に仕事をするという視点だけではなく、コミュニケーション力を高めるという視点から指導することができた。 ●作業の時間を実践の場とするべく、今後も意図的に状況を設定していきたい。	○国語で習ったことを実践できていない生徒もいた。 ○状況が異なるとできなくなるケースがあった（報告する際に話し中の相手が異なるとできなかった/作業種が異なるとできなかった） ○全体的に声が小さかった。 ○話す際にぎこちなさがある（慣れない？緊張？） ●様々な状況を意図的に設定していく必要がある。 ●作業に必要な知識（例えば土の違いや特徴）や作業工程の意味などを理解させる必要がある。そして興味関心や積極性の向上につなげ、ねらいとしているコミュニケーションの指導へと結びつけたい。
2つを通して	○授業時間外(実生活の中)で、学習した言葉遣いについて自ら意識している様子が見られる。 ○いろいろな言い方を学習したことで、「わからない」「できない」と言うことに抵抗があった生徒が「わかりません」「教えてください」とスムーズに言えるようになった。 ●国語でコミュニケーションに焦点を当て、作業で生かせるよう意識し合ったため、指導者間で話し合いが増えた。そして指導に役立たせることができた。 ●国語と作業が連動することで、具体的な文例の練習と実践を段階的につなげることができた。 ●指導者間で、生徒の課題、目標、指導方法の共通理解を図ることができた。	○授業時間内とそれ以外で、言葉遣いが異なる生徒がいる。 ○何のために言うのか、伝えるのかといったコミュニケーションの意義・必要性の理解に欠ける（質問や声量が不適切の場合、ケガにつながることもある） ○学習していない言葉遣いに課題のある生徒がいる。 ○声量の調節が難しい生徒がいる。 ○相手に伝えるタイミングがわからない生徒がいる。 ●以前からコミュニケーションについては指導していたが、他教科と関連づけたり、実践的な内容に結びつけて活用することについては、あまり重点を置いてこなかった。もっと早期から取り組むべきだった。 ●自分で考え、積極的に行動させる状況を意図的に多く設ける必要がある。 ●指導者の指導内容が場面や生徒によって異なると混乱させてしまう。一貫性のある指導が必要である。

資料4 生徒アンケート

質問項目と、記述させた回答をまとめたものです。

【国語】

今まで、どんなことを勉強しましたか？ おぼえていたら、○をぬりつぶして●にしてください。
「今まで」とは、高校1年生のときから今日までです。

- ていねいな字を書く練習
- 原稿用紙の使い方（ルール）
- うまい作文（感想文）の書き方
- 文章を正確に書きうつす練習
- メモのとりかた

…というように、3年間で授業した内容が羅列されている。より真剣に思い起こさせるために、授業していない内容もあえて入れてある。

のほかに「こんな勉強もしたよ!」ということがあれば、書いてください。（回答数 12 / 23）

- ・原稿用紙の使い方、文章を読んで内容を理解する、相手に伝わる話し方、文章を声に出して読む、クッション言葉、ていねいな言葉遣い。
- ・劇の台本練習もしました。
- ・友達の名前
- ・ら抜き言葉
- ・わかりません（同回答2）
- ・漢字を書きました。
- ・ありません（同回答3）

国語で勉強したことは、役に立っていますか？（回答数 17 / 23）

- ・作業でていねいな言葉ができた。
- ・返事が大きな声になった。
- ・はい、3年生になってから、国語に興味をもつようになった。
- ・国語で習った漢字を日記でも実習日誌でも使うことが多くなった。
- ・漢字では、だいぶ練習したので漢字を使って書くようになりました。
- ・書ける漢字が増えてきた。読める漢字もおおくなりました。
- ・国語で勉強したとおり、実習でもわからないことはすぐに聞くことができました。
- ・わからない漢字があり、一生懸命練習してわかる漢字は見ないでできました。国語の時に練習で「お仕事失礼します」と勉強して実習中でも言えました。
- ・はい。3年の国語で勉強した大きな声でしつれいしますなど言うことができました。
- ・作業の後始末でコミュニケーションが取れました。作文の書き方を教わりました。暑中見舞いの書き方もわかりました。
- ・実習では、しっかりとあいさつや返事や報告が大きな声でできました。自学科作業では、国語でやったことが身についたのが役に立ちました。
- ・習字
- ・わからない。（同回答2）
- ・わからない漢字を教える事ができた。
- ・漢字の練習はしていたけど、時々忘れる時があった。

これから、国語でどんなことを勉強したいですか？（回答数 19 / 23）

- ・将来の役に立つ事と漢字がしたい。
- ・俳句の勉強をしてみたいです。
- ・もっと国語で漢字の勉強がしたいです。
- ・ことわざや熟語
- ・漢字の勉強したい
- ・手話
- ・文章を声に出して読む勉強をしたいです。
- ・もっともっと漢字の読み書きをやりたい。（テストも）
- ・ない（同回答2）
- ・パソコンで新聞みたいな物を作りたい。
- ・もっと難しい漢字（2級・1級）の練習をしたい。
- ・漢字の練習、なぞる練習
- ・小説などの本を読んで声に出してやってみたい。
- ・漢字
- ・言葉遣い
- ・来年は漢字検定のために漢字の勉強をしたいです。
- ・わからない

【数学】

今まで、どんなことを勉強しましたか？ おぼえていたら、○をぬりつぶして●にしてください。
「今まで」とは、高校1年生のときから今日までです。

- お金の計算
- 電卓の使い方
- 文章を読んで、式を立てる
- およその数（概数）
- 計量カップの使い方

…というように、3年間で授業した内容が羅列されている。より真剣に思い起こさせるために、授業していない内容もあえて入れてある。

のほかに「こんな勉強もしたよ!」ということがあれば、書いてください。（回答数 15 / 23）

- ・サイコロの正しい作り方、表と裏が7になるように（同回答1）
- ・分数、以上・以下・未満、割合、じょうぎやメジャーの使い方、お金の計算、平等なわけ方、偶数・奇数
- ・買い物学習をしました。 ・距離の勉強しました。 ・計算をする ・サイコロ
- ・時刻表の見方をやりました。 ・ありません（同回答4） ・わかりません（同回答1）

数学で勉強したことは、役に立っていますか？ （回答数 18 / 23）

- ・数学で足し算や引き算をやるととても役になりました。
- ・足し算・引き算の問題でわからない所を（実習先で子どもに）教える事ができた。
- ・買い物に行く時、お金の数を考えて買うことができました。
- ・買い物は嫌でしたが、今は楽しくなり、お金の計算がわかるようになってきました。
- ・実習中の時、かけ算や引き算などをやり、学校で習ったことが役に立っていました。
- ・何か欲しい物をたくさん買う時に計算が役立ちました。自分は国語より数学が好きです。
- ・数学で勉強したことは、実習先で結構役に立っています。計量で重さのことを勉強して良かったです。
- ・重さ、長さ、計算などは今でも少しずつわかってできるようになりました。実習先でも、お金の計算もできるようになりました。
- ・割引とかわからない。 ・考えましたが思い浮かびませんでした。
- ・こづかい帳でうまくつけられました。 ・はい、作業や実習などで計量などができました。
- ・時刻表、地図 ・ある ・はい ・わからない（同回答2）

これから、数学でどんなことを勉強したいですか？ （回答数 18 / 23）

- ・割り算の計算をしたいです。 ・お金の計算、お金の数え方。
- ・筆算の使い方、暗算の使い方 ・以上・以下・未満の勉強をしたいです。
- ・そろばんの勉強したい。 ・100マス計算
- ・時刻表 ・筆算をやる
- ・修学旅行の時に使うお金の勉強がしたいです。 ・一次関数・二次関数などもう少しやってみたい。
- ・じょうぎを使ってペーパークラフトの紙の作り方を勉強したいです。
- ・方程式をやりたい。一次や二次もやりたい。難しいやつやりたい。
- ・方程式や因数分解、一次関数や二次関数などを多くもっとやりたい。
- ・ない（同回答2） ・わからない（同回答1）

↓ 以下は紀要に載せるものではありません

以下のように印刷して14pにしてください

- ・(1)～(7) 計6p 通常印刷(たて) → 印刷後も計6pのまま
- ・(8)1～4 計10p 全て割り付け印刷にする → 印刷後は計5pに
- ・(8)5 計3p エクセル 通常印刷(よこ) → 印刷後も計3pのまま 印刷後合計14p

行数や余白など、職会提案通りの書式では収まらず変更した部分があります。
また、3年間のまとめを掲載することで予定ページ数を越えてしまい、申し訳ありません。

全体研修報告会

- p1～3 前書き・(7)成果と課題
- p4～5 アンケート質問 集計 国語・数学 いずれも通常印刷
- p6～7 資料5 割り付け印刷
- p8 資料4 割り付け印刷

生徒へのアンケートの質問項目①の結果と、指導者アンケートの結果を併記したものです。

※ 繰上げ部分は、3年次の公開授業で抽出した生徒指導者アンケートの「以前」に書かれている生徒の課題は、国語・数学の授業の中をはじめ様々な指導場面で行われています。

＜解説について＞

- 本人が学習した覚えがあり○をつけた項目数(A)と、学習したはずだが覚えがなく○をつけた項目数(B)に注目した。AとBを合算したものは、本人が学習した内容の数(C)といえる。このCに占めるAの割合を、ここでは「記憶率」と表記している。しかし、アンケート項目の理解の度合いが個人により格差である。また、学習した記憶が曖昧で、正確にその知識を活用できていないものもある。よって、この「記憶率」は、正確には「知識を活用できるかどうか」ではなく「学習した事実を少なからず記憶している度合い」を示す参考値である。この値を参考として、東海大学の様子(指導者アンケート)と比較し、3年間の成果と課題(知識の定着度合い、活用する力のつき具合)を考えたい。

第 章

プロジェクト研究

「教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理」

「産業科の資料改訂」

「研究推進委員会(本校としてのキャリア教育の進め方)」

教務部プロジェクト研究

1 研究の目的

平成 21 年度末、本校の研究課題に関するアンケート調査を行い、その中で『教育支援計画、指導計画、通知表のあり方』に関する意見が出された。平成 22 年度に入り研修部会、研究推進委員会を通して話し合った結果、『教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理』を主題として研究を行うことが決定された。

本校に限らず、全道の特別支援学校では「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」「通知表」など指導計画をたて、それを評価しながら教育活動が行われている。一人ひとりの生徒がその実態や個性に応じて持ち味を発揮するためには、適切な指導計画・評価は欠かせない要素である。本校においては、「個別的教育支援計画」は支援手帳として道教委が作成したモデル版の様式を一部用いて持ち運べるサイズに変えたものを使用している。「個別の指導計画」は、各教科領域毎の目標及び手立てを前期と後期に分けて記入し、その実施した評価は「通知表」に記入している。現在行っている形も工夫され効率的になっているものではあるが、更に作成や運用の改善ができればと考える。

本研究は、指導計画における個人目標の設定から評価までの一連の流れを、より効率的かつ実用的なものとし、生徒の指導・支援に結びつけられることを目的としている。

2 研究の内容と方法

平成 22 年度は、本校の現在の様式やその作成時期、記入方法などを元に不具合な点を洗い出す。各学年部会や保護者から、使い難い点を挙げてもらい、改善のための参考とする。また、他校の取り組みを調査し、効率的に運用している事例を参考にして本校の様式に活かしていく。一方では、現在卒業生のいる事業所より、支援計画の様式を教えてもらい、移行支援をスムーズに行うために必要な情報をまとめていく。

方法としては、教育課程検討委員会の中で中心となるワーキンググループを組織し、そこが中心となって立案した。校内においては各学年部会で検討を行い、他校には様式や取り組みについて調査を行った。これらをもとに教務部が中心となって平成 23 年度に各様式の見直し・準備をする。

3 推進経過

- 平成 22 年 4 月 研修部会、研究推進委員会を経て、全体研修会で本研究の実施を確認する。
- 6 月 全体研修会にて、教育課程検討委員会が中心となって本研究を行うことを確認する。
- 7 月 教育課程検討委員会にて、本研究ワーキンググループ（WG）を立ち上げる。
- 8 月 WG で進め方を確認する。
- 10 月 各学年会で現在の様式等について意見を集約する。（調査 1）
道内知的障害単置高等部・特別支援学校 13 校を対象に調査を行う。（調査 2）
全体研修会にて中間報告を行う。
- 11 月 現様式の課題点、他校の取り組みを整理する。
- 12 月 WG で進め方を確認する。
教育課程検討委員会にて方向性を確認する。
- 平成 23 年 1 月 支援計画（支援手帳）に関して保護者に調査する。（調査 3）
移行支援に関して事業所に調査する。（調査 4）
WG でまとめ方を確認する。
- 2 月 全体研修会にて研究成果の報告をする。
- 7~12 月 各様式の見直し・準備。

(調査1) 本校における教育支援計画、指導計画、通知表の様式について(平成22年度調査より)

<調査対象>

1学年部会、2学年部会、3学年部会

<調査の内容>

- ・個別の指導計画の様式や活用する上での不具合な点
- ・個別の教育支援計画「支援の目標及び評価」の様式や活用する上での不具合な点
- ・通知表(前期・後期)の様式や活用する上での不具合な点 の3点

<調査期間>

10月~11月

(調査2) 他校における教育支援計画、指導計画、通知表の様式について(平成22年度調査より)

<調査対象> 道内知的高等養護学校(支援学校)

札幌高等養護学校、小樽高等支援学校、豊明高等養護学校、白樺高等養護学校、
小平高等養護学校、新篠津高等養護学校、夕張高等養護学校、雨竜高等養護学校、
美深高等養護学校、紋別高等養護学校、伊達高等養護学校、中札内高等養護学校、
中標津高等養護学校 (計13校、うち回答 7校+ 1校 小樽は研究会の資料より)

<調査の内容>

- ・個別の指導計画の様式
- ・個別の教育支援計画「支援の目標及び評価」の様式
- ・通知表(前期・後期)の様式
- ・運用に際し工夫・配慮されている点 の4点

<調査時期>

10月

(調査3) 本校における教育支援計画、指導計画、通知表の活用について(平成22年度調査より)

<調査対象>

在籍する生徒の保護者

<調査の内容>

- ・個別の教育支援計画の様式や不具合な点

<調査時期>

1月下旬~2月上旬

(調査4) 本校卒業生の進路先における個別の支援計画の活用状況について(平成22年度調査より)

<調査対象>

卒業生が在籍する事業所(抽出)

<調査の内容>

- ・支援計画の様式

<調査時期>

1月

4 研究の実践

(1) 各学年から出された課題等について (調査 1 より)(平成 22 年度調査より)

各学年の課題等比較一覧表

	出された課題点	改善の方策
1 学年	他学科作業に関しては、通知表を書く段階で「目標」をたてている状態で、個別の指導計画でたてた作業学習の目標に沿って評価することも可能ではないか。	他学科作業の組み方について検討され、一部変更になる予定。 基本的には、通知表の目標を自学科と他学科共通として評価する。 (やや曖昧になっていたが、これまでこの形で評価していた。)
2 学年	支援計画や指導計画について保護者と話す時間が短いと感じる。保護者のものとなっているのか？ 支援計画の「身辺自立」「対人関係」「コミュニケーション」「働く力」「生活技能」「その他」と指導計画の「総合目標」「日常生活の指導」「体力づくり」が別々のような感じで、保護者はどう押さえているのか？また、こちらもどの様に押さえていけばよいのか分からない。(支援計画の各項目は、開校当時からの“つきたい力”であり、以前はそれぞれ細かく評価をしていた) 軽減するのであれば、特別活動か所見欄か？所見欄は広いが、すべて書かなければならないのか？押さえは人によりまちまち。 評価の部分よりも個別の目標と学習内容の字数が多くなり、ポイント数を小さくしているが、見にくい。 ポイント数を大きくして保護者が見やすいようにしてはどうか。出欠の記録は次のページでも良いのではないか。	懇談の時間の確保と「支援計画は保護者のもの」という説明を周知する取り組みが必要。 確かに現在共通する項目にはなっていない。指導計画は学習場面に即した教科毎にたてるので、支援計画の項目を変える以外は揃うことはない。 どちらも異なる項目なので、どちらか1つということにはならない。所見欄の幅は、記述する文章量に合わせて変えることは可能。見やすい工夫は必要。 通知表の「目標」「学習内容」「学習の様子」の各欄の幅は、文字数に合わせて縦線を調節すれば見やすくなるのであれば、可動式とするのがよい。 出欠の記録を別のページに移すことは可能だが、の課題と相反するところが出てくる。
3 学年	「対人関係」と「コミュニケーション」の区別が難しい。 「その他」の項目に何を書けばよいのか？ 進路先や施設などに見せることになるので、記述に気を遣う。内容が通じるかどうかなど。 目標の欄が狭く、文字数に制限がある。(たくさん個別の指導計画に書いても書ききれない)	判断が難しい内容は、どちらに書いても良いと思われる。 他の項目で書けないことを書き、特になければ記入する必要はない。 もちろん記入に際しては細心の注意が必要。伝わりやすい文章になるよう、複数の目でのチェックが必要。

校内において、通知表等の不具合な点はどこにあるか調査を行った。各学年部会で協議してもらい、それをワーキンググループ (WG) で集約した。出された課題は上記の表のとおりで、それに対する改善の方策をWG、教育課程検討委員会で協議し、その結果も表にまとめた。

出された課題だが、個別の教育支援計画に関して () は、様式というよりも記入する項目についてのものが多く、一部整理することで対応できることが分かった。

個別の指導計画 () では、保護者との懇談の持ち方、生徒の学習課題を保護者と共有することが求められる。

通知表 () では、記入する欄や文字数などの課題が挙げられるが、一方では、文章の書き方を工夫することでおおむね改善されるものと考えられる。

(2) 他校の様式について (調査 2 より) (平成 22 年度調査より)

各校の様式等比較一覧表

校名	調査から分かったこと
小平高養	支援計画はモデル版と同様式。 通知表は指導計画の様式と揃えているが、記入の際は重複している様子。 指導計画や通知表は、教科領域毎に 1 ページ使用。 通知表の記入に際し「記入について」(記入要領)が整理されている。 通知表は 1 年間使用。(前期渡しきりではない)
札幌高養	支援計画はモデル版と同様式。 指導計画は、行動特性、長期的目標、育てたい力、自立活動、形態別の目標・手立て・結果や課題。 通知表「共育メール」は指導計画と項目を揃えている。保護者からの願いや要望で 1 ページ。
中標津高養	支援計画のフェイスシートに健康に関する記録(既往症、アレルギー、食事や運動の制限、現在の病気・服薬、かかりつけの病院、発作について等) 3 ページ追加。 指導計画の目標は長期(1年間)でたてている。= 支援計画の短期目標 通知表以外に日生・自立活動・働く力等の 3 ヶ年の変化を記した「学校の様子」を発行。
夕張高養	支援計画はモデル版と同様式。 指導計画と通知表を一本化。
美深高養	支援計画はモデル版と同様式。 指導計画(移行支援計画)は、重点目標と前期 3 点、後期 3 点、及び評価。 通知表は、各教科等の目標、評価項目、評価・学習の様子。
新篠津高養	「課題設定の理由」がない以外はモデル版とほぼ同様式。 通知表は、各教科等で項目に沿って 5 段階評定と特記の記述を併用。 後期には「現場実習」の項目がある。
白樺高養	支援計画と移行支援計画の重複部分を整理し、1 本化。 支援計画の短期目標は、指導計画とつながる項立てに改善。 指導計画は、「自立活動」「日常生活」「社会生活」「働く」の項目で、「日常生活」「社会生活」は学校以外に舎と家庭の記入欄がある。2 ページ 通知表は、ABC の 3 段階評価で、生単、総合、作業については記述式。
小樽高支 研究会資料から	指導計画が保護者向けと本人向けの 2 種類あり、本人向けのものがそのまま通知表になっている。 生徒の意向を尊重し、計画を立てる際に個人面談を行っている。

校内の課題の割り出しと併せ、他校の実情についても調査を行った。得られた資料からいろいろなことが分かり、大変有意義であった。

まずは個別の教育支援計画であるが、基本的に道教委で作成したモデル版をそのまま使用している学校が多い中で、中標津高等養護学校では、フェイスシートに生徒の保健・健康面での項目を追加していた。また、白樺高等養護学校では、移行支援計画との整理を行っている最中ということで、今後まとめられる成果が期待される。

個別の指導計画と通知表をいかに融合化し、効率的に計画と評価を行うか、どの学校もそれぞれに工夫されていることは共通するところである。その最たるものは夕張高等養護学校で、個別の指導計画と通知表が一体化している。とても効率的に運用されていることが分かった。

(3) 保護者から出された課題等について (調査 3 より) (平成 22 年度調査より)

教育支援計画に関するアンケート 集約結果 (回答 3 8 枚)

1 . フェイスシートの内容は、十分なものとなっていますか？

足りない項目は？

- ・ 十分です。
- ・ フェイスシートの内容は、十分なくらいまとめているので足りない項目はありません。
- ・ 緊急連絡先の項目は、3 まであった方が良いでしょう。

必要のない項目は？

- ・ なし

改善点は？

- ・ もう少しコンパクトになると良い。 平成 22 年度より更に薄型に変更
- ・ 細かい部分まで書いてあるので十分だと思います。

2 . 個別の教育支援計画は、保護者の意向に沿った形となっていますか？

- ・ わかりやすい。
- ・ 十分に沿った形になっています。
- ・ 話して相談したものに沿っています。
- ・ 保護者の意向はもちろんの事、保護者、本人、学校の意向や方向性が分かりやすいので良いと思います。
- ・ 今のところ、特別使用することもないのですが、この先たとえば他の関係機関で使用する時、入学してから学年末までと 1 年間間があり、その間の情報はどのようなのだろうか、口頭で細かく説明することになるのでしょうか、そこをもう少し書き加えて頂けると、いざという時に役立つような気がします。

3 . その他、教育支援計画に対してお気づきの点がありますか？

- ・ 支援の評価基準は特にありますか？あれば基準も載せて欲しいと思います。

* その他の意見・要望

- ・ 現場実習先の記録として、実習先の作業内容やその評価を簡記されていればよいと思います。
- ・ 相談機関の他に卒業してからの進路先の名簿等があればと思います。選択する時の情報があれば視野が広がり、安心感があると思います。
- ・ 子供が実習をして、気に入らなかった場合、次への対応が早く良かった。

(4) 高等養護学校卒業後の個別の支援計画の一例について(調査 4 より)(平成 22 年度調査より)

「個別の支援計画」は、障がいのある方の乳幼児期から成人期までの一貫した支援を行うことを目的として作成されるものである。そのため、本人を取り巻く各支援機関を結ぶツールとしての役割が期待されている。この部分では、いわゆる学校卒業後の社会人(成人期) の部分の「個別の支援計画」について簡単に触れることを通して、本校の「個別の教育支援計画」をはじめとした各種計画作成に関して参考になるかもしれない(一貫性の意識等) と考え、具体例を取り上げてみることにした。

現状としては、学校を卒業した場合で考えると、一般就労(企業就労) では、学校の「個別の教育支援計画」のような就労支援のための「個別の支援計画」にあたる部分は、3 年生の現場実習先での話を聞く限りではあまり聞かないのが現状である。北海道障害者職業センターでは、ジョブコーチを活用する際に、職業評価をはじめとして「支援計画」を作成することになるが、現段階では、現場実習にジョブコーチを活用することはできない。(そのため現状では、企業側が職員をつけてほしいと言ってきた場合には、学級担任等が引率という形でつくことになる。)

ただ、国や都道府県は、障がい者の企業就労を進める方向性を示しており、その中で、就業・生活支援センター(道南地区は「すてっぷ」) の整備なども示しており、就業・生活支援センターの専門性を活用することも一つの方法であると思われる。また、就労支援には、生活の部分の支援も当然必要となるので、その際には、障がい者総合相談支援センター(道南地区は「めい」) の専門性を活用することも企業就労における個別の支援計画作りには大切になるとと思われる。(そして、企業を含めたネットワークができていくのが理想である。)

一方、福祉的就労については、平成 15 年度に措置制度から支援費制度に切り替わった際に、サービス提供事業者には、「個別の支援計画」の策定が義務づけられるようになった。それにより従来の福祉施設中心としたサービス提供から個人に応じたサービス提供へという流れができ、平成 18 年度から施行された障害者自立支援法を経て、福祉サービスの利用に関しては、施設中心から個人中心への流れが少しずつ大きくなってきている。

福祉的就労の場合には、利用者本人が、自治体(市町村) の窓口を通して、福祉サービスの利用を希望し、福祉サービス事業所と利用契約を結ぶことになる。その契約ということだけを考えれば、ある意味学校の「個別の教育支援計画」以上に重要とも考えられる。

そこで、今回は 3 年生の現場実習先の中から、1 か所だけ例示してみたいと考えた。その福祉サービス事業所は、いわゆる多機能型事業所と言われるところで、「就労移行支援事業所」と「就労継続 B 型事業所」の二つの事業を展開しているが、当然、二つの事業所では異なる支援計画を作成し、サービスを提供しているとのことであった。

そこで今回は、本校の 3 年生が実習をした就労移行支援事業所の書式をいただいて実習担当のサービス管理責任者の方と話をしたが、特に就労移行支援事業所では、基本的に 2 年間をめぐりして、職場実習なども取り入れながら就職を目指すということを基本としているとのことであった。

また、地元の今金町の福祉施設職員と福祉サービス事業所の個別の支援計画の状況について意見交換をすると、どの福祉サービス事業所も、基本の項目(基本的生活習慣、対人関係、作業能力など) を押さえながらも、そのサービス事業所の特色と利用者本人の実態を考え合わせながら作成することになるとのこと。そのため、福祉サービス事業所の書式も、ある意味無数にあると考えられ、よりよいサービス提供のために、「個別の支援計画」の創意工夫が進められているのだと思われる。

6 成果と課題（平成 22 年度調査より）

（１）成果

今回、校内（保護者、各学年）他校など、調査を行うことで多くの声や運用の実情を知ることができたことは大きな収穫である。

個別の教育支援計画についてであるが、本来「家庭のもの」であることを再確認し、今後は記入する際から保護者が記入するように変えていくことが求められる。例えば、現在フェイスシートは、入学時に提出される書類を元に担任（学級）で必要項目を転記している状態であるが、今後は、フェイスシート自体を直接記入してもらうことも考えていく。ただし、入学時に提出してもらう書類の内容や項目を精査していかななくてはならない。

個別の指導計画については、現在通年（前期後期合わせて）で A4 版で 1 枚作成している。これは、他校にない程簡素化されている。通知表には各学習項目の目標をコピー＆ペーストして別個に作成しているが、これに関しては非効率的というわけではないものと考えられる。

また、通知表は前・後期とも渡しきりにしているため、休業日明けに戻って来ないということが避けられる点と、その都度印刷すればよいという点で、今後も継続することが望ましいと考えられる。これらのように、運用面での方向性を示すことができたことは大きな成果である。

（２）課題

実際の運用に際し、課題となるところも浮き彫りになった。

個別の教育支援計画については、入学時に提出してもらう書類の精査ということで前述したところであるが、配布する書類の項目が重複しないように整理しなくてはならない。また、今後は小学校や中学校で作成され、それを持参するケースが増えていくものと考えられるが、これらと本校の支援手帳との関連についても整理していかななくてはならない。

一方では、このシステムがスタートした当初の「支援計画は保護者のもの」という理念に立ち返り、在学中の課題とその支援について学校と保護者が一緒に計画をたて、一緒に支援していくものにしていかななくてはならない。また、卒業後の進路先に、その子の特徴や配慮すべき点、こういう支援があればこういうことができるなどの情報を「移行支援」として、分かりやすく引き継いでいけるものを整理していかななくてはならない。

個別の指導計画及び通知表については、個別の教育支援計画とは性質が異なり、学校で作成・運用していくものであるため、基本的にはその体系は変わらないものではあるが、例えば他学科作業の位置づけが変わるなど、実際の学習場面において変わるところがあれば、それに応じて部分的に修正する箇所が出てくることも考えられ、臨機応変な対応が求められる。ただし、保護者からはこころ変わるなどと思われない配慮も必要である。

一方では、記入に際して文章力の向上が求められる。同じ指導集団として、互いに忌憚なく推敲できるような日常的な関係作りが必要であり、少ない文字数でも的確にかつ分かりやすい表記ができるように日頃から意識することが肝要となる。

以上の調査をもとに平成 23 年度に教務部で新様式の検討を進めた。具体的には、次頁に掲載するが上記のアンダーラインに挙げられている点に注目して議論が進んだ。

直接、フェイスシートに記入してもらうより事前に提出してもらっている「生徒連絡票」「保健関係調書」をフェイスシートに合わせることでより入学前にフェイスシートの準備を進めることができるようにした。

通知表では、「HR 活動」「学校行事」を「総合所見」に含めて評価することにより事務量の軽減を図るとともに「個別目標」「学習内容」の欄を広げ、「活動の様子」「総合所見」を充実させた。

新学習指導要領では、自立活動において「人間関係の形成」と「コミュニケーション」が分かれていることから「対人関係」と「コミュニケーション」は別枠のままとした。

100

Figure 1

[illegible]

10

Table 1

目 录 中国书画函授大学·肇庆分校建校二十周年纪念册

[illegible]

[illegible]

明記	①	
	②	
	③	
主要事項	①	① 事項
	②	② 事項
	③	③ 事項
その他	①	
	②	
	③	
その他	①	
	②	
	③	

※ 申請書に記入する事項は、申請書の記載事項、その旨を記載してください。
 (例) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

明記	①	
	②	
	③	
主要事項	①	① 事項
	②	② 事項
	③	③ 事項
その他	①	
	②	
	③	

※ 申請書に記入する事項は、申請書の記載事項、その旨を記載してください。
 (例) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

明記	①	
	②	
	③	
主要事項	①	① 事項
	②	② 事項
	③	③ 事項
その他	①	
	②	
	③	

※ 申請書に記入する事項は、申請書の記載事項、その旨を記載してください。
 (例) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

I: 学習の記録

[illegible]

II 自立活動の記録

[illegible]

III 要員全活動の記録

【電話番号】	03-5561-1111
【住所】	東京都中央区銀座5-10-1
【営業時間】	10:00~20:00
【定休日】	日曜日・祭日
【アクセス】	有明駅より徒歩10分

TV 聯合所製

[illegible]

産業科プロジェクト研究について

1 研究を始めるにあたり（経緯）

窯業を中心として展開される産業科の授業は、専門教科という特性から指導者の専門性が求められる教科であると考えられる。近年、学科内スタッフの入れ替わりが多く初めて授業を担当する指導者が試行錯誤している現状も見受けられる。改善策として、本学科に誰でも容易に活用できる補助教材（資料）などがあればよりスムーズに指導計画、授業展開が行われるのではないだろうか考える。そこで、今年度から複数年継続的に作業工程表などの見直し及び制作、窯業に関わる資料を収集、制作していくことを学科部会で決定した。

その初年度として、重要度の高い「オリエンテーションに関わる資料」を取り上げ制作することとし、今年度各学年で取り上げている題材に関わる工程表の見直し及び制作も併せて行うことにした。

2 担当について

オリエンテーション資料の作成：パワーポイントで制作（山田）

作業工程表の制作および見直し：ワードで制作（各学年）

ア 清掃方法（1 学年）

参考資料「卒業後の社会参加・自立を目指したキャリア教育の充実」ジエース教育新社

イ 泥しょうづくりと鑄込み（2 学年）

ウ よりづくり技法「スフレ小鉢の制作工程」（2 学年）

よりづくり技法の動画（2 学年）

エ スパッタリング技法（3 学年）

3 成果と課題

成果

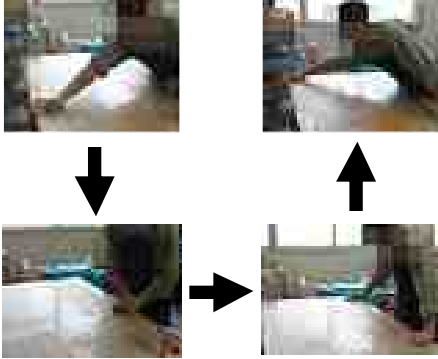
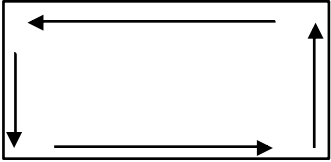
学科のスタッフ間で共通理解のもと、協力して本研究「オリエンテーション資料の制作」「作業工程表の制作および見直し」を行うことができた。また、完成した資料を紙上だけでなくサーバーにデータとして保存できたことが挙げられます。

清掃の工程表制作については、今年度の早急課題としていたので、この完成をもって各学年共通理解のもと行うことができると期待する。

今年度の完成資料は別紙とする。

課題

今年度の完成資料は、あくまでも暫定的なものであるため、今後も生徒の実態や指導者に応じて改訂していくことが望ましい（来年度以降も見直しと改訂をしていく）。また、さらに新しい題材についての工程表を動画を含め制作をしていく必要がある。

掃除	用具	雑巾・バケツ・たらい・エコせっけん・化学モップ・水モップ・ほうき・ちりとり等		
作業工程	作業内容	作業図		留意点
1 道具の 片づけ	・粘土を残さないように、道具箱の道具を雑巾で拭いて道具箱に片づける。 ・のべ棒やたたら板、ろくろなどの道具を雑巾で拭いて所定の場所に片づける。	  (枠取り順)  (手の拭き方) 		・道具の端を拭き忘れないようにする。 ・粘土を拭き残した場合、乾いた粘土がこびりついて道具が使用できないことがある。 ・ろくろは、横や下の部分を拭き忘れることのないように注意する。
2 作業台の 雑巾がけ	・枠取りをしてから、作業台を木目に沿って雑巾で拭く。 (枠取り)  (雑巾の絞り方) 	・枠取りをした後、作業台の奥から手前に向かって雑巾で拭く。 ・1度拭いても汚れが取れない場合には、2度、3度と雑巾を洗いながら拭く。		・絞った雑巾をバケツの中で開いて、手についた水を拭く。
3 ボウルや スポンジ などの道 具洗い	・ボウルやスポンジなどは、バケツの中で洗う。 ・ボウルは掃除用スポンジを使って洗う。			(掃除用スポンジ) 

4 洗った道具の乾燥	・すすいだ後に水を十分に切って水切り棚に干す(ボウルは斜めにして重ねる)。		・ボウルの縁の裏に水が溜まらないように、水を十分に切ってから干す。
5 雑巾洗いと乾燥	・バケツの中で雑巾を洗い、水を替えてすすぎ、固く絞って広げて干す。		・汚れがひどい場合は、こすり洗いをする。
6 布洗いと乾燥	・たらいにエコせっけんを入れて布を洗う。 ・水を替えてすすぎ、固く絞って広げて水を切り、しわを伸ばしながら干す。	 	・エコせっけんを使い過ぎないように注意する(キャップ2～3杯が適量である)。 ・固く絞らないと、床に水が垂れ落ちることになり、床が滑りやすく危険である。
7 化学モップで床ふき	・足ふきマットを洗い場の縁に移動する。 ・作業が終わった箇所から化学モップをかける。 ・掃除用具箱の前で化学モップからゴミを振り落としほうきとちりとりでゴミ箱に捨てる。	 	・水モップの床ふきが終わったら、足ふきマットを元に戻す。

8 水モップで床の水ぶき	・モップ絞り器に水を入れて水モップを洗って絞り、その後にモップ先を2つに分けて手で絞る。 ・床に落ちている粘土やゴミなどを水モップで拭き取る。 ・作業台や粘土バケツなどを、声をかけ合いながら協力して移動し、水モップをかける。 ・点検をして、拭き取れなかった粘土やゴミなどを水モップや雑巾で拭き取る。 (水モップ柄の上部の持ち方)  (水モップ柄の下部の持ち方) 	   (水モップを使う姿勢)  (水モップ柄の上部の持ち方)  (水モップ柄が長い場合の持ち方) 	・モップ絞り器だけでは水を十分に切ることができないため、手で絞ることを忘れない。 ・絞り方が弱いと床に水が残り、床が滑りやすくなり危険であるため、しっかりと絞る。 ・作業台は2人以上で声をかけ合って協力し、まわりに十分に注意を払って移動する。 (水モップのかけ方) 1) 枠取りをする。 2) 枠取りをした箇所を水モップを左右に動かしながら、少しずつ後ろに下がる。 3) 身体とモップが離れすぎないように、爪先の直前を拭く。 4) 同じ速さで後ろに下がる。 5) 拭き跡が重なるようにして拭く。 拭き跡 (良い例) (悪い例)  
----------------------------	--	---	---

9 ゴミ箱と 黒板の後 始末	・ゴミ箱のゴミの量を判断して、所定の場所に捨てる。 ・黒板をきれいに消して、黒板消しクリーナーをかける。 (以上、通常の掃除です)		
-----------------------------------	---	--	--

その他の注意点

使い終わったバケツやたらいは重ねずに、伏せて置く。

雑巾やボウルなどを洗った水は、水切りザルを通して捨てる。

実習室に入ったら、乾いている道具があれば優先的に使ったり片づけたりする。

洗い場が汚れている場合は、水を流してデッキブラシでこすり、ドライワイパーを引いて水を切る。

(デッキブラシ)



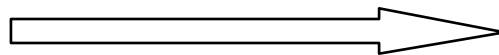
(デッキブラシを使う姿勢)



(ドライワイパー)

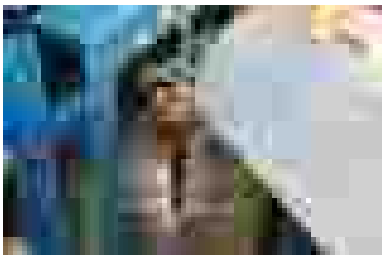
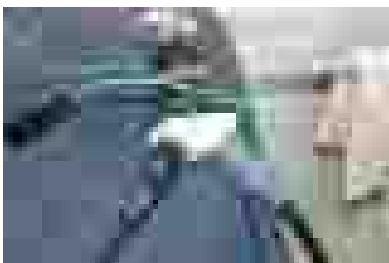
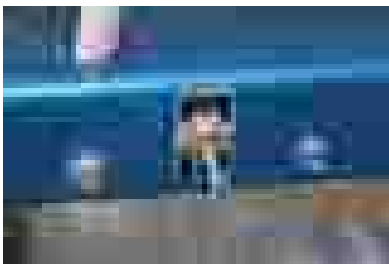
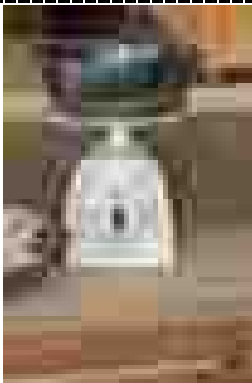


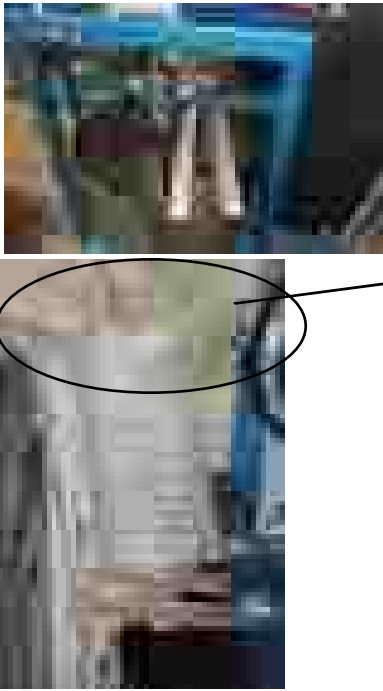
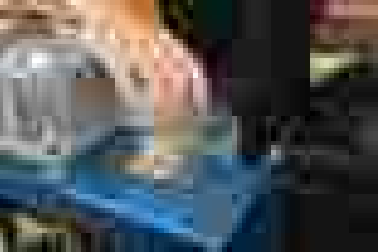
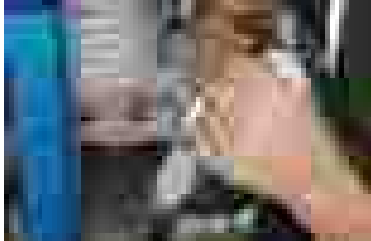
(ドライワイパーのかけ方)

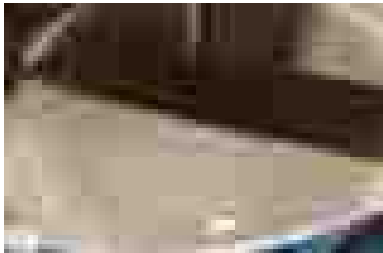
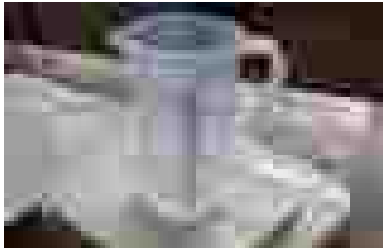
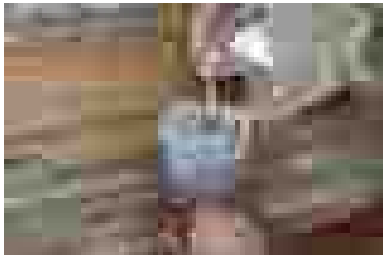
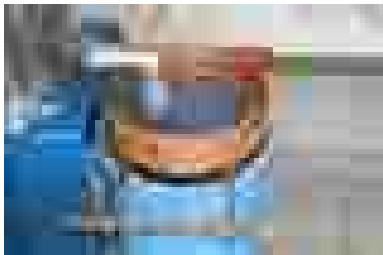
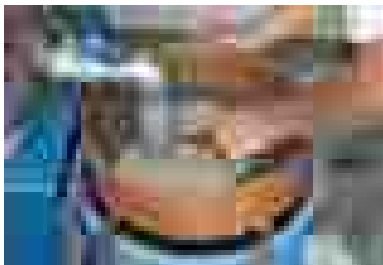


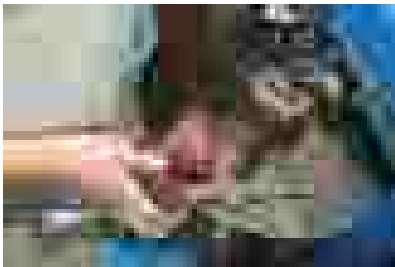
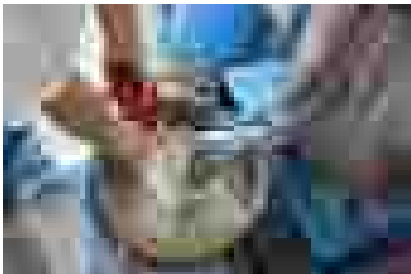
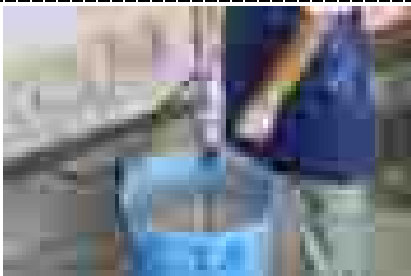
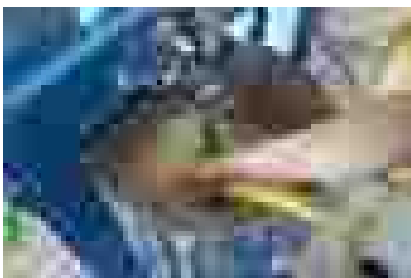
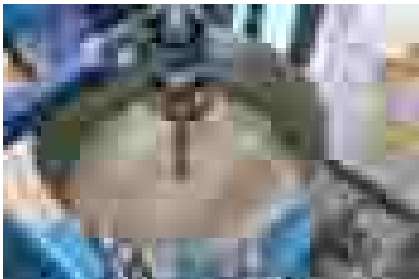
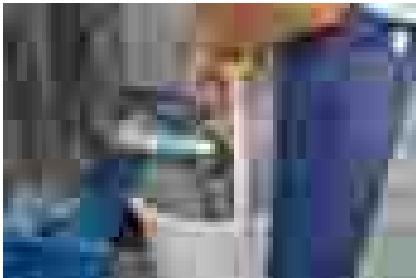
週末には、スポンジと洗剤を使ってシンクを洗う。

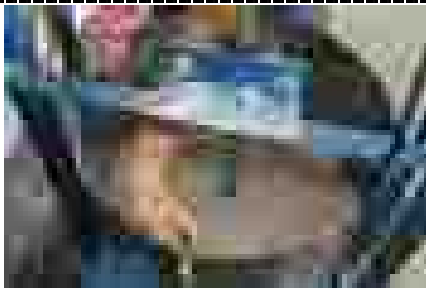
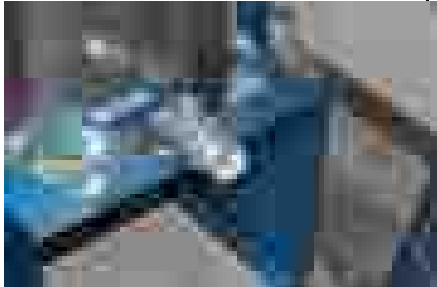
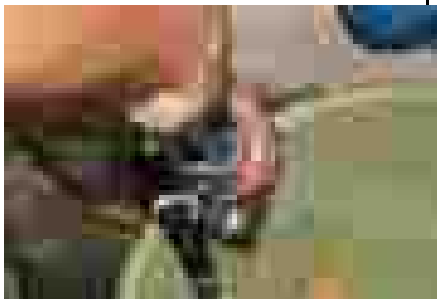
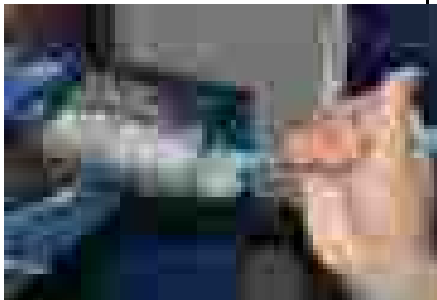
週末には、足ふきマットに巻かれているバスタオルを洗濯機で洗い、物干しに広げて干す。

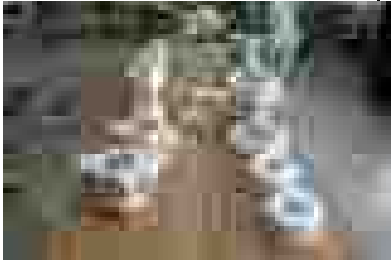
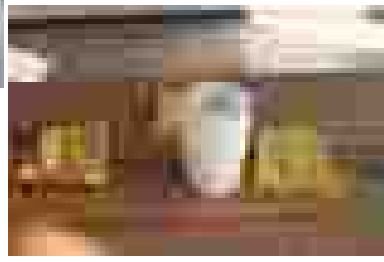
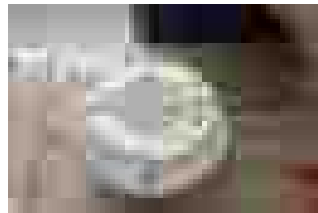
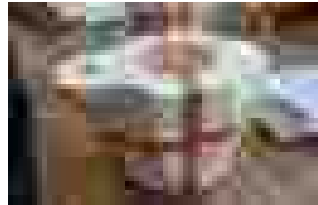
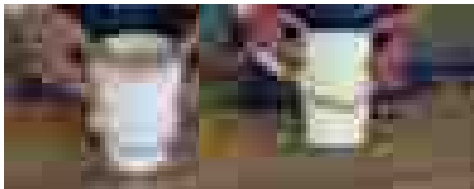
泥しょう	材 料	泥しょう		
	用 具	ボール、計量カップ、ふるい、ゴムべら、組み板、ペットボトル（泥しょう用）、たたら板、デジタル秤、計量カップ（硅酸ソーダ用）、混ぜ棒		
作業工程	作 業 内 容	作 業 図		留 意 点
1 準備	使う道具を準備する。			・使う道具～ボール、計量カップ、ふるい、ゴムべら、組み板、ペットボトル、はかり
2 確認	攪拌機がきれいかどうか確認する			・汚れていたら、スポンジ等できれいにする
3 水入れ	計量カップで、攪拌機に水を入れる（１０リットル）			・寒い時期には温水を使っても良い
4 電源	攪拌機のコンセントを入れる 攪拌機のスイッチを入れる	 		コンセントについては作業終了後必ず抜く 声をかけるようにする →「電源入れます」
5 計量	粉碎した粉を１kgずつ計り、ボールに入れる			合計１０kg以上入るので、最低１０個作っておく。→硅酸ソーダ投入後さらに追加する

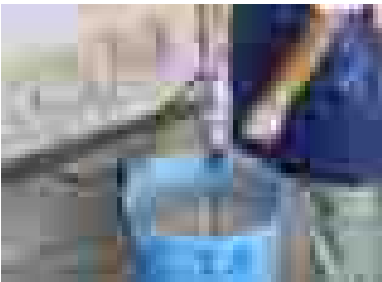
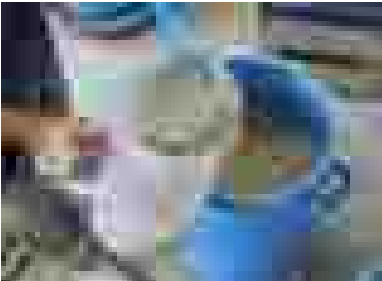
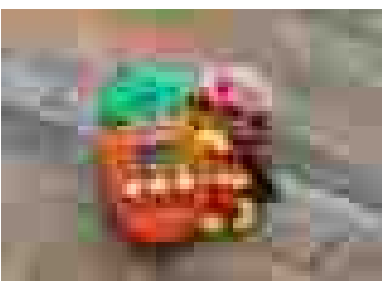
6 準備	組み板をセットする たたら板を2本用意し、ゴムで片方を結び、左の写真のように置く。 ゴムと反対側に泥しょう用のペットボトルをセットする。		・ 入れやすいように洗い場の方にペットボトルをセットする。 ・ 道具類が中に落ちないようにきちんとセットする。 上部は機械本体にガムテープで固定する。
7 投入	泥しょうを入れる。最初はペットボトルから入れ、次に小さなカップ、泥しょうの状態を見ながら、ボールから直接入れる	 < 小さいカップで入れている写真 > 	・ ペットボトルの先からゆっくり落ちるように入れる。早く入れすぎるとつまってしまう。また、早く入れすぎると溶けきらなくなってしまうので注意する。 ・ と同様ゆっくり入れる。 ・ ~ と同様にゆっくり入れる ・ 泥しょうの状態を確認しながら行う。わからないところがあれば、教師に確認する。

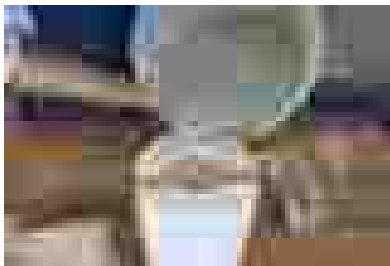
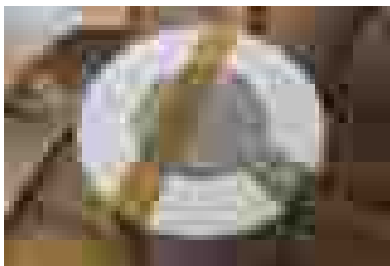
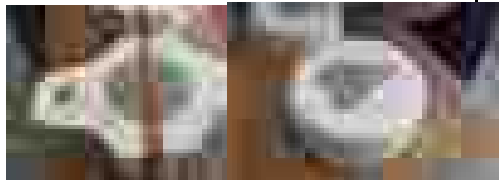
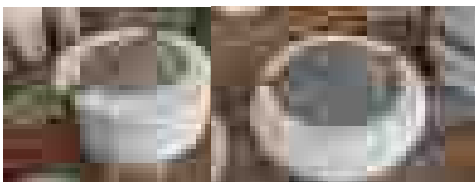
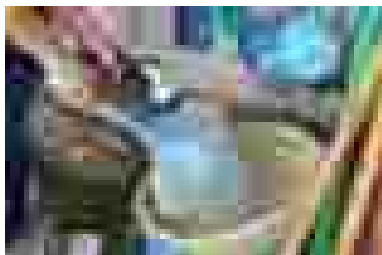
8 確認	10杯全部入れたら泥しょうの状態を確認する		・もう少し入るようであれば入れる。教師が確認する。
9 薬品	硅酸ソーダを投入し、さらに追加する。	  	この工程は必ず教師が行う。 計量カップ、デジタル秤を準備する 適量硅酸ソーダを入れる お湯を入れる 溶けきるまでかき混ぜる 攪拌機に入れる 粉碎粘土を追加していく ■泥しょうの状態を確認しながら入れる。最終確認は教師が行う。
10 泥しょうだし	完成した泥しょうをバケツに移す。	 	攪拌機の電源を切り、コンセントを抜く。 泥しょう用のバケツの上に組み板とふるいをセットする。 泥しょうをゆっくり出しながら、ゴムべらを使いこしていく。 少なくなってきたらスポイトを使い、ふるいや攪拌機の中から吸い取る。

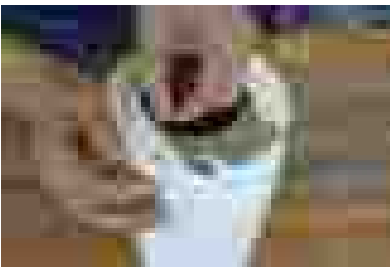
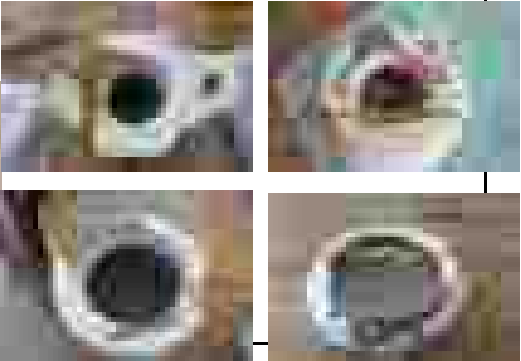
		 	
11 攪拌	バケツの中の泥しょうをハンドミキサーで攪拌する。		この工程は泥しょうを追加した時に行う。
12 後片付け	使った道具の後片付けを行う。	  	攪拌機に水を入れてうるかしておく。 攪拌機から水を出す。 スポンジでこすり、きれいにする。 攪拌機の配管口をブラシで洗う。

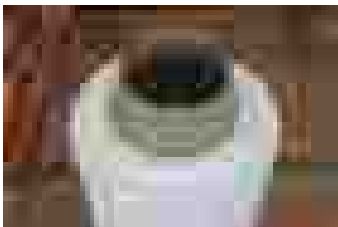
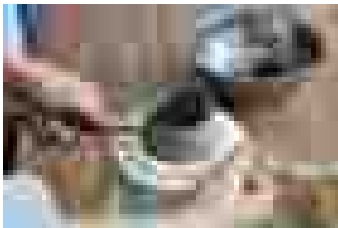
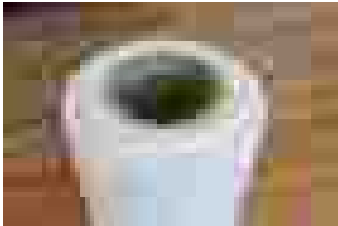
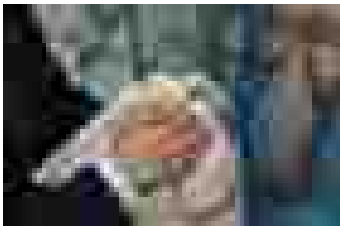
			
			
			
			

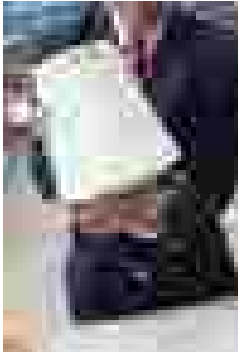
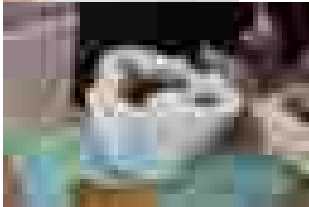
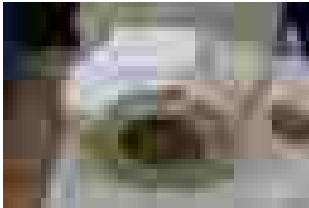
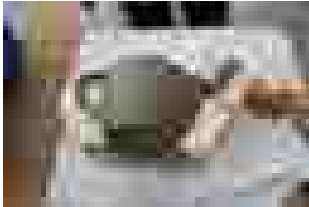
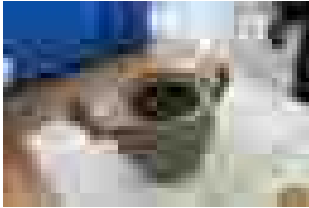
鋳込み	材 料	泥しょう		
	用 具	計量カップ（泥しょう用）、ハンドミキサー、雑巾、バケツ、柄杓、輪ゴム、石膏型、薄刃カッター、ボール、キッチンタイマー		
作業工程	作 業 内 容	作 業 図	留 意 点	
1 準備	使う道具を準備する。		・使う道具～計量カップ（泥しょう用）、ハンドミキサー、雑巾、バケツ、柄杓、輪ゴム、石膏型	
2 ゴ ム かけ	石膏型にゴムをかける。 泥しょうを入れる順番に石膏型を並べる 石膏型のまわりにぬれ雑巾を準備する 並べ方 	   	・ゴムをかける時には、石膏型に傷がつかないように下に乾いた雑巾を敷いて行う。 ・石膏型の種類によってゴムのかけ方が違う。 ・基本的にはゴムは上から下にかける。 （例）ピアマグ  （例）豚の香炉  豚の香炉は横2本ゴムをかける ゴムがねじれていないか確認する。 ・石膏型からで泥しょうが漏れた時にすぐに拭けるように準備しておく。 石膏型にはふれないようにする（石膏型が水分を吸わないように）	

3 攪拌	・泥しょうをハンドミキサーで攪拌する	 	・しっかり持って攪拌する。 ・ハンドミキサーを回さず、バケツの中心で止めておく ・攪拌後ハンドミキサーは水を入れたバケツの入れておく(空いた時間に洗う)
4 鑄込み	計量カップに柄杓を使い泥しょうを入れる。 キッチンタイマーの時間をセットする	  	・泥しょうを入れる量は、計量カップの8分目(こぼれ防止のため)。 ・入れ終わったあとは、バケツの蓋を必ずする(ホコリ混入防止のため) ・豚の香炉は一気に入れるようにする。(ムラができないようにするため) この写真では入れすぎです！ あくまでも8分目くらいまで入れる。 時間をセットして、注ぎ終わったあとすぐにスタートできるようにする。 時間についてはその都度教師に確認する。 →おおよその目安は最初30分。 その後は状態を見ながら10分ずつ追加する。(H23年度は最長50分)

	石膏型に泥しょうを注ぐ	 	・こぼしてしまった場合、全部入れ終わった後に拭く ・泥しょうカップの量に注意しながら入れる(大きい石膏型の時は継ぎ足ししなくても済むようにする) ●ここまでを手早く行わないと、授業中に乾燥しない!
	全部入れ終わった後、キッチンタイマーのスイッチを押す		 
5 洗い物	・キッチンタイマーが鳴るまで洗い物をする。 - 洗うもの～ハンドミキサー、柄杓		泥しょうカップは継ぎ足す可能性があるので作業台に置いておく →継ぎ足しは石膏型によって違う(H23はピアマグのみ) ・ハンドミキサーを洗う時には必ずコンセントを抜いて行う。コードも雑巾で拭く。 ・洗う時に使うスポンジを使い分ける ・作業台も雑巾で拭いておく(次の作業のため) 鑄込んだものがあつた場合 →スポンジ掛けを行う(けずりは先生が行う。前日に行っておく)。
6 確認	・キッチンタイマーが鳴ったら、石膏の状態を確認する。		・石膏型の状態や、気温、湿度によって違うので判断は先生が行う。状態によっては時間の追加もある。

7 乾燥	状態を確認し、OK だったらバケツに泥しょうを戻す。 戻し終わった後、石膏型は乾燥棚に置いておく。	 	・入れた順番に泥しょうを戻す。 ・石膏型が傷つかないように乾燥棚に乾いた雑巾を引いておく。
8 後片付け	・使った道具の後片付けをする - 泥しょうのバケツ		泥しょうのバケツはまわりをきれいにする
9 確認	・乾燥棚の石膏型が乾燥しているかどうか確認する。		■ 確認のポイント ・泥しょうが指につかない！ ・中まで乾燥している！ 自分で判断し、最後は教師に確認してもらう。
10 バリはがし	乾燥した石膏型を作業台に移動する ゴムを外し、バリ取りをする。	 	バリはがしは、泥しょうを少し取って丸めて行う。 ビアマグ～はがし終わったら、蓋を取る。 

	余分な部分をカッターで切る 石膏型を乾燥棚に入れる	  	基本的には教師が行う。生徒に行わせる時も、石膏型が傷つけないように気を付ける。 午前の作業の時は、蓋をしておく。午後の作業の場合は蓋を外しておく。
11 後 片 付 け・掃 除	・使った道具の後片付けと掃除を行う。		・外したゴムは、洗った後、雑巾で拭いて元に戻す。 ・掃除の手順は普段の掃除と同様
■ここからは放課後の活動			

12 型 外し	石膏型から製品を外す。	    	- 石膏型を外す時には、石膏型に傷がつかないように乾燥した雑巾を下に引いて行う。 - 石膏型の種類によって外し方が違う - 豚の香炉については、外した時に目と鼻を針でくりぬいておく。
13 乾 燥	外した製品は、コンテナに入れて乾燥させる		
14 片 付け・ 清掃	使った作業台や道具を片付け掃除を行う。		

よりづくり 技法を学ぶ	材 料	スフレ鉢の製作		
	用 具	道具箱（針、差し金、コテ、切り糸、弓）、手回しろくろ、たたき板、ボウズ、布、タタラ板、のべ棒、ぞうきん、バケツ、トースカン、ボウル、なめし革、スポンジ		
作業工程	作 業 内 容		作 業 図	留 意 点
1 準備	・ 道具箱、タタラ板（5mm×2）のべ棒、布、粘土、手回しろくろ、たたき板、ぞうきん、ボウズ、トースカン、ボウル、なめし革、バケツ、スポンジなどを準備する			・ 道具に汚れや粘土が付いていないか確認し、使用する前に必ず水拭きする。 ・ 空気や表面の傷に注意しながら伸ばす。また、表面がしわになっている場合はまだ伸ばせる。 ・ 布面を下にして手回しろくろに乗せる。 ・ 差し金で直径を測りながら余裕を持って切断していく。（切りすぎに注意） ・ 針の持ち方は鉛筆持ち、または4本の指で握る方法がある。針がぶれないよう、回転に負けないような持ち方 ・ 切断は右利きの場合、左腰を作業テーブル側面に付け脇の下をしめる。 - 針がぶれない工夫
2 底板づくり	・ 厚さ10mmに伸ばした粘土を手回しろくろの中央部に乗せる。 ・ 手回しろくろを回転させ、回転しているうちに針で規格（直径110mm）通りに切断する。			
3 よりづくり	・ 粘土の塊を切り糸で直方体状に切り取る。（「より」を作りやすいよう） ・ 軽く握りながら粘土をソーセージ状にする。 ・ 両手のひらを使い、ソーセージ状の粘土を転がしながら均等の太さに整えていく。			
4 成形 積み上げ	・ 一段目の「より」は、二段目以降のよりよりやや太くてよい。 ・ 手回しろくろに乗せた底板の外径を目と指で確認しながら一段目のよりを乗せていく。 ・ 「より」の太さ、ひびなど表面を確認し片端を針で切断する。		  	・ 紐状の粘土を「より」と呼ぶ ・ 「より」をつくる際は、作業テーブルをぞうきんで拭き湿り気を与えながら行う。 ・ 転がす時間が長いとよりの表面にひびが入りやすいので手早く短時間に作成する必要がある。 ・ 一段目の「より」は、親指よりやや太い程度。 ・ 「より」の置き方は底板の外周と「より」の外周を合わせる ・ 底板とよりの隙間が大きいと空気が入る可能性が高いので一段目の「より」の置き方に注意する。 ・ 「より」の太さが均一な部分を選ぶ。

・「より」の外径に沿って一周させたところを針で切断し、つなぎ合わせる。

・底板に乗せたよりの内側半分を人差し指で底板中心に向かってつぶしていく。

・底板の外径粘土を親指で押し上げ、乗せた一段目のよりと一体化させる。

・底板表面の凹凸がないよう人差し指やボウズを使い内側を整える。

・底板とよりを接合させた側面は、水でぬらしたコテやたたき板を当てながら整えていく。

・二段目のよりを一段目同様につくり、一段目の上に重ね乗せる。

・二段目のよりの内側半分を親指で上から下方向へつぶしていく。

・一段目外側の「より」を親指を使い、二段目の「より」と結合させる。

・以降、規格（決められた）の高さまで同様の方法で「より」を積んでいく。

・途中、側板の高さが水平でないときは、トースカンで印を付け弓で切りそろえる。

・三段目以上積み上げた後、「より」の厚さを指で確認する。指をそろえて両手でつまんだ粘土同士を引き寄せるようにして厚さを確認する。



・底板の外径を左手指で押さえながらつぶしていく。

・つぶした粘土を中心まで持って行かない。

底板がすり鉢状にならないようにする

・底板とよりの隙間がないよう確実に一体化させる。

・ボウズは4本の指で確実に握り、左腰をテーブル側面に付け脇の下を締め手首を固定する。

右利きの人の場合

ボウズがぶれないような対策

・ボウズと同様な方法で、コテやたたき板を当てる。手首がぶれないよう配慮する。

適宜、弓で切りそろえてもよい

・外径が膨らみすぎないように左指で「より」の外側を押さえながら内側を整えていく。

・底板と「より」の間に空気の間隙ができないよう注意する。

・一段目と結合させる時、底板まで二段目の「より」を持って行かない。一段目と結合させた後、余った粘土は横にスライドさせる。

・適宜、外側はたたき板やコテを使い整え、内側はボウズを使い整える。

手首を固定したたたき板やボウズがぶれないようにする。

手回し回ろくろが回転している間、たたき板やボウズを当てる。

・切りカスが内側に入った場合は、針などで確実に取っておく。

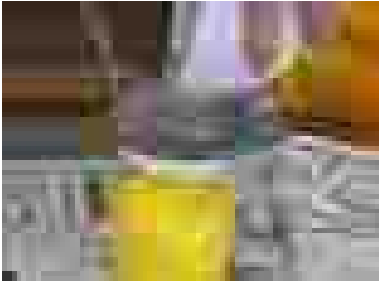
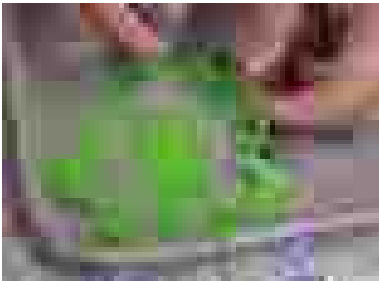
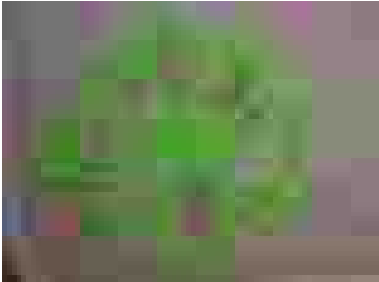
・ろくろを手でゆっくり回転させ、トースカンで印を付ける。

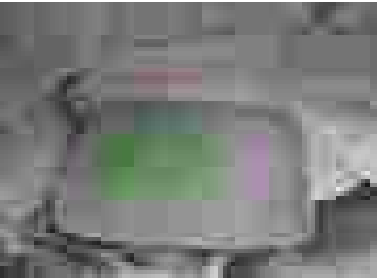
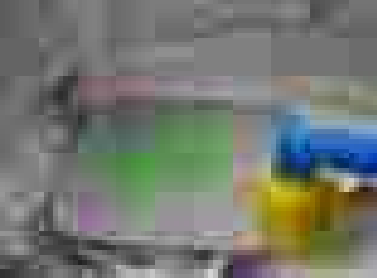
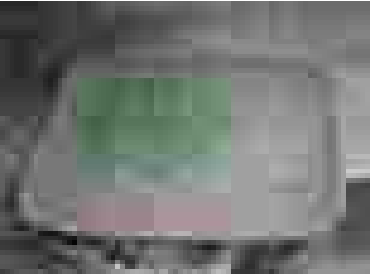
トースカンの使用は、あくまで印を付けるためである。

均一な厚さにすることと、寄せて開かないようにするために

口縁処理	・「より」を均一にし、厚さを薄くするため、底板部分から側板内外面をスポンジでぬらし中指でつまみ引き上げる。 ・適宜、外側はたたき板を、内側はボウズなどをで整える。 ・規格の高さまで積み上げたら、トースカンで印を付け針で切断する。 ・なめし革をかける前に、口縁を親指、人差し指、中指でつまみ締める。	   	・スポンジに水を含ませすぎないように注意する。(製品が水びたしにならないように) ・ろくろが回転している間に下から上へ引き上げる。 ろくろの回転と引き上げるスピードは一定に保ち、回転が遅くなったら手を離す。 側板の厚さを均一にするために行う。 ・中心がずれないように整える。中心がずれると回転にムラができる。 ・トースカンの高さが適当であるか差し金で確認する。 ・口縁の上面、内外面の三方向を指でつまむ。 ・なめし革は水を含ませすぎない。
仕上げ	・口縁をなめし革で整える。 ・内側と外側は、絞ったスポンジで整える。また、内側にたまった水気は確実にスポンジなどで取っておく。	  	・持ち方は、左指でなめし革の端をつまみ、右親指と中指で口縁にかぶせたなめし革を挟むようにする。 ・マグカップのように口縁の角を丸くしない。

完成形

スパッタリング (化粧土×ポンプ霧吹きの場合)	材 料	素焼後の製品、色化粧土		
	用 具	乳鉢、乳棒、ポンプ霧吹き、色化粧土、水、新聞紙、段ボール、轆轤、型紙、ピンセット、ボウル、雑巾、電子秤漏斗、あみなど		
作業工程	作 業 内 容		作 業 図	留 意 点
1 化粧土液をつくる	・化粧土を必要量計量し乳鉢に入れ、1：1の割合の水で溶く。ダマがなくなり、きれいに溶けたら、さらに調整で水を加える。			刷毛目で使用する場合は1：1の割合でよいが、霧吹きやポンプ霧吹きを使用する場合は目詰まりして出ないので薄めて使用する。
	・調整した化粧土液をポンプ霧吹きに入れる。			ポンプ霧吹きの容器に化粧土液を移す際に、目の細かい網で漉して、漏斗を使用する。
2 型紙等をのせる	・絵付けをする時に周りに飛散するので段ボールや新聞等を用意する。			広範囲に飛散するので、周囲に物を置かないように注意する。
	・製品の上に切り紙やテンプレートなどを、絵付けしたい場所にのせる。			切り紙の場合は事前に開いてのばしておく。平らな状態になっていないと、浮き上がってしまい、模様がぼけてきれいでない。
				製品によっては絵付けする場所が曲面の場合もあるが、その場合は切り紙を霧吹きで水をかけたり、雑巾で軽くおさえるなどして少し湿らせると曲面に沿いやすくなる。

3 絵付け	・飛散防止用の新聞紙を貼った段ボールに製品をセットする。 ・化粧土や呉須などを吹き付ける。 ・切り紙やテンプレートなどをはずす。切り紙の場合は使い捨て。テンプレートの場合は洗ったり、雑巾で拭くなどして再度使用する。	   	新聞紙は製品ごとに取り替える。 吹き付ける際には、型紙を狙いすぎないのがコツ。型紙に向かって吹きつけると風圧で型紙がずれてしまう。 切り紙やテンプレート上に絵付けした化粧土や呉須などが溜まっている場合は、すぐにはずさないで、ある程度乾くまで待ったほうがよい。 完全に乾いてから透明釉をかけるが、この時の透明釉はボーメ40程度。掛け方はくぐらせる程度。通常の透明釉の釉がけと同じ時間かけると、化粧土や呉須が透明釉の中に溶け出てしまうので、十分注意して手早く施釉すること。 使用後の霧吹きポンプは管の中に化粧土や呉須が残らないように完全にきれいになるまで洗浄する。
--------------	---	--	---

3 研究推進委員会プロジェクト研究

(1) 研究の目的

4月、今年度のプロジェクト研究では何に取り組むかという職員アンケートを実施した。その結果をもとに、研修部内で研究内容を協議した。その後の職員会議を経て、「本校の教育をキャリア教育の視点に照らし合わせながら、本校の良い所、改善ポイントを探る」という内容の研究をスタートさせることになった。そこで、まずはキャリア教育の概要を職員が学び、これまでの教育課程・教育内容の成果と課題を洗い出すことで、今後の研究の進め方を検討していくことを目指し、『本校としてのキャリア教育の進め方の洗い出し』という主題を設定した。

本研究は、次年度以降の校内研究全体の方向性を示すことを目的として取り組む。具体的には、第6次研究の計画の素案をまとめるところまでを目標とする。

(2) 研究の内容と方法

本研究は、研究推進委員会（以下「委員会」と略す）が主体となって進める。委員会には、研修部、教務部、進路指導部、学年主任、学科長が委員として所属しているため、今後の研究について協議する場として最適であると判断した。

基本的には、委員会担当の研修部員が中心となって進める。まずは委員会内でキャリア教育の概要を学習し、共通理解を図る。次に、今後の研究の進め方について簡単なレポートを作成する。委員会でレポートを発表・協議し、その結果を踏まえ「第6次研究の方向性」を作成する。この素案について検討を重ね、素案を確定する。

(3) 研究推進計画

- 10月 キャリア教育学習会
- 12月 レポートの作成・発表・協議
- 1月 「第6次研究の方向性」の作成・検討
- 2月 全体研修会にて発表

(4) 研究の実践

キャリア教育学習会は、委員会担当の研修部員が学習資料を作成し、委員会内で計2回実施した（資料1・2参照）。キャリアとは何か、まずはイメージを共通認識することから始め、本校の現状や道内外の取り組み（実践事例）について学習した。学習を通して、キャリア教育の必要性について確認することができた。

次に、学習会を踏まえた上で「キャリア（教育）の視点を生かして、本校でどのような取り組み・研究を進めていくのがよいか」というテーマで、各委員はレポートを作成した。発表するなかで「行事や授業をはじめとする教育課程をキャリア教育の視点で見直す必要がある」「キャリア教育について校内の共通理解が必要である」という意見が多く出された。また、見直しや共通理解の具体的な方法、研究組織や期間についての具体的な意見も多く出された（資料3参照）。

このレポート発表を受けて、委員会担当の研修部員が第6次研究の進め方について具体的に示した素案を作成し、委員会で検討を重ねた。その結果、「第6次研究の方向性」（資料4参照）をまとめることができた。これを2月の全体研修会で発表し、全職員に周知を図った。

（５）成果と課題

＜成果＞

キャリア教育学習会では、本校におけるキャリア教育の必要性について委員会内で共通理解を図ることができた。また、学習会後に全体研修（研究中間発表会）が行われたため、同様の資料を全職員に配布し、共通理解を図る足がかりとすることもできた。

また、レポートの作成を通して、委員はキャリア教育の概念と本校の教育課程・内容とを照らし合わせ、本校の目指すべき姿を具体的かつ現実的に考えることができた。そして「第６次研究の方向性」をまとめることができた点は、大きな成果と言える。

＜課題＞

本研究は、あくまで「次年度の研究のための研究」にすぎない。よって、キャリア教育の概念や必要性の共通理解、「第６次研究の方向性」の周知理解を全職員に浸透させることは、次年度に残されている課題である。

また、この方向性に沿って研究を進めるということは、これまでにない研究組織形態によって、これまで以上に全校的な取り組みで研究を進めるということでもある。現段階で見通しを持てる限り、具体的に計画したとはいえ、実際に動き出してみなければわからない点も多い。研究の進め方に不具合があれば必要に応じて再検討し、その年度の到達点に辿り着くことができるよう、創意工夫していかなければならない。

（６）資料

資料 1	キャリア教育学習会資料（第１回分）
資料 2	キャリア教育学習会資料（第２回分）
資料 3	レポートのまとめ
資料 4	第６次研究の方向性

注：資料２のキャリア教育学習会第２回においては、道内外の取り組み（実践事例）についても学習しましたが、資料が膨大なため、本研究紀要においては掲載を割愛させていただきます。主に取り上げた事例は以下の通りです。

～学習活動内の工夫・取り組み～

- ・東京都立青島特別支援学校 都市園芸科
- ・埼玉県立特別支援学校 羽生ふじ高等学校 農業技術科 園芸コース

～学校としての取り組み～

- ・さいたま桜高等学園
- ・東京都立神井特別支援学校

～組織としての取り組み～

- ・京都市立総合支援学校 京都教育委員会
- ・鳥取県「鳥取発！農福連携モデル事業」

～校内研究の進め方の実践例～

- ・北海道小樽高等支援学校
- ・北海道新篠津高等養護学校
- ・広島県特別支援学校教育研究会
- ・岩手県立総合教育センター

「キャリア教育」について考える

～ 第1回 堅苦しいことをやっつけて、柔らかくとらえる ～

H23.10.12 研修部担当

はじめに

「キャリア教育」という言葉自体が、堅苦しく、どこか善人ぶった感じというか…なので毛嫌いする方も多いらしいです。参考にした本『キャリア教育の心理学』の著者である下村英雄氏も、キャリア教育は理想主義的なところがあり、限界があると述べています。しかし、キャリア教育を意識せざるを得ない現状があることも確かです。さしあたって、難解な言葉をかみ砕いて、キャリア教育に対するイメージが持てるような研修にしたいと考えています。難しい話にしたくないので、ざっくばらんな雰囲気が進められたらいいな～と思っています。

(1) 「キャリア教育」とは何なのか

数ある「キャリア教育とは」という堅苦しい定義…古いモノから順にご紹介します。

「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」

中央教育審議会答申 初等中等教育と高等教育との接続の改善について（H11年12月）

「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—（H16年1月）

「キャリア概念」に基づいて、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

文部科学省『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—』（H18年11月）

現場でこんな説明されても、「？」だらけですよね…。

では、これはどうでしょうか。

生涯にわたる自分のキャリアを、自分で考えるようにするための教育。

学校段階で自分のキャリアを考える重要性を理解し、そのための方法を学び、

学校を出てから自分で自分のキャリアを考えていけるようにするために必要な教育を行うこと。

下村英雄「キャリア教育の心理学」より

(2)「キャリア」という横文字をどうイメージするか

「キャリア」の意味が、まだ不透明ですよ。そこで、まずは堅苦しい定義のご紹介です。

「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—（H16年1月）

学問的な定義もあり、この分野に長けた D.E.スーパーは、このように言っています。

「キャリアとは生涯において個人が果たす一連の役割、およびその役割の組み合わせである」

「キャリア」の語源はラテン語の carrus（荷車）で、車が道をずっと走っていくような「続くもの」という考え方・状態を指すそうです。これを訳そうとした専門家たちは「経歴」「進路」「職業」という言葉を当てたそうですが、意味が限定されてしまって、しっくりしなかったため、そのまま「キャリア」という言葉が遣われるようになったらしいです。なので、日本のキャリア教育の理解は、各自の解釈で決まってしまう面があるそうです。



従来の「キャリア」イメージ図

Q：どんなイメージが持てるでしょう…？

本来の「キャリア」イメージ図

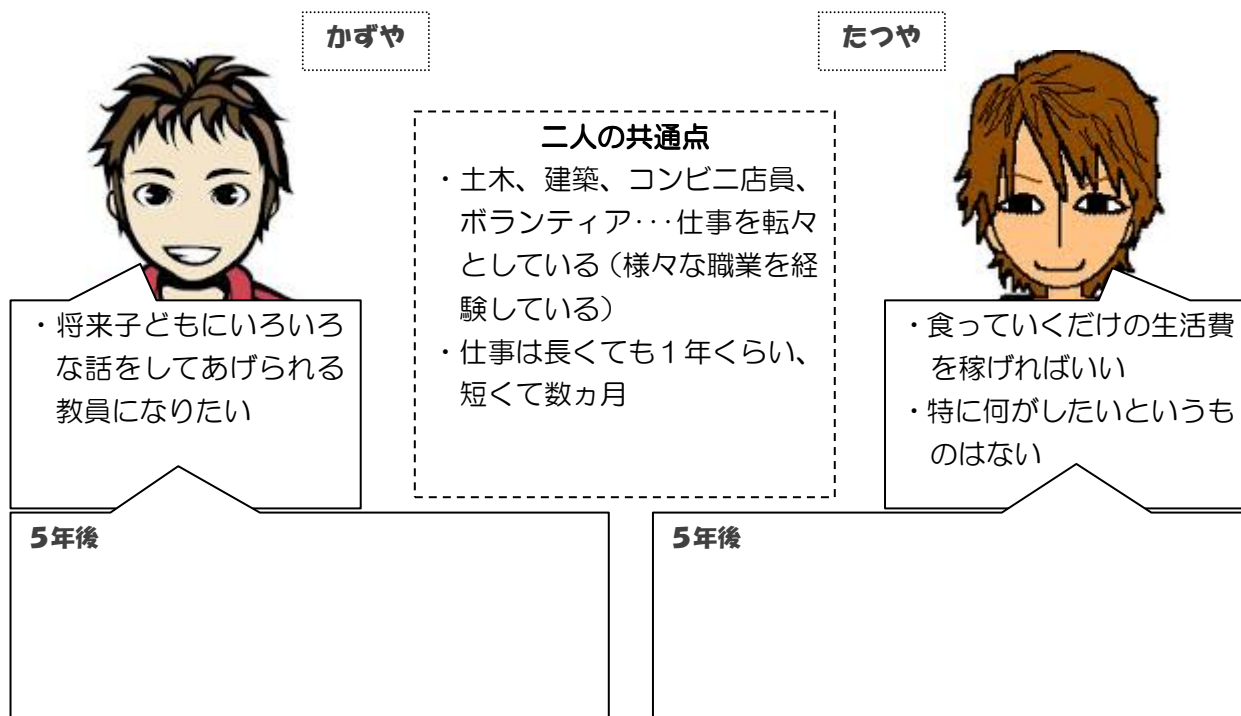


いずれにせよ、この「キャリア」という言葉、“仕事や職業を中心とした何か”について言っています。こんな文章もありました。質問投稿サイトの文章なので、引用としては望ましくはないのですが…。

「子どものときは、家の手伝いをしたり、学校での様々な役割があります。また、就職したり、結婚することによってまた新たな役割が生じます。さらに、地域社会とつながる中で、様々な役割を果たしていかなければなりません。すなわち、人は生まれてから死ぬまで様々な役割や立場を行いながら生活していく。」
(キャリアという言葉の意味についての投稿文より) 出典不明（はてなキーワード）

人は産まれて死ぬまでずっと「キャリア」を積み重ね続け、生きている。といったところでしょうか。

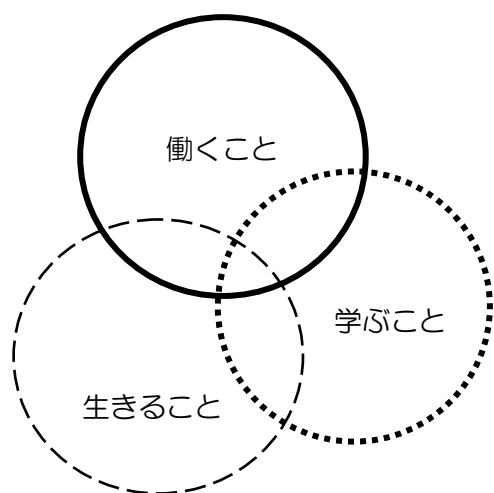
Q：数年後、彼らはどうなるでしょう



自分がいまやっている仕事（こと）が、次に繋がっているという感覚、将来に役立っているという感覚を持てなければ、仕事に対する不満が募り、ちょっとしたトラブルもストレスになり、仕事自体に大きな不満を抱き、職を転々とし…ニートになり…と悪循環に陥るでしょう。

つまり、____の感覚（考え方）、すなわち自分の人生全体という視点から物事を考えるということが重要であると言えます。

では、子どもを育てる側の我々大人（教師、保護者、地域住民、企業の社員、施設の職員…）は、すでにこのような考え方を持って生きているのでしょうか…？



キャリア教育の重要な3つの要素は、左図の3つであると言われています。

長く「働く」ためには、「学ぶこと」も続けていく必要がある…そうすることで、幸せに「生きること」ができる…

この3つがくっついている（つながっている）ことが望ましいというのが、キャリア教育の根幹にある発想です。

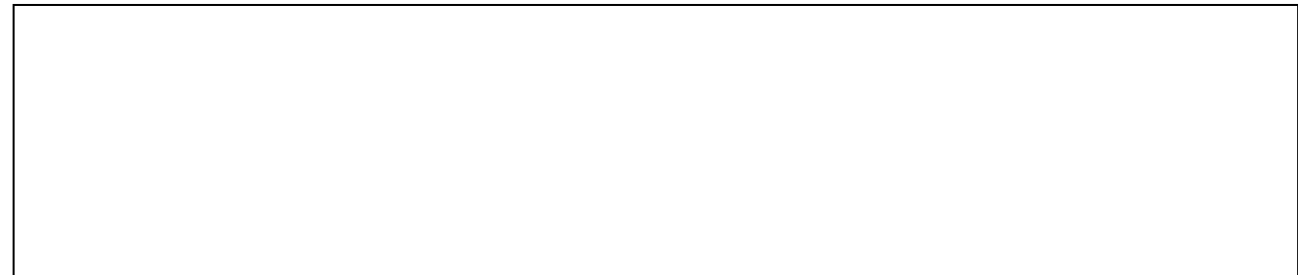
我々は、どうでしょうか。

卒業した生徒たちは、どうでしょうか。

(3)「キャリア教育」を実践する・・・って、具体的には？

キャリア教育は、単に職業や仕事を決めるだけではなく、その後の生活を考え、それに備えた準備をさせようとするものです。

本校でも実践していることは、たくさんあるはずです。



ところで、今の時代は変化の激しい時代です。情報化・国際化・技術の進歩等によって、働き方は様々になった一方、働きやすいとは言いきれない世の中になっています（雇用形態の多様化、能力主義、効率化・・・フリーターやニートの増加の一因）。なので、キャリアという考え方をもちにくいのは確かです。

しかしながら、社会の動きが激しくなり、複雑化し、見通しの持てない世の中を生きる上では、決まり切った一本道をいかに選ぶかではなく、より根本的に、自分が進む道をいかに切り開いていくかが重要になっています。

つまり、卒業までに職業や仕事を決めるだけではなく、卒業後のキャリアを自分で作り上げていくための力を身につけさせる必要がある・・・と言えます。具体的には、新しい知識や技術が必要になるたびに、**自分で情報を集め選択する力、自分で勉強する力、それを仕事や生活に生かす力**（勉強の仕方を学ばせる、勉強したことを生かす方法や喜びを学ばせる）を身につけさせる教育が必要なのではないでしょうか。

このあたり、今までの本校の取り組みとしては・・・どうでしょう。

以上のような現状、本校の教育活動全体を今一度検証し、改善していくことが、次年度からの研究のミソになってくると思います。

以上を踏まえて、あらためて、キャリア教育とは・・・



生涯にわたる自分のキャリアを、自分で考えるようにするための教育。
学校段階で自分のキャリアを考える重要性を理解し、そのための方法を学び、
学校を出てから自分で自分のキャリアを考えていけるようにするために必要な教育を行うこと。

本校でも、15年間に及び、たくさん実践してきているはずです。ただ、時代変化に伴って、教育実践に対する見方や考え方が、以前よりちょっと変わった（はっきりした）だけ・・・な気がします。

「キャリア教育」について考える

～ 第2回 なぜ今、キャリア教育が必要なのか ～

H23.10.21 研修部担当

（4）「キャリア教育」を实践する・・・さらに具体的に

前回の振り返り

- ・キャリア教育は、単に職業や仕事を決めるだけではない
- ・卒業後の生活を考え、それに備えた準備をさせようとするものである
- ・本校でもたくさん実践している
- ・しかし、時代の変化についていけるように、自分で情報を集め選択する力、自分で勉強する力、それを仕事や生活に生かす力などを身につけさせる教育活動はまだ足りない・・・？
- ・こうしたことを踏まえ、本校のあらゆる教育活動を再検討・改善していくのが来年からですかね・・・？

というところで終わりました。

では、検討・改善していくにしても、どうしたらよいのか・・・

ヒントになりそうなことを、『キャリア教育の心理学』から抜粋しました。

- ・学校では、日々の勉強が将来働くためのもの、生きていくためのものであることを理解（実感）させる。
 - ・家庭では、親がどのように働いて、家庭の生活を養っているのかを学ばせる。
 - ・地域で働く大人が、いかに地域を、そこに住む一人一人を支えているものであるかを見せる。
 - ・学校・家庭・地域が互いに連携をとり、力をあわせて、子どもに働きかけていく。
 - ・そして「働くこと」「学ぶこと」「生きること」が重なり合い、続いているという感覚を持たせる。
 - ・ただし、職業に興味を持ち、将来働くことばかりに目がいってしまうようではいけない。
 - ・早く社会に出たがる一方で、国語や数学などの基礎的な勉強をしなくなってしまう。
- （必要なことだけ学んで、他は学ばない人は、教養がなく視野の狭い人間になってしまう）

大学生を見ると、勉強も部活も友達つきあいも、総合的にうまくいった人ほど、就職活動もうまくいっている。ただでさえ見通しの持ちにくい、変化の激しい時代に対応するためには、（教科を）学ぶことだけに傾いていても、働くことへの意識だけに傾いていてもダメ。

- ・職場体験学習にしても、仕事の大変さや職場の決まりを学ばせるだけではなく、現実の職場で学校の勉強がいかに大切にされているかを教えることが大切。
- ・「インフュージョン」という手法を用いる（が、米国で失敗しているので工夫必要）

何かに何かを注ぎ込む、というイメージ。例えば、「国語」の授業に「キャリア教育」を注ぎ込むと・・・

・職業人として働くことについて述べた文章を題材として取り上げる

要は“一石二鳥”“まぜる”という発想

・自分の将来や人生を考えさせる教材を用いて作文を書かせる など

しかし教師間連携＝キャリア教育への共通認識が必要

(5)「キャリア教育」なぜに今必要？・・・データから見る必要性

表・図1

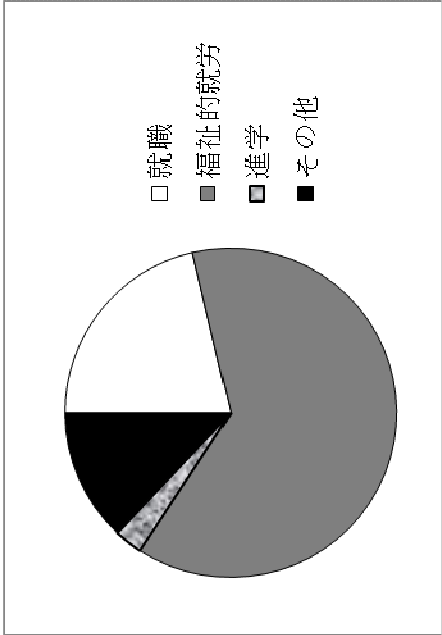
まず、本校の卒業生の動向です。(1～12期生)

	就職	福祉的就労		進学	その他	卒業生数合計
		通所	入所			
男	29	90	31	4	18	172
女	17	46	14	2	10	89
合計	46	136	45	6	28	261

(福祉的就労合計 181)

※ 入所・通所についてはショートステイ・私的契約を含む)

※ 2011年度現在



このような表を掲載していますが、動向が複雑で所属先が不明確であるケース、動向がつかみきれないケース等があり、データとしては曖昧な側面があります。論拠としては弱いですが、これしかないのをご了承ください。

表2 次は、就職に関する数値の変化です。

	1期生	2期生	3期生	4期生	5期生	6期生	7期生	8期生	9期生	10期生	11期生	12期生	合計
卒業生数 (A)	23	18	22	17	18	23	21	23	25	26	24	21	261
卒業時の就職者数 (B)	7	5	4	2	0	3	4	5	4	6	0	6	46
卒業時の就職率 (B÷A)	30.4%	27.8%	18.2%	11.8%	0.0%	13.0%	19.0%	21.7%	16.0%	23.1%	0.0%	28.6%	17.6%
福祉的就労・技専等からの就職 (C)	1	0	1	2	1	0	4	1	5	1	1	0	17
離職者数 (D)	6	2	3	1	0	1	3	4	3	2	0	0	25
現在の就職者数 (A+C)-D=E	2	3	2	3	1	2	5	2	6	5	1	6	38
現在の就職率 (E÷A)	8.7%	16.7%	9.1%	17.6%	5.6%	8.7%	23.8%	8.7%	24.0%	19.2%	4.2%	28.6%	14.6%

網掛け部分は、卒業時点よりも就職した人が増えたことを示しています。しかし、何らかの形で就職できた人 (C) よりも、離職した人 (D) の方が

多く、結果的に現在就職している人は14%程度と、卒業時点を下回っています。

さらに、これらのデータをもとに、こんな計算もしてみました。

・卒業生に占める「卒業時就職していない者」の合計	式	$181 + 6 + 28$	=	215 (Fとする)
・「卒業時就職していなかったが、卒業後就職できた者」の割合	式	$(C \div F) \times 100$	=	7.9%
・「就職」を経験した者の合計	式	$B + C$	=	63 (Gとする)
・卒業生に占める「就職経験者 (G)」の割合	式	$(G \div A) \times 100$	=	24.1%
・就職経験者 (G) に占める「離職経験者 (D)」の割合	式	$(D \div G) \times 100$	=	39.6%
・卒業生に占める「(企業就労) 離職経験者 (D)」の割合	式	$(D \div A) \times 100$	=	9.6%

及川Tに伺ったところ、離職の理由には以下のようなものがあるそうです。

- ・職場の人への暴力 (本人は自閉傾向)
- ・職場の対人関係のもつれ
- ・GHの対人関係のもつれ
- ・意欲 (仕事を休みがち)

生徒自身の問題が大いなのは？
つまり本校の指導にも課題が…？

- ・農家手伝いだが、冬場は仕事がなく在宅
- ・会社が倒産
- ・家庭の事情
- ・家業手伝いのため

支援する側 (家庭、会社、地域) に課題があるのでは？
つまり本校の支援の仕方にも課題が…？

このような人たちは、離職してから進学、福祉的就労へと結びついたケースもありますが、在宅というケースもあるそうです。
また、上記と同じような理由で、卒業時点・卒業後の福祉的就労をも辞めたケースもあります。

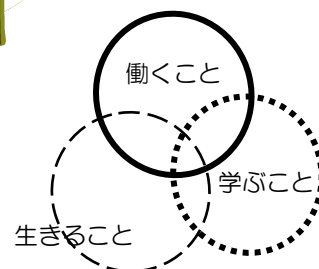
就職・離職に多く注目していましたが、「就職 = よいこと = キャリア教育の達成」とは限らないと思います。卒業時点で就職した人も、そうでない人も、それ後どれだけ豊かな人生を送ることができるのか…まずはそれを捉えて、本校の教育改善を考えるべきではないかと思います。

ここまでの まとめ

- ・「キャリア」とは、日本語では訳せない。
とにかく「続くもの」という感じ。
運転手を子どもとすると、こんなイメージ。



- ・キャリア教育＝進路指導・決定のみではない。
卒業後の生活を考え、それに備えた準備をさせるもの。
右図が根幹の発想である。これが教師も生徒も実感できる
ことが第一歩になるのではないか。



- ・本校でもたくさん実践してきているはずである。が、この発想のもとに行われてきた…？
- ・時代・社会も変化してきている（それに伴って生徒や家庭も）。それに対応できている…？
- ・本校卒業生の離職理由からも、実践の在り方、内容を見直す必要がある。
- ・自分で情報を集め選択する力、自分で勉強する力、それを仕事や生活に生かす力などを身につけさせる教育活動はまだ足りないのでは…？

以上を踏まえ、来年から本校のあらゆる教育活動を再検討・改善していくことが研究になると思われます。

次は **(6)「キャリア教育」他の学校・他県の取り組み** です。

キャリア（教育）の視点を生かして、本校で どのような取り組み・研究を進めていくのがよいか

<記入内容の例>

- ・ 結局、何（どこ）を目指すのか・・・？
- ・ 現在担当している授業・業務で、課題と思われる点は・・・？（困っていることは・・・？）
- ・ 各担当授業・業務で、改善できる（すべき）ことは・・・？
- ・ どのような研究組織が望ましいか・・・？
- ・ 何年かける、いつまでにどこまでなど、おおよその見通しは・・・？

○ “キャリアの視点で見直す” という趣旨の意見

- ・ 今行われている本校の教育課程をキャリア教育の視点で見直す！
- ・ キャリア教育の視点からの、本校の年間の指導計画の見直し。
- ・ キャリア教育を行ううえで、具体的にはどうしていくか（教育課程の中で）。現在の教育課程との比較。キャリアの視点でかけている部分があるの、ないのか。どこの部分で、どういう改善をしていけばいいのかの明確化。また、具体的にどういう視点を持って改善していくのか？（キャリアのどの視点を生かしてなど）。
- ・ 国総研のキャリア教育の類型パターンを踏襲して、本校の教育課程をキャリア教育の視点から見つめ直していくのか。（現1学年の研究！？）各学年や各学科、分掌などでそれぞれの考えを聞いてみるのはいいのかなと思う。
- ・ 校内外の授業や行事等の取り組みについての見直し（年間行事、単元配列、授業の視点、指導内容表、各行事のねらい等）。そして見直した内容の実践とその見直し（檜山北とコラボレーション？）
- ・ 形態、教科ごとの各学年の指導目標や、3年間で身につけさせたい力を学年ごとに段階表のような形で整理・整とんする（例えば、1年目は形態・教科で本校で身につけさせたい力を洗いだし、整理する。2年目は指導段階表を作る。3年目は実際に使って授業を行う。HRで定期的に進路について考える時間をテキスト的なもので行うなど）
- ・ 年間計画を立てていく段階で、例えば国語と作業／数学と作業／生単と国語／生単と数学／生単と作業／といったように、あくまでも例えばですが、それぞれの授業が相互にリンクした学習計画を（全てを絡めるのは無理だと思いますが）立てられないものでしょうか。そうすることで、学習したことの定着をはかり「社会生活を送る力＝キャリア」を身につけさせられないものでしょうか。
- ・ 本校の各教科で行っているキャリア教育の部分のあぶり出しから系統図をしっかりとつくる。それを発展させるために課題や問題を確認する。これを全体提示し、該当教科の内容の見直しを進める。

○ “共通理解を図る” という趣旨の意見

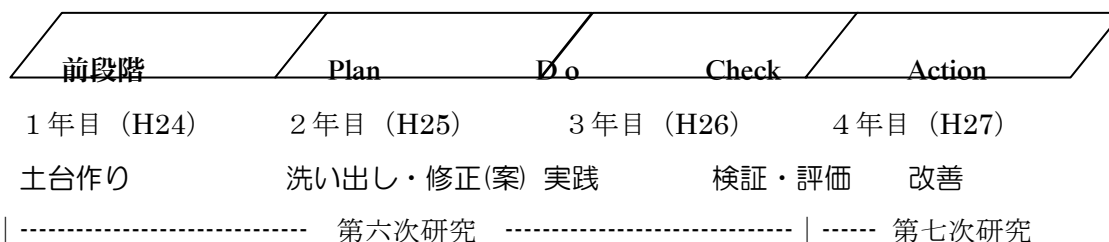
- ・キャリア教育の概念を全員に周知できれば効果があると考えます。(みんなで考える意識)
- ・キャリア教育というものを知る、再認識する。そして本校でのキャリア教育について「共通理解」する(指導者のねらい、目的、子供に付けさせたい力、卒後を見据える、教科同士での共通点を見つける、模索するなど)
- ・キャリア教育に関する全体の共通認識がまず第一だと考えます。ここが確定しないと次に進めないような気がします。そのままのキャリア発達をそのまま利用するのか。何かオリジナルを考えていくのか。
- ・キャリア教育の概念は、とらえ方によってはとても幅が広いので、本校としてどのようにとらえていくのかの話が研究の前半であっても良いのでは。
- ・キャリアの勉強会を行い、教職員全体の共通認識を深める。そして、学校としてのキャリア教育目標の設定をする。
- ・勉強会のようなものを、全体研修やその他機会を設けて行った方がいいのでは(指導者自身もキャリアを積み重ねていく必要があるため)
- ・本校としての目指す姿、キャリア教育のあり方を明確にして、全職員で共通理解が図られるようにする。
- ・職業教育を中心とした学校教育をする立場である本校の使命と、檜山唯一の特別支援学校ゆえ子どもの実態は様々であることの間をとったところ、本校の目指すところはどこなのか・・・を具体的にはっきりさせ、それを全職員で共通理解する。
- ・多様な進路目標に対応する、それを実現するための本校としてのビジョンを出し、共通認識する。

○ 上記以外のことに関する意見

- ・各担当授業・業務での改善点としては、作業学習で働くために必要な基礎(意識・態度など)を重点的に繰り返し指導すること。各学年でバラバラではなく学科内で統一した取り組みができればよい。さらに生徒の適正や自己理解を促すために自学科を取り組みも必要。(他学科がなくなっただけですが……)
- ・研究組織はプロジェクトチームを編成し、教科から担当者をひとりずつ選出するのはどうか。(小回りの効く人数)
- ・研究期間としては、計画、実行、評価、改善を考えると4年～5年がベストではないか。
- ・学年単位で同じ研究主題のもとに研究しても、並べてみると研究主題に対する答え(本校の第○次研究としての結論)が見えにくい。実際問題進めにくいかもしれないが(それはやり方次第だとして)、全校的に取り組むのならば学年卒(あるいはその他の部署などの卒)を越えて、課題別に組織した方がいいのでは。課題が解決するたびに組織も変えて・・・今まで通り3年間続けるというのはどうか。

資料4 第六次研究の方向性

(1) 研究期間全体のイメージ



(2) 1 年目のイメージ

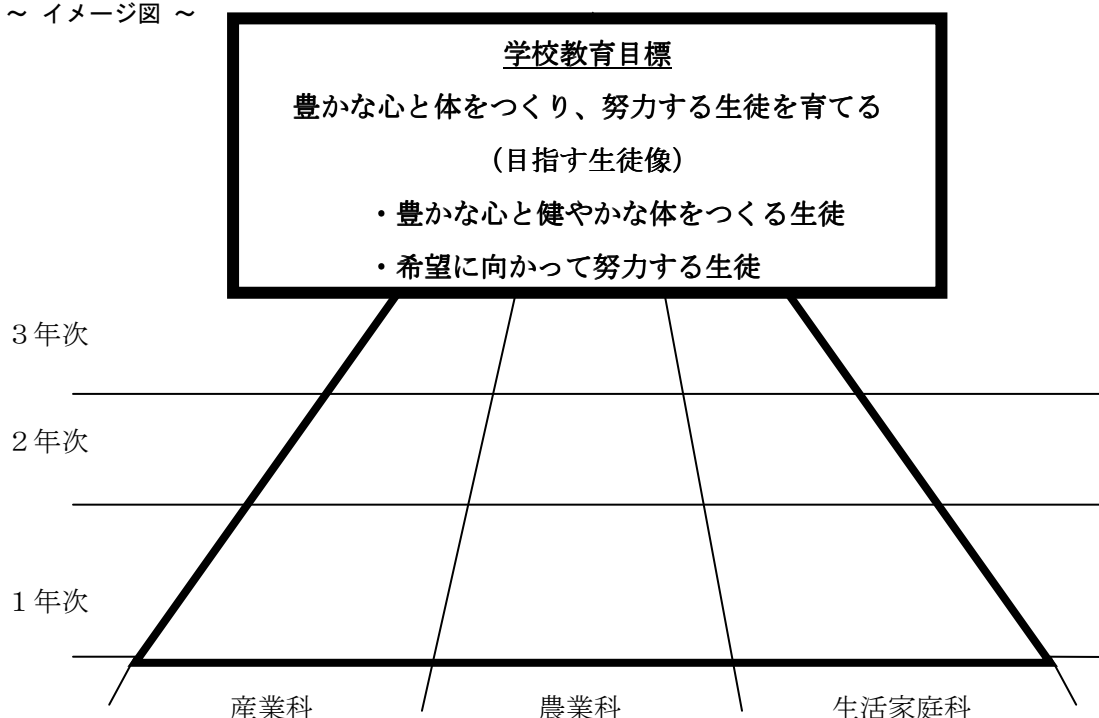
<第1段階> 研究推進委員会主催・キャリア教育の勉強会【4月～7月】

- ・4月と6月の全体研修において勉強会を行い、キャリアの観点、キャリア教育の必要性やその中身について、職員間の共通理解を図る。
- ・学年部会においても、勉強資料を配付するなどして、学年内でも勉強会が行われるような仕組みを構築する。

<第2段階> 学科・学年の教育方針（指導段階）の明確化【8月～3月】

- ・1学期に実施した勉強会を経て、まずは各学科における3年間の系統的な教育目標・方針（≡基礎・柱・道筋）をはっきりさせる。

～ イメージ図 ～



これは、生徒の実態がある程度同じであるという前提で「学科」に振り分けられて入学しているためである。そのため、普段は作業学習に関する議題が中心の学科部会ではあるが、同じ実態程度の生徒に対する指導のあり方を、教育活動全体を包括的に捉えて協議する組織としては最適であり、系統的な教育活動のあり方を組み立てやすいと考えられる。

～具体的手順～【８月～１２月上旬】

- ① 各学科は、その学科の特性を踏まえた上で、各学年段階において身につけさせるべき力についてキャリアの視点から検討し、普遍的な目標や方針を考える。
- ② ①が出そろった段階で、教育課程検討委員会で協議する。
- ③ ②の結果を各学科に戻し、修正・調整する。
- ④ 以上を繰り返し、最終的にまとまったものを職員会議にかける。

- ・これを受けて、各学年は生徒実態と照らし合わせて、その整合性を協議する。そして、その学年段階で目指すべき（学科をまたいで共通した）指導目標・方針（≒基礎・柱・道筋）をはっきりさせる。

普段から学科より学年主体で動いている本校では、学科が違えども学年としての目標・方針は深く指導者にしみこんでいるはずである。ゆえに３年間の教育目標・方針を固める学科部会においては、各学年の指導者がある程度その学年の目標・方針や生徒実態、課題などについて話をされ、そのことが学科の立てる目標・方針に反映されているはずである。

つまり、３学科の「○学年段階の教育目標・方針」を並べてみたとき、それに大きな齟齬はないはずである。それならば、各学年で協議する際は、各学科の共通項を見いだして、それを指導目標・方針とすればよいのではないかと考える。

～具体的手順～【１２月中旬～３月】

- ⑤ ④を踏まえ、現在の学年団が、その学年段階において身につけさせるべき力についてキャリアの視点から検討し、普遍的な目標や指導の重点を考える。
- ⑥ ⑤が出そろった段階で、教育課程検討委員会で協議する。
- ⑦ 以上を繰り返し、最終的にまとまったものを職員会議にかける。

◎ 研究組織

- ・研究推進委員会（第１段階担当）

…役割分担し、全体研修時の勉強会を実施する。どのようなスタイルにするかは今後検討するが、各学科・学年の研究推進に役立てられるようなものにする。外部講師を依頼したり、全体研修時以外においても勉強会を実施したりする可能性もある。

- ・各学科（第２段階前半担当）

…前述の通り。

- ・各学年（第２段階後半担当）

…前述の通り。

◎ 研究サポート

- ・研修部（総括的な役割）

…従来通り4、6、10、2月の全体研修を企画・運営する（会場準備、司会、記録）。

また、研究推進委員会の運営を行う。

- ・教務部（学校教育計画に関する事項へのサポート）

…研修部と連携し、学校教育計画の様式等に関する検討を行う。

- ・教育課程検討委員会（各学科・各学年のコーディネート）

…学科・学年で出された目標・方針について協議を行う。

◎ 具体的な研究方法

- ・第1段階では、研究推進委員会が中心となって勉強会を実施する。
- ・第2段階において各学科は、学校教育計画（赤ファイル）の冒頭にある「学校経営の基本構想」、国総研から出ている「キャリアプランニングマトリックス」などと照らし合わせながら、2ページのイメージ図の空欄部分を埋め、教育目標・方針の明確化を図る。そのなかで、各学科の経営案を見直していただく。研修部と教務部が連携・検討し、新しい経営案のあり方を提案するので、それに沿って検討を進めていただく。
- ・同様の手順で、各学年においても指導目標・方針の明確化、経営案の見直しを進めていただく。

（3）2年目のイメージ

- ・2年目は、本校の教育を見直す段階と位置づける。
- ・教育課程（行事、授業等）、指導内容表、各教科・形態内の指導段階（指導の系統性）などを見直し、修正案を検討し、まとめる。
- ・研究組織は、1年目の成果と課題を受けて検討するが、1年目と異なることが予想される。関係分掌や部会が担当する方法、その枠を超えた研究グループを組織する方法などがある。
- ・教育相談や進路支援、就学支援など、保護者や外部とのつながりにおいて、1年目で築いた本校の教育の土台を周知してもらう。それとあわせて、相談・支援の在り方についても関係部署に検討してもらう。

（4）3年目のイメージ

- ・3年目は、1年目の土台、それをもとに2年目で改められた教育計画のもと、実践とその検証・評価を重点的に行う段階と位置づける。
- ・1～2年目でも検証等の必要に応じて研究授業（公開授業）は行うが、特に3年目は集中的にこれを行う。
- ・3年間の取り組みによる成果と課題をまとめ、次期研究へと引き継ぐ。

（5）4年目以降のイメージ

- ・第六次研究を引き継ぐ（深める）形の第七次研究が成されることを期待する。
- ・その頃には、また別の視点からの教育スタイルが世間の注目を浴びているかもしれない。そういった時代の流れも踏まえ、地域実情や生徒実態に即した教育が展開されるような研究を継続していく。

第Ⅳ章

寄宿舎の研究

1 はじめに

本校寄宿舎では、「個別の教育支援モデル」の構想を受け、個別の指導計画やフェイスシートの作成などを教務と連携して行ってきた。生徒の卒業後を見据えた指導計画の作成や、保護者や関係機関との連携が求められている状況である。寄宿舎ではこれまで個別の指導計画の作成方法について、職員へのアンケートや評価基準の見直し、様式の検討などを随時行ってきた。今年度については、昨年度からの課題となっていた I C F の理念に基づいたよりよい指導計画の設定、関係機関との連携を図ることができるよう実施方法について探っていきたい。

2 今年度の取り組みについて

今年度は以下の点を柱に研究を進めていくこととする。

よりよい個別の指導計画のあり方について

よりよい個別の指導計画に向けて、これまでの個別の指導計画を再度見直し、今まで以上に ICF の理念に基づいた個別の指導計画のあり方を検討していく。

3 実際の取り組みについて

これまで、寄宿舎内では「個別の指導計画」「舎室経営計画」「フェイスシート」について、様式の改訂を行った。同時に、個別の指導計画などを作成するにあたって評価の段階が記されている「記述観点」についても見直しを行った。しかし、「個別の指導計画」「舎室経営計画」「フェイスシート」の様式が改訂されたことで、作成の際に、記入内容や表記の周知に曖昧な部分が見られ、完成するまでに時間がかかってしまった。この課題を解決するために、研修部は記入の仕方について周知を行った。毎日、引継ぎ時に使用する連絡簿で全体に周知したり、個々の職員に記入方法を伝え内容を理解してもらうなどの取り組みを行った。よりよい個別の指導計画に向けて、部内で十分に検討した上でこれらの取り組みを行ってきたことで、記入内容や表記の周知に曖昧な部分が改善されてきた。

4 研究のまとめと今後の課題

寄宿舍は生活の場であり、生活を通し個々の能力に応じて生活技術の獲得を図り生活力の向上を目指している。寄宿舍指導員には、一人一人の生活を幅広く捉え個々の能力に応じた生活技術や生活の工夫を見出す支援の力が要求されてくる。こうしたことから I C F の理念を基にした「参加」を取り入れ支援していくことは、さらに幅広い支援の方法が見いだせる可能性があると考ええる。

生徒の卒業後の生活を見据えた個別の指導計画には、本人の願いや保護者のニーズが必要不可欠になってくると考える。個別の支援手帳の「個別の教育支援計画」には本人・保護者のニーズ欄があるが、これまで本校寄宿舍の個別の指導計画（資料 1 参照）や、フェイスシート（資料 2 参照）には、生徒の願いや保護者のニーズを記述していない。今後は卒業後の生活を見据えた個別の指導計画に向け必要になってくると考える。また、個別の指導計画やフェイスシート作成前に生徒の実態把握と同時に、将来的な願いと保護者のニーズを確認するため、生徒本人、保護者との面談を行うことで、卒業後の生活を見据えた個別の指導計画の実現が可能となってくると考える。

今後は、本人の願いや保護者のニーズを取り入れた個別の指導計画に向け、保護者や関係機関との連携をとり、具体的な個別の指導計画の様式作成に取り組んでいきたい。

前 期 評 価	後期指導目標	指導の手立て	年 間 評 価
・仕切りを付けて整とんするなど視覚的な方法で指導したが自主的に行うには至らなかった。今後は細かく言葉かけや確認を行う必要がある。	・自主的に、ロッカー内の整理整とんを行う事ができる。	・整とんの必要さを指導し、1ヶ月に1度整とん日を設定し自主的に行えるよう指導していく。	
どのように指導し、どのような結果がでたか記入して下さい。 前期で達成に至らなければ後期に指導を継続して下さい。 また指導を通し新たな目標設定をする場合は目標につなげるための実態を記入し、後期の目標につなげて下さい。		「～していく。」 でそろえて下さい。	年間を通しどのように変化が見られたのか記入して下さい。 次年度も指導継続の必要生があれば「今後も継続した指導が必要である」などの記載をお願いします。

平成 23 年度

個別の指導計画

目標の設定として、職員の主観ではなく、あくまでも生徒の視点にたった目標設定を行って下さい。（目標が高すぎると手立てや評価が難しくなる可能性があります）

男子○室 生徒名 ○○○○

学年・学科 ○年○○科

I Q-○○

舎室担当名 ○○○○

区分	項目	実 態	前期指導目標	指導の手立て
身 辺 自 立	①起床 ②洗面 ③歯磨き ④入浴 ⑤排泄 ⑥生理の手順 （女子） ⑦更衣 ⑧食事 ⑨整理整頓 ⑩洗濯 ⑪清掃	〈記入例〉 ③自主的に机上、ロッカー内の整理整頓を行う事が難しい。	◎自主的に机上、ロッカー内の整理整頓を行う事ができる。	・机の引き出しの中に仕切りの箱を入れるなどの整理整頓の仕方を視覚的な方法で指導する。
社 会 性	①公共機関の利用 ②交通機関の利用 ③買物 ④小遣い帳の記入 ⑤集団活動 ⑥日課の理解 ⑦決まり ⑧公衆電話の利用	フェイスシート と同じ内容を記 載して下さい。	重点目標は「◎」 とし、他の項目に ついては「・」と して下さい。 （重点目標は全 ての項目で2～ 3個の設定でお 願います）	生徒にとって効果的な指導方法を具体的に記入して下さい。 例） 視覚的：どんなものを用いて？ 模倣：どのように？ ※手立てを細かく書くと評価は行いやすいです。評価が大まかになってしまふと評価で具体的に書く必要があります。
健 康 安 全	①交通ルールを理解 ②災害時における理解 ③病気の予防 ④不調の訴え ⑤衛生に関すること ⑥定時服薬		文末は「～（する） ことができる」に統一して下さい。 （別紙にある観点表を参考に進めて下さい）	
対 人 関 係	①交友、異性関係 ②言語の受容、表出 ③言葉遣い ④あいさつ、礼儀			
備 考	フェイスシートと同じ内容を記載して下さい。			

フェイスシート／実態把握（寄宿舍）

（新規作成日：平成22年○月○日／作成者：○○○○）

区分	項 目	実 態
身 辺 自 立	① 起床 ② 洗面 ③ 歯磨き ④ 入浴 ⑤ 排泄 ⑥ 生理の手順（女子） ⑦ 食事 ⑧ 整理整頓 ⑨ 洗濯 ⑩ 清掃	
社 会 性	① 公共機関の利用 ② 交通機関の利用 ③ 買物 ④ 小遣い帳の記入 ⑤ 集団活動 ⑥ 日課の理解 ⑦ 決まり ⑧ 公衆電話の利用	・支援手帳に入るものです。 ・自立した項目については記入の必要はありません。 ・表記参考資料を参考に細かな実態を記載し目標へつなげてください。
健 康 安 全	① 交通ルールを理解 ② 災害時における理解 ③ 病気の予防 ④ 不調の訴え ⑤ 衛生に関すること ⑥ 定時服薬	
対 人 関 係	① 交友、異性関係 ② 言語の受容、表出 ③ 言葉遣い ④ 礼儀作法 ⑤ あいさつ、返事	
備 考	① 余暇・・・ ② 性格・行動・・・ ③ 上記の区分に当てはまらないものがあれば記入。	①、②は必ず記入して下さい。 ③記載なければ削除して下さい

第Ⅴ章

研究の成果と課題

1 今年度の研究のまとめ

一昨年度から第5次研究「社会参加・自立をめざした働く力の育成～教育課程の編成と授業の充実を目指して～」をスタートさせ、今年度が3年目、最終年度である。本研究と同時にスタートした教科学習（授業）としての「国語」と「数学」の指導も、3年目を迎えた。

学年別グループで取り組む課題研究においては、研究の方法は異なるものの、国語・数学的な指導にも着目した内容を含む研究がなされた。またプロジェクト研究では、昨年度取り組んだ個別の教育支援計画・個別の指導計画・通知表の在り方についての研究を継続したほか、産業科の作業学習に関する研究、研究推進委員会のキャリア教育についての研究がなされた。寄宿舎は、昨年度に引き続き個別の指導計画のあり方について研究を行った。一方、一昨年度進路指導部が行っていた調査研究については、昨年度と同様に今年度も実施していない。

（1）成果と課題 ～課題研究～

課題研究においては、各学年グループが生徒の実態や課題を踏まえた研究主題を設定し、授業の改善に取り組んだ。1学年はキャリア教育の視点も取り入れた作業学習、2学年は卒業生の現況から分析した課題点に特化した生活単元学習、3学年は国語と作業学習の連携を意識した国語的内容の指導について、それぞれ見直しを図った。

① 1学年部会

1学年においては、教職員間で「育てたい力」「キャリア教育とは」を共通理解できたこと、その上で「人間関係形成能力の育成」という授業づくりの方向性を3学科で統一し授業づくりができたことが成果といえる。研究を進めるなかで、生活面や他の領域・教科における指導の範疇である事柄が作業学習にも大きく影響していることが明らかになった。また、一昨年度プロジェクト研究でまとめ終えた指導内容表では、キャリア教育の観点をカバーしきれない部分があることも明らかになった。今後は関係する領域・教科や家庭・寄宿舎等との連携を密にして、作業学習という枠を超えたキャリア教育の推進を図ることが課題といえる。この成果と課題は、次年度から始まる第6次研究にも生かしていきたい。

② 2学年部会

2学年においては、卒業後の生活を見通すべき時期であることを踏まえ、職業生活を支える日常生活に関する力「生活する力」に着目した研究を行った。特に、家庭科に関する内容を指導する単元に焦点を当てた。食事と栄養に関する授業では、ホワイトボードミーティングという手法を用いた話し合い活動を取り入れることで、内容の理解を促すことに加えてコミュニケーション能力の育成も兼ねた授業づくりを工夫することができた。また、過去に受けた生活単元学習の授業が現在どれだけ生活に生かされているかを調査するため、現在グループホームもしくはケアホームで生活している卒業生24名を対象としたアンケートを実施した。実際に活用している知識・技術の質と量は、進路先の支援状況や本人の意欲によっ

て様々であることが明らかになった。今後は、アンケート結果と現在の対象生徒の実態の両方を踏まえ、さらなる指導・支援の工夫を検討していくことが課題といえる。

③ 3 学年部会

3 学年においては、昨年度の数学に引き続き、国語に焦点を当てた研究に取り組んだ。国語と作業学習の 2 つの授業において、指導の一貫性や系統性、関連づけを持たせ、国語的な力を伸ばすための指導・支援の工夫を行った。また、3 年間テーマとしてきた教科指導と領域・教科を合わせた指導の連携の効果がどれほどのものか、生徒にアンケート調査することで明らかにしようと試みた。すると、知識・技術が生徒の記憶に残っており、実際場面で活用できているというものもあれば、そうではないものもあるという結果を明らかにすることができた。指導の効果が現れている生徒がいたこと、職員間で連携を意識した授業づくりができたことは、3 年間の研究の成果といえる。しかし、指導の効果がまだ現れていない生徒もいること、職員間の連携意識をより強固なものとして定着させることについては、今後の課題といえる。

（２）成果と課題 ～プロジェクト研究・寄宿舎の研究～

プロジェクト研究は、課題研究の研究組織だけでは解決できない課題の解決に向けて、別の組織で研究を進めるものである。寄宿舎の研究は、学校の研究主題に基づいて独自にテーマを設定し、寄宿舎研究部を中心として進めるものである。

① プロジェクト研究

今年度は、昨年度に引き続き教務部・教育課程検討委員会が『教育支援計画・指導計画・通知表のあり方の整理』に取り組んだ。入学時に提出する書類と教育支援計画フェイスシートの項目統一、通知表を読みやすくするための様式改訂など、効率化に加えて利便性の向上をも目指した成果を残すことができた。来年度から実際に使用し始め、何らかの課題が見えてきたとしたら、それに対応していくことが今後の課題といえる。

また、研究推進委員会は『本校としてのキャリア教育の進め方』というテーマで次年度の研究をどう進めるかといった準備にあたる研究を行った。学習会や今後の方向性の図式化など、キャリア教育推進の礎を作ることができた点は成果といえる。第 6 次研究をこの方向性に沿って推進させ、次第に浮き彫りになってくるはずの本校のキャリア教育推進上の課題を解決できるような研究を実践していくことが今後の課題といえる。

さらに、産業科は作業工程表などの資料改訂に取り組んだ。複数年継続的に行う取り組みの初年度として、生徒へのオリエンテーション用資料の作成、指導者用の作業工程表の改訂に取り組むことができた。しかし、いずれも今後指導していくなかで再度の改訂が必要となる可能性もあり、そうした際には迅速に検討し、よりよいものに改訂していくことが課題といえる。

② 寄宿舍の研究

昨年度に引き続き、実態把握のためのフェイスシート、個別の指導計画、舎室経営計画のあり方についての研究を行った。特に今年度は個別の指導計画に焦点を当て、様式の改訂を行った。様々な形で作成方法を周知し、誰にとってもわかりやすい形を目指すことができた点は成果といえる。今後は、生徒や保護者のニーズを取り入れた書式を検討することが課題であるとまとめられている。さらに、3年間に及び書式の改訂に取り組んできたことも踏まえ、今後はこの書式を用いた指導計画に基づき、実際に生活指導していく中で明らかになる課題にも着目し、解決へ向けて研究を進めていくことも必要といえる。

2 第5次研究を終えて ～次年度に向けて～

次項の図表は、3年間の研究内容を時系列に示したものである。図1を見ると、研究グループAは対象生徒が3年間変わっていないが、研究グループB・Cは対象生徒が変わっていることがわかる。対象生徒が変わることで、研究の成果や課題を次年度に生かすことは、なかなか難しいものがあつた。表1・2は、課題研究以外の研究の推移をまとめたものである。プロジェクト研究や調査研究については、今後の必要性に応じて内容を検討し、取り組んでいくことが望ましい。寄宿舍の研究については、3年間同様の研究を続けて一定の成果と課題を得られたことも踏まえ、新たな視点による研究も検討していく必要がある。

今年度をもって、第5次研究「社会参加・自立をめざした働く力の育成～教育課程の編成と授業の充実を目指して～」を終えることになる。これまで様々な研究組織によって働く力を身につけさせるための授業づくり、指導・支援の工夫と改善がなされてきた。それぞれの成果と課題は研究組織ごとにまとめられているが、それは各研究グループ内で把握しておけばよい、というものではない。研究グループという枠を超えて学校全体で共有するべきであり、それができてこそ本校としての第5次研究の成果といえるだろう。

また、どの研究グループでも共通している成果は、研究を通じて生徒の働く力を伸ばすことができたことである。一方で課題は、研究を通じて得た成果にさらなる工夫・改善を加え、よりよいものにしていくことである。次年度以降の研究は、これまでの第5次研究の成果と課題を生かしたものでなければならない。さらに、多様な困難を抱え変化する生徒実態、雇用情勢の変化といった情勢も踏まえ、研究を組み立てていかなければならない。

次年度からはキャリア教育を大きなテーマとした第6次研究がスタートする。今年度、研究推進委員会から示された方向性に沿って、全職員がいわゆる「今金版キャリア教育」を創造していくことが求められている。

図1 第5次研究 課題研究（学年研究）の構造図

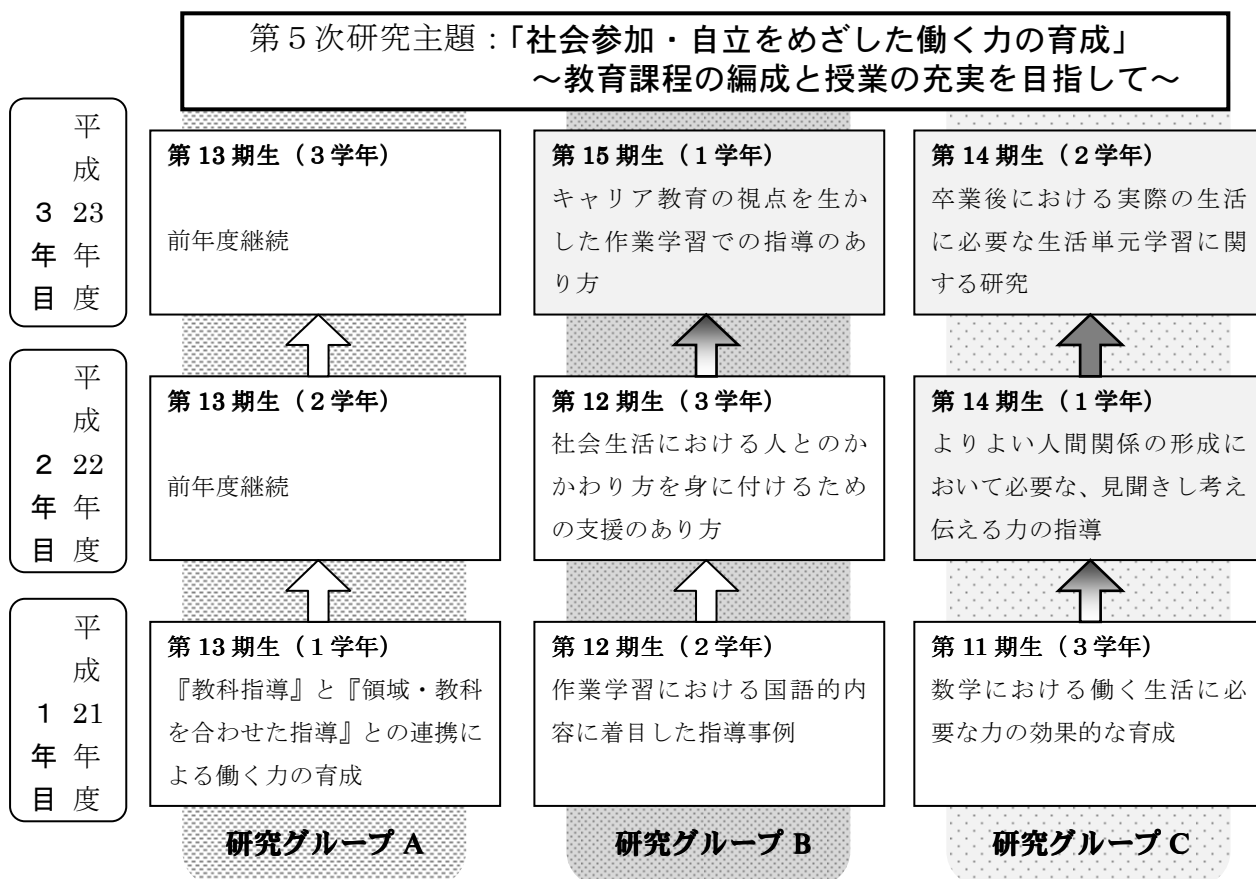


表1 第5次研究 プロジェクト研究

	教務部・教育課程検討委員会	研究推進委員会	その他の研究グループ
平成23年度 3年目	前年度継続	本校としてのキャリア教育の進め方の洗い出し	<u>産業科</u> 作業工程などの資料改訂
平成22年度 2年目	教育支援計画・指導計画・通知表のあり方の整理	なし	なし
平成21年度 1年目	なし	指導内容表の作成	<u>体力づくり部会</u> 体力づくりの見直し

表2 第5次研究 調査研究・寄宿舎の研究

	調査研究	寄宿舎の研究
平成23年度 3年目	なし	前年度継続
平成22年度 2年目	なし	よりよい個別の指導計画のあり方について
平成21年度 1年目	<u>進路指導部</u> 現場実習を通した課題の確認と考察	関係書類の再検討 (舎室経営計画・個別の指導計画・フェイスシート)

あとがき

『平成23年度 研究紀要 創』第14号をお届けいたします。

本号を発刊できることは、ひとえに本校職員の努力の賜であると感じているところです。校内研修（研究）の推進役である研修部、各学年の研修（研究）担当には深く感謝します。

今年度、本校では「生徒の進路（目標）実現」をめざし、「一人一人の特性・教育的ニーズに応じたキメ細かい教育活動」を展開する中で、「働く力と生活する力」の育成を図り、『社会参加・自立を目指した働く力の育成～教育課程の編成と授業の充実を目指して～』を研究主題（テーマ）に研修（研究）に取り組んできました。第5次研究の最終年度ということもあり、本号にはこれまで積み上げてきた一定の成果がまとめられています。

また、本号には最新の学校課題に対応した実践報告が数多く収録されています。例えば、平成23年度の「学校評価（特に教職員自己評価）」の検証を通して本校の学校課題として明確になった、①キャリア教育の研究・推進（キャリア教育の視点に立った教育課程の見直し）②授業評価等を活用した授業改善・授業力向上③生徒の変化に対応した生徒指導（規範意識の育成等）の充実以上の3点にかかわる積極的な取り組み等も収録されており、第6次研究を見据えた先駆的な実践記録集になっているものと確信しています。

学校教育の成否は教職員の指導力や人間性に負うところが大きいので、教職員の資質・能力の向上は不可欠であり、そのために校内研修（研究）の充実が最重要となります。今後も本校においては、学校課題を具体的な研究主題として共有し、課題解決のため、学校全体として計画的・組織的に取り組んでいかなければなりません。また、『真に開かれた、信頼される学校づくり』を推進していくにあたり、「自己評価」のみならず、保護者アンケートや地域の方々による外部アンケート、生徒のアンケート、学校関係者評価等の検証を通し、保護者や地域の声を吸い上げて研究主題（テーマ）を設定する等の工夫も含め、次のステップに向けた新たな積み上げが必要になってきます。

最後になりますが、研究成果に関しましてはまだまだ不十分な部分があり、「読みやすい研究紀要」になっているかについても懸念しているところです。

本校教育の推進のためにも、皆様に御一読賜り、御意見・御指導いただければ幸いです。

平成24年3月

北海道今金高等養護学校教頭

高 橋 一 矢

共同研究者

学校長 播磨 正一
教 頭 高橋 一矢
事務長 青山 義之

<教務部>

1 学年	天満 理恵 太田智恵子 出村 朱美	田中龍右ヱ門 早坂 麗子 上村 幸教	鐘ヶ江真知 佐々木真由美 阿部 昌弘	小松 裕樹 金子 亘義 橘 晴美	近藤 和也 木村 幸子
2 学年	山田 賢一 小原 雄一 水野 直子	野口麻衣子 青野由香利 小室 育恵	入田 貴広 丸山 充代 武田 資	東海林栄徳 山柿 紘子	三条真知子 佐々木光子
3 学年	岩城 研太 吉村 友里 小林 吾一	今野 優子 高田のぞみ 及川 文雄	福寿 吉人 加藤 奈都 中島 朋之	鈴木 美彩 大口 香織 藤倉 雄一	矢倉 一 若山 大輔

<舎務部>

上山 真人 松谷さおり 藤田 美華	山田 直人 和田 雅史 島野 五樹	竹端 賢一 清野 恵美 松尾 晴奈	川村 洋二 山本 絵理 齊藤 直美	伊藤 亮 泉波 拓也 三澤麻衣子
-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	------------------------

<行政>

遠藤 史憲 高野美智代	山崎 直樹	森谷 香	川崎 澄子	中村 和子
----------------	-------	------	-------	-------

平成 2 3 年度 研究紀要 **創** TSUKURU 第 1 4 号

発行者 北海道今金高等養護学校長 播磨 正一

発行日 平成 2 4 年 3 月 3 1 日

〒 0 4 9 - 4 3 0 4 北海道瀬棚郡今金町字今金 4 5 4 番地 1

TEL (0 1 3 7) 8 2 - 3 1 2 1

FAX (0 1 3 7) 8 2 - 3 0 9 2